里見八犬傳 第九輯 二十四五六

へ13
3986
2

門へ13
號3986
巻2

八犬傳第九輯下套下引

余性也僻常非同好知音不交也是从微軀生於江門而交遊罕于江門唯遠方有二三子在所謂和歌山篠齋南海默老松阪桂隠名久足是已約這個三才子毎見余戯墨諸編相喜評定寄之于余叺問當否為娯樂故郵書来往不為遠千里譬如鸞去雁来春秋不霊今茲逮本傳結局三才子逆聞之或詩或詞各詠所其長祝頌是書有始有終句句皆金玉不但增拙著之光耳褒賞幾過分矣雖慚愧不知所閣然不可藏秘箧且為蟫窠也即便附載於此以代小序云 時戊戌端月 蓑笠漁隠

昭和27年4月20日寄
東京都三郎氏贈
41-9678

頃者聞本傳垂圓團寔可羨稱也因題短韻一
律以寄于著作堂梧下
　　　　　　　　　　　　　默老半漁
發研新史褒稱周都鄙競需俟速郵繡口錦心優水
滸狗譚貓話壓西遊毫鋒靡敵芳流閣文焔摩空圓
塚丘騷客雅人比拱璧珍篇何復有朋傳

里見八犬傳をほむる長歌　小津久足

筆の海 机の上に ながるゝ人は 多かれど 海峯も はてしなく
文の苑 詞の花を やしなひて 常盤に 咲なからも 此年ごろに 利
あめつちに 志らるゝ 世毎に 朝夕 筆とりて 叢に 書つゝ
海さちも 山のさちをも えらみとり あつめて 詞の みのしろと
のこりなく 解て 世にある 名におへる 人の いにしへを 尋ねて
家の名の あらたしとても 語りつぐ 書のあまたを 世に出して
世にひろく 志らるゝ まことの 人の 言の葉は 川と流れて 今も
みやこには さらにもいはず いなかにも 見る人ごとに 書をよみて
くれなゐの 中にも 高く 聞えたる 此國に いまし給ひし 安房の
さとみの 君の 家に 仕へまつりし 里見の ちかひを 果したる
八つの犬 といふ 氏人の つたへを あつめて 世に 天の下
申すも さらなり 手にとりて 見る人ごとに 家の 初めを あかしつゝ

梓弓東ねしなかきは流の川る葉はあれどもつらねたるのゆかりき
にほひ出るものにはつたへまさりぬらえたちつゞきぬめりたるなみの石のよ
ぬすれ起にし中今に傳ふ所のことまさるは文はまさるの千年を
流れの葉もはなれしにも文國の名をつけ國に以ぬしく由ある名
ゆゑあるしか星ありそちをたらはきる杖のうちつしたる志なし子れ
ゆまの國にあかつしく中其名も末久しき五十まで四筋の絲を
杖の以傳しあれ起さ絵に志の字ふいふてのま志みん故氏あそみなみ
あそ子れ子え由も古西物語めつる人らはあなたふみの名に杖に犬た
ち内を海まるることら所にしも出もかしれ家人西

みつるさしくみかへしき手はかれしきを見つゝはあへなくしぞ
多くれ読ミ移きあらぬ犬か跡やふ深き世の中にさらめや

反歌

唐錦大和にしきもまさりてあやにしきつゞる書にも
骨をかくしるゝも玉の鳥も犬き由しまこも母

八犬傳跋文に云さらめる長野子しる寄

篠齋野叟

事好なき文遊の徒に漢和の類に刈れ蓑笠かるゝ飛ぶき
漢 倭 漁 翁 且 暮
のりかゆまとれ多みの海あさり柳ならす何事こそ机ふ舟

うき世の筆の綾に海ゝ移りかすきとの筆月に
あらたなるあまたの歎も出すゆゑしく筆の物語かたりきこえ
絵かゝとよもあらはに世なとれあやしき半空の蜃楼をみる
海の市なる奇しき妙を見ゆる丘なくて巧み美なり
あらゆるかに思ひ描く筆ゆゑに又みえぬ波路
まさに道正しき善を述べ緋め横たはる浦の蓋醢懸し
理を從へし志兎して聊も意にそむかぬ
義を宗とし深くも志ありて家のうち魂の玉藻數々に
ゆゝ果ぬめの勝れしとて[illegible]深くひゝきて見る極み

春はくるゝ仮丘そのかたも誰も待たれゝ此稚ゝ見えむ
中に海見ゑかゝり故ゝ勝手もかの志賀島
安房の渺にあらはに光り出し八川の靈玉西
八行かの文字なる海の濱藻の名に傳
富山に根さしの狗子の草犬を民なるとしての武雄
まさに雄さしに勇ましき天の名をや
厚きを執りつゝ海をさし友として
八人やみの傳なき緒長く巻も九
味あひて今卅年玉まさに數海全丘

[illegible]

○

蓑笠漁隱曰。斯錄前後錄客歲到來遲速而已。非撰擇以為伯季也。江湖繙閱百君子其熟思之

董齋盛義書 中西信圖

讀書自嘆

休向世間訴不平疎狂聊亦猪
人情淡來未了書中趣史外
浮名過此生 夏筱興繼稿

蓑笠漁隱又曰。是詩故鬼弱冠時所偶作曩攪遺篋而得之雖題詠非犬士之事然其要似夙知吾意衷而有斯志因錄備遺忘蓋彼之短命不見是書結局而逝矣不得無遺憾也。盛義

南總里見八犬傳第九輯下帙之下甲號九卷目録

卷第二十四

第百二十六回　政元弄權分正副使　犬江臨別借忠良僕

第百二十七回　能辯講軍記薦餅　窮鳥還舊巢巧囀

卷第二十五

第百二十八回　士卒矛盾防自家　餅書因教告秘密

第百二十九回　五條頭代四郎啓宿憂　擊劍場親兵衛見武藝

卷第二十六

第百四十一回　犬江仁名揚華夏　左京兆恩厚東臣

第百四十一回　惡報失明覆事懺悔　神助因妒反成寘罰

卷第二十七

第百四十二回　誣兩滅辰巳貽誑簡　尋故事政元疑名畫

第百四十三回　點虎眼巽風鬧公文廳　斃衆口京兆誅禄齋屋

卷第二十八

第百四十四回　犬江前諾請關符　澄月一謀獵五虎

第百四十五回　獻五頭衆奸卒喪數頭　櫃脚小惡師徒斷手足

奇貨忘神祐
誇閥禁使臣
欲譴蛇足過
驚虎魄傷人
題政元及巽風
詳寶猶有破隙
雪吹小姐
直塚紀天
竹林巽風
魯領政元

堀内雜魚太郎
貞住
田税力助
逸友
小森
鍛治子
再太郎
大刀佐人
たくみの
きもハくこが手ぐ
打のそ毛と
あり
半四人

赤壁阿瞞勢勿負
燒殫艨艦有周郎
題坂東四將
扇谷定正
千葉介自胤
横堀在村
大石憲重
長尾景春

足利成氏
山内顕定
巨田助友

里見後の八犬士の内中五の君賢路姫の端像既に前輯に出れ今略之
女一君静岩 姫いちのきみしずいはひめ
女二君城戸 姫にのきみきどのひめ
姫小夜の月むさし野の八いのむらさき雅の
女三君小波 姫さんのきみさなみひめ
女六君桔梗 姫ろくのきみきちかうひめ

ふるさとてねの月をゆらむ
鶴齋
女四君竹野 姫よんのきみたけのひめ
女三君鄙木 姫さんのきみひなきひめ
女七君菊 姫ななのきみきくひめ

本傳出像の人物ハ面貌の老ると弱くなると本文ハ合ざるあり。看官疑ひ思ハけれ
聊爰ハ論辨ス。譬ハ金碗大輔孝徳ハ道ゝ大法師ハ嘉吉元年辛酉の秋、父孝吉の自
殺の時彼身ハ南の五歳ゝ徳而長禄二年ハ至て伏姫富山ゝ支あり一日孝徳死刑ゝ看
めくれ。祝髪行脚の僧ハるゝ乃二十二歳の時ゝ是ゝの年紀ハ第十五回ハ反く作者の
自注あり。今これをもて僂れば文明十年戊戌の夏、大ハ行徳ある吉那屋ゝ信乃時ハ十九歳
現ハ時ハ二歳と時ハ二歳ゝ親兵衛初名ハ真平時ハ四歳。ら
れ是よりの又六稔を歴て文明十五年癸卯の夏。、大ハ宿望成就の日ハ大士ゝ相俘ふく
安房ゝ帰ゝるふけるハ年四十七の時ゝ。五十ゝのまゝ至るゝ本文ハその折々ハ年紀を見ハ
誌さゞるゝ倉よりゝ推考へ看官紛れあるべくもあるゝ。ハるハ第七十三回ハ甲斐の指月
院の段前柳川重信画・よりゝ。吾如意ゝ処ゝ。大の面貌翁備て六旬許の老僧ハ
ゝ。後ハこれを画く者其ゝ本ハ本ハ見せざるもるけれハ弥老て相應ハ。かゝゝ又蛮崎ハ文長禄

元年ハその父慶武ハ富山川ハ溺死ゝ時。彼名ゝ出さゞるゝ。必是少年ゝ。是よりの二十
二年ゝ歴て文明十年戊戌の夏照文ハ徳ゝ出世の時。齢ハ三十有餘ゝ。大ハ弟ゝ。是
よりの後光陰ハオハ六稔の程ゝハ出像の面貌翁髐て五十ゝまりの人ゝ見ゆ。又ハ大士の内
中大田小文吾ハ髫歳より角觝ゝ嗜て大漢ゝまりゝ本文ハ粗見えゝ。ハるハ出像ハ凡庸
ゝ。自餘の大士ハ殊ゝ人ゝ。惟第六輯の画工英泉のゝ意ゝ。第五十八回ハ
小文吾ハ市河ゝ。依ハ夫婦ハ再會の段の出像ハ全身肥満の大漢ハ画ハ看官ハ前々
ゝ出像ハ眼熟れて妙ゝ。ゝ只隱ゝ過ゝ。又扇谷定正修理大夫持朝ゝ
子ゝ。の管領ハ享徳年間よりゝ鎌倉ゝ扇谷殿ゝ
ハけ。かゝて定正鎌倉ゝ退くの後明應二年十月五日ゝ卒ゝ。享年五十二歳事実ハ鎌
倉管領九代記ハ詳ゝ因て定正卒ゝの年。明應二年甲寅ゝ。溯數れば本傳第九十二
回文明十五癸卯の年道節信乃ハ復讐ハ定正四十二歳の時ゝ然るゝの段ハ出像ハ

○秋溪定藏

定正の面貌最弱かり。吾一知音の細評ふその弱かるを疑ふて云云と問れしよわり。但その差錯のこと
なる毛人よ誂へてその意ふれバ不如意なる事ありそれども。就中今論ずる人々ハ本傳中なる有名の。
殊ふ尤なる著者なれバ見巧者なるハ疑ふて其をしも作者の術なきありとなし。
うちつけふよろしそ其齢より面貌の老るわり弱きもあれバ只管ふ年歳を數へて其面貌の合ざるを討さバ
反て理評ふ存らむ況本傳ハ画工一筆ふありまゝ各作者の画稿ふ據て潤色して拳を取まく欲するを
あそ婢妾まても画くふ美人ならぬなる。画工と作者の用心の同じからぬを知るふ足らむ歟畢竟遊戯
三昧なる出像ハ婦幼の與ふして和漢稗史の花なれども是ある故ふ作者の趣向をも知るを
いふべけむ花を愛るハ実を思ハず実を嗜るハ花をも観るわり誠ふ好そて善讀者ハ必文を
先ふして後よ出像を觀るといふ画ふ縁りて事の趣を夙く悟れバ讀見る時ふ興薄かるむと
歎へべし現看官ふも用心ある有るが中ふそ憾る知音ハ世ふ又多く得易からねバ漫ふ戯房をもち
開て出像のうへまで自評なして人の疑難を解くよしハ本傳結局大團圓ふ遂憾なからむ為ぞかし。

○出像の差錯ハ猶許すべし。本文ふ至りてハ看官誹り愚ふ誤寫多かるん既ふ前板第九輯
下帙の中の五巻ふも校閲老眼ふ届かずして見遺しつるを發販之し後ふ再校ふれバ○十九の
巻 六丁左 ふ上帙の自序の内作者暗記の失をと訂して野中狼之介又野中當ふ云云とある
野中ハみな山中の誤りなく其実ハ品河之山中野中共ふ品河ふ作るべし」同巻 十一行下 十四丁右 念佛の
念字上の一鈌あり○二十の巻 十三丁左 六行 長城生の隊ふ云云とある長城ハ誤之當ふ根生
野ふ作るべし」同巻 廿六丁右 四行 影職影ハ顕の誤字之同巻 廿六丁左 九行 箕とあて其の傍訓の
□○それハ其の誤刀之當ふみふ作るべし○二十一の巻 九丁右 九行 勇猛精進其の下の傍訓ふがう。
□□さうし當ふさうしふ作るべし」同巻 十丁左 初行 忍國誤寫之圀當ふ圀ふ作るべし」同巻 廿三丁左
七行 □壮介當ふ荘介ふ作るべし」同巻 廿七丁左 八行 中條弟兄とある中ハ誤寫之中條當ふ十
條ふ作るべし○二十二の巻 三十丁左 四行中 長挾介の挾ハ挾の誤寫之」の下 同巻 隔行 □戟ハ戟の誤刀之」同巻
十二丁左 五行 君所其の傍訓誤寫之みちふ作るべし」同巻 九丁左 五行 百會尤の傍訓誤刀之當ふ ウテフリ

□つ
ツブリハ化るべ〇二十三の巻初丁ノ右題目第百二十四回の二十の二を三の誤寫本回則百二十四回之同巻八丁右四行棘髭鼠魚壻竜八右の名號吾一知音の評ハ石亀屋次圓太の初名と鯛の壻源八とのゝ。とあるもの。是を同名として訝れり。然けれども鯛と棘髭鼠魚と源と元竜と共ハ音訓ハ同くて。其字ハ各異之既ハ面個の出来介ある同名も亦作者の用意のゝ。知又源八元竜八現八を同名ハあるを水滸傳の張青と張清の如。さゞれ同騈紛れ易るべけれ。後ハ棘髭鼠魚壻の壻を改く骨とも。知音の評ハ従ハ之同巻廿五丁左行 禀上の上ハ上の缺ゝ□□ゝ。同巻廿四丁右初行 雞雲崔の歌ハ一やその都ハ雅遠の云云是を富永とせい異説ハ紛まる。作者暗記の失ゝ。の歌應仁記ハ據まバ。飯尾彦六左衛門常房の歌ゆく。上の五文字。汝や知るとあり。ある亦知音別人の評ハ心つけらまされバ。躰く刊行の書肆ハ誂て重く補刻あれども既ハ數百部損出ゝ後るれバ今又ハ大既を舉ぐ。訂ゝ漏ゝも猶ある所べ。

終

南總里見八犬傳第九輯巻二十四

東都　曲亭主人編次

第百二十四回

政元權を弄びて正副使と分つ
犬江別ハ臨ゝ忠良僕を借る

復説犬江親兵衛の蜜崎照文と共倡ハ京師の公務ゝ果ゝ身の暇を賜らんとて。管領政元の邸ハ詣ゝ。政元即使家の家臣本西復之をして。遠路の使その甲斐ゆゑ。首尾残る所なを両御所東山大義ハ思召さる歸國の暇とのそ。禀ゝ情願ハ。ゝ。尚佛ハ出ゝ上の御内意とハ。ゝ。明日己の時候ハ参るべ。面談之期ハ。ゝんとて親兵衛これを来ゝ。肚裏ハ思ゝ。その地の八犬ハ首尾宜。宣旨亜ハ御教書と既ハ遞與さ。ゝ。何ゝの御内意ハ疑ゝ。推て問ゝ。訝るのゝ。ゝ。躰て歌店ハ退て。當晩姉雪代四郎ハ件の一義を。ゝ。照文と共倡ハ言来ゝ禀ゝ。

其元告ふ。代四郎も亦許そ。左やうに有るまじく欲と思ひ難れ。照文も心ふかく望の沙汰推量果てゝ。却説其詰朝親兵衛は照文と共保代四郎以下。自他の伴當を昨の如従へて西陣なる政元の邸に赴き。侍候のよしを稟せば。青侍們ひろゝて客房へとて安内しぬ。程ふ上座の輪る音近く。やがて己牌おぞ。ふける姑早くて香西復六を。親兵衛及照文ふ對面せつ。命ふ違ぬ伺候の時刻の早くも。労ふ。却ふ。主君今朝も。花の御所へ出仕の留守なれども程なく退出ふ。豫吩咐られ。兼もゝ。ねて等ぬ。別室ふ誘引て。准備の酒肴を薦め。入畫饌を羞る。青侍們給侍は連て。佳殽珍菜の種々なる。歓待叮嚀なりければ親兵衛も照文ふ。詫る胸安くぞ。今更何の故とかは。這盛饌を賜ふ。と思ふのみ。問難て。歓び。舒恩を拜て。只得ぬ儻就ては。青侍們い迭代ふ。無を薦め。餡を添。且畫飯を羞る程ふ。秋の日。れば。暮れ。未の刻近くなる時候。郷食饍。遽く果て。香西復六。そ。まつ。親兵衛。ら。向ひ。

主君ハ方僅退られ。然ぞ。不娯。かけふ。對面せべ。と仰ら。誘ひ。と。案内。とぞ。親兵衛と照文ハ。郷食饌の歓び。と。稟て。後ふ立て。引れて。正廳ふ赴け。既ふて。管領政元ハ。有司亟ふ。近習們を侍て。出く。儲の上座ふ在り。當下復六拜謁て。東使見参の。と。伝れ。政元。隨即親兵衛。を。間近く招て。薦き。席を。與へて。示。まつ。東使の歸國を。抑留ぬく。今日ふ。逮ぶ。と。是。私の一説ふ。あ。ぬ。八ふ。聞ぬ。大江親兵衛ハ。少年ふ。て。武藝。男力。関の八箇國ふ。敵て。ぬ。然ば。角を。折て。鋒を。抗る。膂力。義秀。親衛。と。兄。せば。且。毅。剣。白打。弓。馬。の。精。姫。牛孺丸。ふ。猶。優。ぬ。とて。身。單。で。邪館。山。城。と。降。ぬ。逆。將。蒔。田。素。藤。と。二。たび。まで。虜ふ。あ。ける。大功。儔。ぬ。と。云。その。事。の。崖。略。昨。今。人。の。風。聲。ぬ。這。里。も。專。知。れ。る。ふ。るふ。當。將。軍。家。足利。義尚。ハ。尚。青。年。ふ。ま。し。は。ぬ。ど。も。文。武。兼。備。の。御。盛。德。當。家。拔。萃。の。君。れ。ば。十。食。肯。衣。今。事。敏。ふ。世。ま。し。れ。ど。も。攻。伐。軍。旅。の。暇。ま。る。折。ふ。治。要。れ。方。を。常。ふ。與。宜。和。漢。の。博。士。ふ。課。て。史。傳。と。開。講。あ。る。毎。ふ。みづ。ら。その。席。ふ。在。て。聽。召。さ。ば。ら。と。る。又。ま。る。時。ふ。弓。馬。の。

故実を考訂させて笠掛大逐物と御覧わの便是絶るを継ぎ廢れるを興さまく欲おもふ。大江が本事箇様々々と人の稟をと聞食て卒然ぐ其親兵衛を權且這里に住在しめ。その餘は都て故に遣りて我暇わ〻ん折。必件の武藝を見むその美を相計ひへと仰合されられ沒元奉りて相伴ふ御諚の趣右の如。有徒れば蜑崎十一郎へ宣旨御教書を相携へて東へ退そ。その名は房州義成と号ふ。這事は親兵衛その身單の一期の面目のみ。里見の光を増もの〻わ〻が房州父子の幸にぞんじられて親兵衛顧働る頭を抬げ席を避く。謹て稟をの御諚業の御内意は恐れ多く伝聞の謬ふ。その武藝は武士の家業ふ。われ小臣も亦人並ふ。その本末大刀抜く術を学ばざるわ〻ねどもいかゞして上ざまの憲覧ふ備へ難ふ。然だるの技ひ拙ふ曩ふ素藤征伐に微功あるとの〻ふ。都人の辟称へを虎の威を借る狐に似る。僥幸に好も思ふ故ふ。それ実を推せば那一拳に順ふ。逆を討つ王をそれ義成の寛大度の武徳を臣をもげ功ふ。と辞を政元ふ。謙遜

辞譲ふ然ることなく。世の風聲を左まれ右まれ里見ふ家臣ヨまるふ。今番大事京師使ふ。少年わ〻擇れ。その伝傑をと問ぜて知るふ足れ。然ば近屬武藏の持資入道道灌が。こ落ふて参内の折文武の達人をとて。咏歌やある。と問れまるそ。我宿ふ松原つゞき海近く富あ高峰と軒端を見ると稟ふ。叡感特ふ浅くも時の面目世の褒賞那身一期の栄とそ。歌ふ搢紳の風流を武士の家業ふ。われも人品頭ふせざるを。況や和郎ふ武藝をそ。将軍家ふ御賞翫ふ遇ることあらばその身一個の幸のみ。里見の武備を赫々ふ。王従一致の名聲。あらんふ。その美を情思ふ。と解れて親兵衛阿容る色をくその美ふ過分ふ。幸でいへども小臣今番の正使を宣旨御教書を賜り更ふ御遊の故をとて。友を京師ふ抑られ福使の照文ふ。のみ身の暇を賜ふ正使る甲斐もなく時の不便を爭何せむ自由の至りふ。へども武藝御覧を。幾日とのいまゞ定めさ。ふ。あらばこの這回ふ帰國の暇を賜り。使の役誼を果してそ亦復参りはい。めいりで是ものふ孰成を願ふ。くそ。とい。なも果ぞ改元ふ眼を瞋り。聲苛立て默れ親兵衛

過言ハ同輩暗譚の私議なるべく、已が随なりとても、将軍家の台命を固辞まうすハ大不敬
その身一箇の罪ならぬ、義成の上なる咎を覚期あらず歟ハいかにぞやと、権威を示も柵児に堰留られて
秋の水流れもあへぬ濃淡淡顔に円楓ハ、主客の勢ひ脱る路はなかりけり。登時香西復六ハ膝を
拊めて主に朝ひて、おそれながら稟もまうす。目今親兵衛が不慮の過言ハ、京師の事態に熟せざりける田舎
児で少年なればにて許させ給へかし。臣がために諭し、なほ兼て仔細いはば、と覚解て些し退て、却親
兵衛にうち向ひて、犬江生が兼遅滞ハ只是千慮の一失歟ハいでもあるべき事と、なからん今番安房殿の
おん願ひハ允されなん筋なりしを、我主君の提撕稟ありしにより、両御所室町東山格別のおん旨をもて
異議なく執奏ましくければ、日ならず赦許の鉄びあり、和殿们君臣上下の面目世に得がたきを、みせ
あやまられしハ寡君の好意と将軍家の御洪恩なるものぞ。非如一年十五箇月這地に留め給ふ
とも固辞稟まうさば義にあらず、忠にもあらで自滅を招く世の胡慮なるべし。それを蟹崎先生甚麼云
るぞと問れて、照文然ハ親兵衛が云云と、渋り稟まうす職分を人に譲らじと思ふになかりけれど理

ありといへども、台命の最も惶き教諭の外ならず。在下則宣旨を護なせり、御教書を相携て
安房へ退りて、悠々と返命仕らば、義成必歓びて兼なり。親兵衛が淹留を疑ふべくもあらず
と答く備を見かへりて、犬江生、听るごとく事既にあなたに述べ、かつ兼勿論ならんかしといはれて、親
兵衛頭を抬げて、然ハ我不肖なる京師の事態をしらぬ田舎児なればこそ、天子将軍ともに
思はざるにあらねども、人各その主の與ハも、昔漢の蒯徹が韓信の與に礕言を取て、跖が狗尭を吠る
ともいふハ寡君以あるなる。然ばこそ今只管に志を立まくすれば、主君の上に妙なるぞ。進退惟谷
ありまを枉て仰に従ふべし。なのりし稟させ給ひそと、みに照文歎ひて、香西主、親兵衛ハ既に兼服仕るに
過言の罪を恩免あらば、在下もまた幸ひならんと陪話るを、復六うち听て、并ならびにかも珍重々々
あらうちてそれ、それと答て、躯く主の身邊に膝を拊めて、両手を衝て稟す上まする、親兵衛と云
云と解醒さけひくまし、他ハ正使なるとりて、返命を副使に任せんとのみと惜まれ、一旦御諚に悖
りしを後悔兼服仕りぬ。不敬の罪を讓まし、田舎児の疎忽にて、且少年にはべれば、恩免をこそ

願しけれど勸解れバ政元點頭て。然らバ親兵衛先非を悔て稟もふ忌狀に相違なきよし。十一郎も同意なる歟と問へバ親兵衛杖にも似く遲鈍の本性なり。疾く御諚をなし給ひね。只ぞの指揮に依るべしと応をすれば照文も倶に畏りぬと稟すをわぞ政元欣びて又點頭て。然らバ復異議もなし。十一郎ハ歸國まで總ての事の趣を房州義成どのに傳へよかし。又親兵衛ハ今より まで將軍家の召人なるに市中の旅宿ハ宜しからぬ。明日ハ歇宿を我邸に徙して異日の御沙汰を竢ちね。その義ハ香西復六に豫めいひおきたれバ退りて宜く談ずべしと宣示し言果て扇を令して身を起せバ近習們前後に從ひて倶に奧へぞ赴きける。恁而香西復六ハ二四個の有司と倶に親兵衛並に照文を誘引立て客房へ退りて倶に坐を占て今日の公裁恙なくし了に及て安んずる至りなり。歡びを演て剛才寡君の仰ごとく大江生ハ本邸に旅亭を究らるれバ明日ハ夙起て移りたまひね。然バとて伴當を多く留んハ無益に似たり。大江生の給侍ハ本邸の僮僕をもて不自由なからしむべきよとある君命なれバ從來の伴當のこの地に殘り住る者ハ另に

旅宿を賜ふべし。卉も窮屈に思ひなバ初のごとく客店に逗留すともけしうハあらぬ。その義をこゝろ得よかしと告るを親兵衛うち聽て傳達のおん旨承りぬ。然バ身に隨せる伴當ハ若黨雜色奴隷と倶に十餘名あれバ過ぎれども僮僕さへに隷あらバ逗留の中要なき者なり。旅宿ハ他們が情願に儘すべくやはべらむと応をすれば照文も復六にうち向ひて執成によりて首尾好なりけり。歡びを演且有司們にも一個々々に別を告て親兵衛と共侶に退りて外面に立出れバ代四郎以下の伴當ハ坐らくに待着て倶して歇店に還る程に。晷ハ既に斂ぎて下晡になりにけり。却說親兵衛と照文ハいそぎて歇店に還ると躬て頃者居る奧なる貸坐席へ代四郎を招きよせて竊に政元に傳へらるゝ台命の事の趣箇樣々々と告知すれバ代四郎听て眉を顰めて卉を最不便のおん事なりと思へども和子の武勇のなほ華洛に聞えしハ徳孤ならず隣ある所以にもやはべらん。そを親兵衛推辭めて否とよ我身再世に出て里見殿に仕るは昔の春よりのうちにまで素藤征伐を除くの外屢軍陣に敵を屠りて名を顯ししかバ何人が傳稟して。

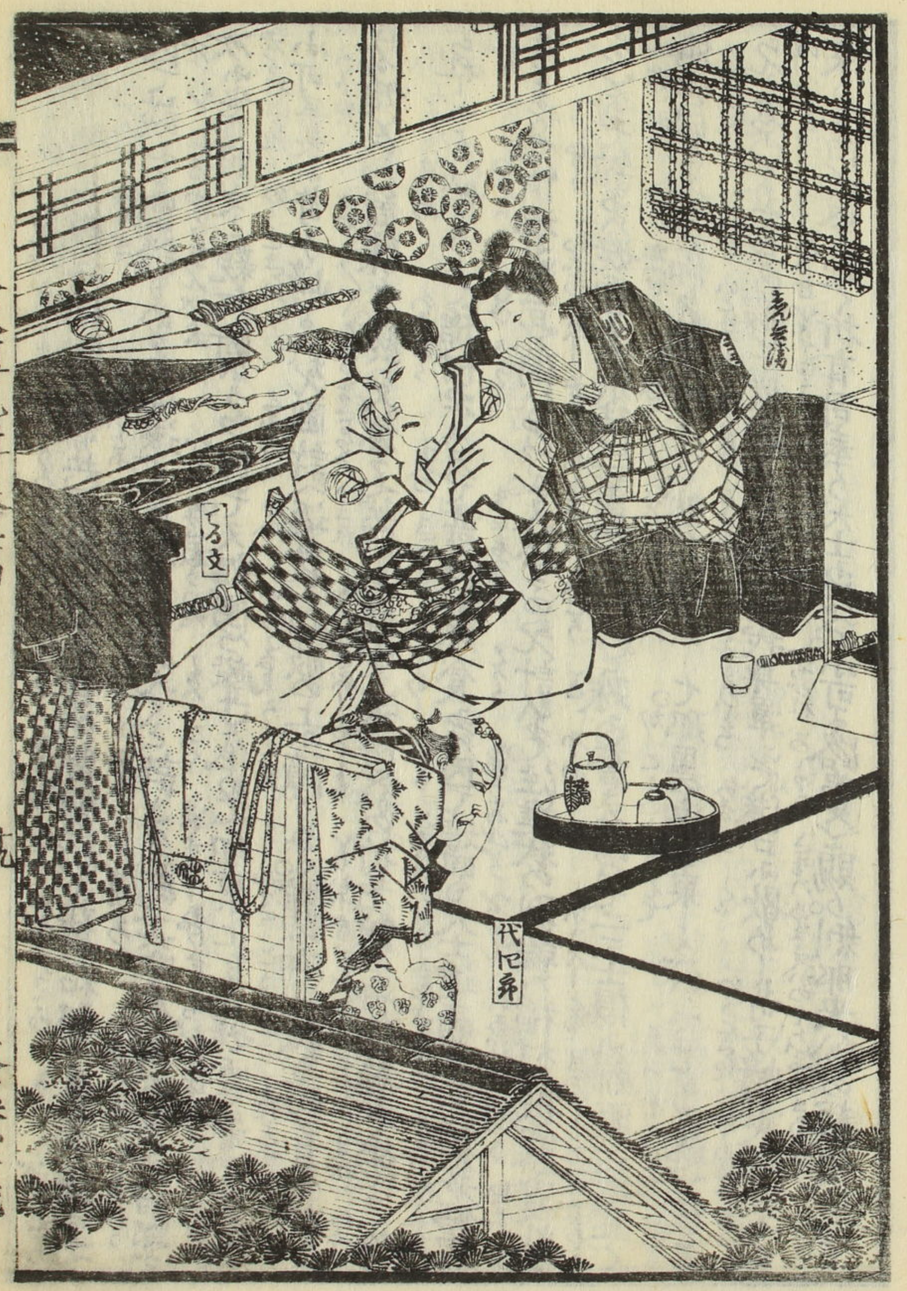
将軍家ハ知食けん是疑ふべきの一ツ也且當将軍家ハ文武の徳そなハせバ笠掛狗追物の故
式さへ再興あらせて亦閲まするよと世の風聲に聞えれども卅も亦時に依るべきか欲近屬ハ六角高
頼が叛きまつりて朝参の礼絶れバ将軍みづから観音寺の城を攻伐あらんとて軍勢催
促ありといふその義も亦都人の風聲に粗聞えたり実に倘然らバ折らバ珍しげなる馬の枝を
御覧せんとて東の使を抑留よと仰するハあるべくて是疑ふべきの二ツ也又我旅宿を轉して
管領の邸に召置れ那内人々と給侍に隷て我伴當と一緒にせずと掟らすハ弥訝しかくの如きハ
敵の降人歟罪ある武士を御内人に預置る法則に相似たり是疑ふべきの三ツなりけり此を思ひ
彼を思ふに約莫今番の淹留ハ凶多くして吉少からん然ハ思ハずやと悄語けバ照文も亦聲を
悄めて咱們も亦始より疑ざるにあらねども然までに深くハ思ひ得ざりき什麼いかにせよとのらん
やと困じて頭を病まれバ代四郎聽く〱創に悟りて眼を睜り氣を凝らしそもく〱とばかりに又ハよ
よしもあらざりしを親兵衛微笑を慰めて吏よ然ぞかし思ひする屈しそ非如那讒に所以ありて我身を

抑留るゝとも折を窺ひ路を披きて後易く安房へ還らん蜑崎主歸國の日両館ハ宣旨
をも傳ふる義兄弟中も大母妙真にも這意を示し慰めてかくも且く待めよと言傳て憑む
ぞよといふを照文聞果て开ハさらなれどもとてもかくても只恨らくハ身も共侶に這里に寓ひて分ち
由なき宣旨御教書あるを争何ハせん和殿ハ萬事に神々あらて知仁勇の三徳あれバ縦利をもて
誘引るゝとも義に背く惑ひなきハべく火水の中に措るゝとも恙なかるべしと思へども猶千金の
身を愛して一日も早く吉信を吵せめやと慰れバ親兵衛連りに嗟嘆して我心ハ否にあらず栄
爵高禄甲まれ乙まれ利をもてせらるゝ事ありともいかにして輙まれん意に我義兄弟七名なる
各々窮厄ありし折九死を出て一生を得る日までの艱難憂苦を洿くだに毛骨竦つに
咱們ハ是裏に妙椿が妖術によりあらん疑ひを稟て他御へ遣されるも須臾の程にして館のあん
疑ひ今く鮮け反て功名両ながら義兄弟等に抜萃する心の傲りありやとて今帰路に柵
掛て又窮厄に遇しかも狄なる姫神の神譴りて是裏に苛子崎の水難に罹しかるべき我爲

ちらと悟れば後易ろ紀とのふと代四郎うち笑て智者の主張然もあるべし今ありとて那邸ふ逗留の程相従ふ伴當一名もあらぞ事ふ便るものとて胸安くぞ旦暮さん餘人も知らぞ小可い那里までも隨ふべれと惴れば親兵衛頭を掉て汝も亦要るに擬勢の吏那邸ふ在るとても咱ぞと一処ふ逗れぞ又何の益いある汝を思ふぞ後悔ふんと諭せば代四郎沈吟て然らば折々那邸へ出て安否を問ふべれとふを親兵衛亦不ふして吏の主意猶浅ろ一緒ふ逗れ紀我伴當の詣来て安否を問へべと輒く對面を許されや。蚕盆ふて期を推て示も意見ふ代四郎ふ困じて一乗妻時黙然ふ浩処ふ蚕崎の伴若黨某ふ遽ち遽く這奥坐席ふ来ぬると照文を見て汝を某ふ秘所要やあると問べ若黨跪ぞ不別義ふいぞ曩ふ苛子崎よりあ囲許へ遣される紀二六が所要を果し迹を慕ふぞ目今まあり紀と生るふ照文黙頭てそも亦奇特のるぞ他ぞ今来れぞとく商量敵ふるよりもなし只両館の御安否を伺ひ知んのみふてとのふを親兵衛咳紀ふ勿ら禁ぞ不ふ蚕崎主今日紀二六が来ぬるを是究竟の便宜その故い箇様ふ徒徒の密謀あり是ぞの計ひ好らぞと耳ふ示せば代四郎も倶ふ頷て駢しく聴只顧歎賞して赤丹一笑局ふ入る程ふ黙燭時候ふるしく店小婢が引提来る行燈坐席ふ措居て偽繰ふ運ぶ夕餐と三個の客ふ薦れば立まくもる若黨と照文ややと喚禁めて汝とるべく今已ふ口腹いそがしくもりふる這夕飯を果して紀二六ふ對面せん店小二ふ吟咏て他ゆも飯を先食さて喫果るべ這里おこれ茂よろくと急せば若黨ふ応て已ぞ歌りの外面る貸坐席へぞ退りけ。ふ程ふ親兵衛と照文ふ代四郎と相飯を。

ちまく夕餐を過て囲坐して各件の密策と云云と相譚ひつ。倶ふ紀二六を送る程ふ姑且て紀二六ふ行装の儘掖折て蒙を解降し刀を引提げ這里ふ来て。咳紀ぞ内へ入らぞ次の間の際る敷居の邊ふ坐て刀袖達恙まりはさぞや紀二六ぞいとふ照文先食て思ひよりて早かれ先両館の御安否を伺ひまるべく且談ぞ紀とりもあれ茂ぞ這方へ找

親兵衛
機に臨く
意見を
密談も



こゝろと招けば親兵衛代四郎も共侶ふ労ひて今自他留別の折ふ莅て和郎ゞ来ぬゝ便宜之
因て談ふる密談もあるふ間遠くて宜くゞ。紀二六ゞ屋く内ふ入て代四郎ゞ
次ふ坐ふ照文と親兵衛ふうち向ひて又額衝ふ聲を低めて却亭上ふる姥雪主ふ聞召れよ
小可是襄ふ苛子崎より。ゞ囲許へ返され折波の上ふ障ふゞ館の御沙汰ふ好首尾なり
ける始ゞとゝ固様々々終ゞ又佞ふ然ゞ姥雪主ふ恐ふの折老館の御仁慈ふ術よく仰
られふふ始ふ稲村ゞ反て奇特ふ思食ゞ因て這回も大士達商量ふ先老館ふ
告まふゞ悄地ふ上ゞ伺ひ申ゞ又佞ふ注進状の別輪ふ稲村ゞ披露及れゞ
ふゞ館ふ姥雪主の水陸二箇所の武功ゞ殊ふ称ふ申ゞ二大士倶ふ帰国の後宜く
御沙汰あるべゝと仰られゞ。ゞ那里の御要東ゞ然ば一両日ふ七那里の趣ゞ報ず
らゞ恩ふゞ。身の暇ゞ稟賜ふ今番ふ只我身単ゞ港口ふ歌め苛子崎の夾船ふ乗ふ
乗りて西ゞ投て赴く折有司奉ふ大士ふ伺て小可ふ路費ゞ賜ふ剰那夾船の截領笠高工

ふ们ふまゞ。ゞ銭ヲ多く取せ申ゞ。誰ふ欺ゞ勇ざるゞ。その折ふ亦順風ゞ日ふゞ苛子崎ふ
船ゞ返され那地の領主隣尾殿の家臣ゞ。ゞ錦織主の宿所ゞ赴て大士達の謝書ゞ
届けまゞ。且小可ふ情願ゞ箇様々々ゞ告ふゞ錦織主欺ゞ感ゞ。隨即主君ふ申ゞ
上げ。内命ふ小可ゞ宿所ふ留めゞ。便船ゞ那這ゞ討させ。尼之崎ゞ還ふ海舫ふ
乗ゞ。開ふ載られゞ。銭ゞ費ゞ。亦復日毎ふ順風ゞ湊歌ゞヨヌ。昨日晡時の左
側ふゞ。その船尼之崎ふ果ふゞ。船ゞ浪速ふ赴て歌措せ。ふ船の鍼師笛高工役夫
ふ们ふ宿所ゞ詣る程ふ既ふて日の暮れゞ。ゞ得船ふ明るゞ。ゞ今朝風ふ出ふ
秋の日ふ十二里ゞ。ゞ反ふ走ふ果て方僅ふ着到仕ふ。ゞ囲許ふ西館ゞ初ふ。ゞ熟
ふゞ。ふ家の内亳も差ふ。ゞ。ふの餘ふも大士達の消息ふ。ゞ。ふ詞ふ。ゞ来
意ゞ報ず。ゞ。ふ書翰亜ふ道節小文吾ふ。ゞ回報二通ゞ出ふ膝ゞ枕ゞ照文ゞ
親兵衛ふ遞與ゞ倶ふ受合て。ゞ特ふ浅ふ。ゞ。ふ先両侯の恩ゞ拝て且紀二ゞ恩

文溪堂蔵

心と或は巻言或は労し各々の書の封皮を折て燈の下に黙讀る程に側聞く代四郎は今
ぞ心の花開く感涙坐に吐むまでに身の鈍に堪ざりけ席を離り東に向て只両侯の洪
恩德誼を俯仰ぎつゝ念々に拜謝ふ肝胆を凝し念々果れば親兵衛は又代四郎と
身邊に招て曰先これを見よ〳〵我義兄弟七名の連署の回翰に載られたる其事の
趣は今紀二六が報ると然ぞ精疎なれども。よく見て思へば意味深く先聞ぬと
件の書翰を二度開て微音に讀むと代四郎倩聞て果て貌を更め額を衝て小可何
ぞの過世あって狭両館の御慈愛恩澤寡加に餘るのみならず故主道節の庇護を又
七箇の大士達の愛顧によりてその幸あり驥尾の蒼蠅虎前の野狐兎もなほ我德を
ならんと思へば僥幸なる天をそらぬと托ると親兵衛ぞあへぎその実は獨思ふ咱ぞも
亦両館の慈恩愛顧と今爰に千萬言を謝し盡しがたん願は念々に
幾ばくでも忘れず日々に報恩の時をそなへと論しつゝ傍とをんなそ喃蟹崎主今は急

務へ那説に在り。快紀二六に其況を示すと心屬れば照文は然也々々と紀
二六を召して身邊に召侍らしめ。悄地に示すもの地の顛末箇様々々と送もるく鮮くと
約莫半晌許。解果て又の曰。管領漫に公意を借て大江を抑るのみならず旅宿を邸に
移さまるに伴當と一緒にせざれと掟らるゝに故にそはあらぬ今更主僕を分られて主の客店に
殘まる者姥雪覇兵甲まれしまれ或は大江主の安否を訊ね或は市中の風聲を悄地に告まく
欲せども輒く對面を允さるべくもあらず推量果て違はぬ屏を隔て癬を搔く心焦
燥と増さのみ事に益なを爭何はせむ。有慫れば我も倶に居て憂を分つ朋友の信
義をあに盡さんと思素より望む所なれども然しその宣旨と御教書を捧げて安房へ立か
へるべく両館に返命を仕る日を幾日とも知ぬるゝ。開も不忠臣なる者の本意にあらず
ねば首を両端に決難きる事最難義の折るに汝ぐ来ぬるを幸に因て大江主の
計ひあり。汝は酒家に倣代その地に留り歌店と異に。經紀兒ぞに打扮て那邸に出

入せ。方便とゐ大江主の旅宿ゐ立入りて。那隷僕們ゐ親くゑ。王ゐ逢の日も
ゑ。然るとゐ那里の動静を姥雪叟們ゐ報知せ。又巷談街説と那家中の秘
事とゐ知るよりけるゑ。大江主ゐ密山ゐ告く。後の便宜ゐるとあるゑ。ゐを洒家ゐ代て
ぬる。和郎ゐ過て。大役とよくせよかしと。悄話けば。親兵衛も亦ゐ。紀二六和郎ゐ東
人の力さゐ伴ゐ立んとそ。千里の水行を遠しとせで。今日しも這累来りけんを。我ゐ故とそ
大の地ゐ留めて。又一役と課まるゐ。その忠誠の志を思ざるゐ似れども。ゐの議ゐ但我上
のことゑ。第一館(忠節)ゑ。則その忠節ゐ。伜ゐ東人蛮崎主の志ゐ代るとも。其主の
與ゐも。忠ゑ義。その義を思ひ惑ひそ。因て再ゐ汝經紀児ゐ打扮て那邸ゐ入
まるゑ。人の汲引ゐ據るゐ。門子們訝りて。入ることを允さざ。其頭の為ゐを究
竟の東西ゐ。量表ゐ調貢の金銀諸色を浪速の浦より運送の折。香西ゐ心と屬て。
非常の備ゐせよかしとそ遞與ゑ。那家の木牌ゐ。紀二六異日那里ゐ出く。内ゐ

入まくゑ。折木牌を出して。門子們ゐ示さ。障りあるべくゐ。とゐ。傷とそ。喪ゐ曩ゐ
預ける。那牌ゐ。とく出ねと。聲悄まくいそぜ。代四郎ゐ有そと。答ゑ果ゐ集ゐ起
ゑ。行李の内ゐ。件の木牌を出して。遞與ゑ。紀二六ゑ受戴ゐ。懐へ収めて些
身と退りて。恭く。照文と親兵衛ゐ。ゐ向く。詞徐ゐ答ゑ。憲ゐ御覧査ゐ毫
も違ぬ。ゐ。國許の首尾宜ゐを一日も。ゐく告稟ゐそ。王の帰路の伴ゐ立んと思ゐ。
ゐふけゐ。其ゐ増て。両館ゐ忠ゐ即ゐ。ゐ王ゐ代りそゐめ。せよと。仰示さ。ゐ。
御教諭の言ゐ。趣惶ゐも。恭くゐ。鄙語ゐ云。瘦馬ゐ重荷過ゑ。今番の大役心許ゐ
ゐ。猶ゐ指揮ゐ従ひまゐらゑ。ゐて。ゐ代四郎ゐ。教ひ。今ゐ。後の交
加と。諜し合さんそ相譚ゐと。親兵衛急ゐ喚禁めて。更ゐ。その義をゐそぐとゐ。紀二六ゑ
今宵ゐ。別店ゐ這留して。我黨ゐ。ゐ人ゐ知られざゐ事成ゐ。且經紀児ゐ打扮
ゐとも本銭ゐ。ゐ何を賣ゐ。ゐ先其金を取せんぞとゐを。紀二六ゐ。ゐ不ゐ。ゐ國許を

退る折館様より賜せし金のいくばくかを分ち易うて倘亦足らぬるあらば姥雪
主ふ乞ふんと弊ふを照文ら乞て命ぶ汝ら夜の深け間ふ暫く退て歇店と討ふ
倘伴當們ど那里へ行くと問ば我所要ふよりて香西許赴くん今宵ハ遅かるべし
ふ咲へて快ふと諭せば紀二六おろる果て照文親兵衛及代四郎ふ告別ん異旦と
契りて外面投て出ふけり是ふよる代四郎ハ伴當們ふ明日の事照文らの地と辭去
て親兵衛ハ將軍家の台命より管領邸ふ旅宿と移る事の由と告て准備を
もべられそ推續ぎて伴當の雑居の貸屋へ赴くべ親兵衛ふ赤果ふ所要ふ心
ハそれて獨燈の下ふ立退て客研をうち啓ら両家老東荒川へ晋達ぶ呈書一通
と七個の義兄弟へ回翰又大母妙真を慰ら消息と共ふ都く二通と一妻時の程ふ寫
て果て一個々ふ封皮と整是と照文ふ遞與して蛮崎主憚りぶら這拙翰を
憑ふ馬館へ赴くもけらと義兄弟ら我上ら疑ふべくもあらぬれど大母ら女

流の智陜くて是ぞ苦勞ふ思ふれ又姥雪ハ知らるとぶく小節ふ拘ら及性ふ
起ふ折宅眷ふぶふも告ざりしと差ふ今更ふ消息と寄もべくもあらぬ音音
老媼曳ら單節ふもふの意とはさ母ふ及ぶと憑めば照文點頭て乞ふいろ
ふ對面の折ふ老婦達を徹よく慰めひんその気ハ心易けれども今より這里ふ後の
事復も障事のふ内ふ咱們ハ早天ふ立出て浪速へ赴て風待せん寝まるべ
まるべしと云ふ親兵衛再議ふ及ぶ堂を連ふ立ち敲ら店小婢を喚よ起く臥簟
儲とぶ倶ふ枕を就ふかと照文ハ云も睡ら王侯曉天ふ起出く行装を整正
るふ駅兵十名と半分ふく親兵衛ふ隷んとらしを親兵衛初ハ従ふ我身ふ伴當と
くとも皆徒ふの処ふ目と弥らのと事ふ盃ふ蛮崎主ハ大切ふる宣上月御教書を推乃
べ非常の備を堅ふくもべ咱們ハ姥雪ふ紀二六おろの餘ハ鎗奴鞋奴及柳笠鎧
櫃を持る者甲乙五七名ふて人足れ駅兵を要ふ一くと辭ふを照文推返て

も這回の伴ふ十個の騎兵を隷られ。両館の御意るふ。その期ふ及びく一人ども。和殿の與ふ留措ぶ。那名上旨ふ違ふ。それゆゑ。且正使の伴當の。殿下ふ寡くるるぶ。両館のみん為ふ這頭の外聞宜しからぶ。今こそ要る紀騎兵。とも後ふ用るとあらん。彼是も亦知るぶ。らぶ。枉てその誠ふ任せゆくと。詞を磬し。理を舒て。騎兵五名とのふ留め。我伴當と騎兵雑色要る紀奴隷を相従へく。星斑る紀明時晨ふ。親兵衛代四郎と。袂を分ちく。浪へ速を投ていそぶ。うぶの旦下。晡よ速び。暴ふ歌て。這浦ふ在せる。船のうち無るこ。成ゐくけ。然ぶ。這海船ふ。始よりしく。残される奴隷と。役夫。数十名。在り。折ふく。順風ふ。でれぶ。鍼師。菖蒲。門。教び。勇ませ。船ふ。鮮纜の准備と。ありく。その。詰朝。帆を揚ふ。東を。投く。走らる。末。迥る。大洋。へと。平ふ。あれども。地上の風波。定ゆ。ゆく。始。倶ふ。来し。人。抑。留られて。獨。立ち。苫屋の。松も。遠。離。ら。待て。ゆけぶ。今。一日も。千年。を。過。心地。せ。賜。只云云と。慰。難し。舫。逢。の。離。合。時。ある。愛。哀。苦。海。ふ。不。娯。ち。涯。らるるりけり。

第百三十七回 能辯軍記を講じく餅を蔗む 窮鳥舊巣ふ還りく巧ふ轉法

却説其詰朝。己牌時候ふ。大江親兵衛主。僕の住り居る客店へ。管領左京大夫政元の士卒。一十餘名。鞍措る馬と。牽し。来て。香西主の指揮ふ。大江殿と。迎ん為。参りひと。喚ひく。執接の若黨ふ。有司の書翰を遞。與ふ。親兵衛。是と。披ぶ見て。隨即代四郎を召て。ふ。管領家。より。迎の。與ふ。目。今。士卒。とおとされ。れば。我伴當。思ふ。要る。れども。然し。我。居る。那里の。宿所を。相。届。ぶ。皆。送。慨。るる。む。因て。曳と。若黨。騎兵。と。五。名。の。那里。まで。送。ともけ。らふ。あら。遮。莫。思。よ。もあれば。鎗。鎧。櫃。ふ。持。ぜ。て。彦。の。歌。店。ふ。残。措く。べ。何。と。れ。ば。敕。ふ。武。器。と。推。乃。て。那。里。造。ぶ。今。の。世。の。人。心。我。ふ。用。心。ある。ふ。似。て。忌。む。者。もあ。ん。疑。ひ。せ。ん。その。弦。を。ろ。ろ。ゆ。ひ。と。諭。ら。衣。裳。と。更。め。て。出。く。迎。接。の。士。卒。と。労。ん。那。意。ふ。住。して。拔。て。来。馬。と。牽。よ。ま。せ。て。乗。る。程。ふ。代。四。郎。若。黨。騎。兵。名。ふ。准。備。ま。果。て。奴。隷。の。毎。ふ。親。

兵衛の柳営と幻裏を馳しつ。相従ふて西陣なる。改元の郎ふ歩よければ。親兵衛ハ門前ゆ。馬ど駐め降立て引れて内ふ找ゝ入り。ひとと奥まりて重屏ある儲の宿所ふ伴ふ。登時ゆくふ隷られさる僮僕ハ凜しく出迎へ。恐て坐席へ安内して茶と薦る程ふ両個の小吏ハ前より歩くありけるゞ。親兵衛ふ對面して。姓名と告り移居の速ろゝと労ひて。在下ハ君命ふよりあれ宿所の預りふひへ。何なれ欲しゆゑとあるゞ。義のわりゆ。伴當ハいふぞやと。問れて親兵衛然ハ。他ハ猶舊のごく市店ふ別れ在まく欲ゆ。要ふ者毎ふひへ返し遣ゆるゆとのふふ小吏ゆハ異説もあるくゆ。その弐も豫下知あるゆ。旅宿ハ這里まれ那里まれ。伴當ハの隨意せよと命せられてひへ。便宜ふ任せゆとふ。これふより親兵衛ハ獨代四郎を召登して。件のよゝを告示ふ代四郎ハ豫てより有恁るべしと知るゞ。快ふゆ思ふゆ。却存るゞふあるゞ。義ふ応と應ゆ。退りて若黨雑兵ハと共侶ふ三條なる飯店へ還りけり。然ハ件の小吏ゆハ日毎ふ来て親兵衛と慇懃ふ訪ひ慰めく。寡君ハ目ふ懸ふゆ。観音寺の城御征伐の軍談ふよりて。

いまゞその暇あゝゆ。その故ふ香西復六も倶ふ勤ゆくひへ。疎濶ふてひへ何なれ欲しゆゑ東西あゝゆ差りひへ。介意ふく仰ゆられよ。とのふゆ。詞敵ふるゞゆもあるねゞ程もなく身を起して其頭ゆとうち撿西りて。隷僕の公忌れるゞ。謀々ゆく詈徴ゝして。孰の程ふ出てゆくゆ。親兵衛ハ憶ゆも這里ゆ歇宿ゆ移ゆ。那客店ふ似るゞゆもあるゞ。五飡の儲ひへ。茶ハ盧仝が七碗ゆ薦て足れりとせゆ。酒ハ醉中の八仙ゆ知るゞゆと上日とせるゞ日毎の歓待ふ。雨ふ降ゆ反て政元の意衷の好ふ料り知るゞゆより。犬江ゆ。ふ倒ふ欟影々として。樂ゆゞ那燕丹ゆ山鴉頭ハ白くゆゞゆとも。我還る元時ゆ日も豈ゆゝんやと。旦暮ふ祈るゞゆ。慰難く。單徒然ふ堪さりけゞ。介程ふ代四郎ハ自餘の伴當と共侶ふ。親兵衛を送着て。故の歇店ふ還りしよりゆ。只顧那里のゆとのゝ。ひふくと思難て。繞ふ三四日と過りゆ。伴當ハ談ゆるゆ。犬江主の推量錯ハて。今更對面を許されゞとも。我先那里へ赴て。安ふ古と問ゆく思ふ。然ハとヨヌ人數ゆて疑れて事の障りふるゞゆ。咱ゆふ瀬踏と任しねとあるゞ親ふ悄語て。その日政元の郎ふ赴て。

門子們ふうちに向ひて。咱等が當所に召置る。里見の家臣大江親兵衛の伴當べ三の安否を知まく欲しとふまをすなり。若告とをもうてが儘找を入らんとせしを門子急に推禁めて否疇殿の伴當あれ本郎が家法あり。親疎に依らず木牌を見ぬ者は入まくまるとも決して入れぬ出まくまるとも敢出さぬ。木牌あらばとく出すねと詞敬しく制するに代四郎听ゐ眼を睜りて否咀ぬ東の行客あれば御家の法度とをまぐる知らぬ縱その牌あらぬとも往日親兵衛に倶せられて両三番當門内へ出入者ゆ者あれば各位も然だらりの面善にあらむぞ。然とても猶許しかたし。早く人を走らしたりと親兵衛に告げ給れのべうもいなぎと口説くに門子冷笑ひて。烏滸我們は當所と守る是要緊の職分なるに人の與に提接をば暇に絶て見るのみや已ねくと窘めて後去応もせぬ。代四郎は困ぶ果て今ぞ知りぬ大江腋子の推量果して違はば他の上によく心許なし。いふまでもなく和田合戰の義秀ならねば破難はあの門の掟に只得横憑の下に立つ羊晌許。只その上は紀二六の做を事あらんをもあらじ。とまう後く思ひ入りても他い那里に歇求めけ。それより尚知るよりも見る事の不便に立腹と厭て還る二條に旅歇の路の川障りに托しに果しかりけり。

窠下不題直塚紀二六を御高に照文の教諭に従ひ且親兵衛に計を受しその宵より五條頭の宿店に在り。二三日と經ぬる程に准備既に敷兵小經紀児の模樣に打扮て肱嚢と着脚絆を穿て尺四五寸許なる販櫃に餡餅を多く糴貯て搭駝に負て改元の邸を後門に赴く。門子們に出るやう小可い香西大人の老僕達に由縁ある小經紀児でいざ今番鎌倉より移り來いでもん郎へ立入りて糖霜餅子を賣まく欲を因て賜りて木牌をば在り今よりして日毎々に出入の住るべきあれば目永くたしれまうんとてのを尚ひなるとのひを遽しく懷より木牌を出して門子們の身邊遊ぶやとう圓にて又遽しく果子盒に餅を堆高く裝登して且折乾と寫しる。一分許の金一裹を又懷より含出して悄地に是を推薦めまの矣に歇へ給る憚りなく小可い心祝ひとふとて門子們ふうちに与て含笑ぐら木牌をとる又金を見て左右るく食らぬぞ中に老る一人が紀二六ふうちに向ひて汝は香西殿の内人に由縁ありとて木牌を持るといふして誰ら拒

こそ入れざるべけれ。然るに彼の人情に宜ふ要る所支ぐる。枉て姑且預り置く木牌に汝の腰に佩て賣買を果て退る折出てこれば障りなし。餅は背に入るもて門卒ども遮與ねか。思ひねと尊大ぶる頤で誨る方言。四囲訛に拔けねども脫齒を洩る聲散て柘榴の露欠水の弟の落るを知る数當坐の免許よ。紀二六を阿唯々々と応じ先木牌を受合りつ腰に佩て又遽しく肱を伸して餅の盆ところ揚て卸す。販樞又肩へ担ぎ登りつゝを撤く腰を折ぬ歩早ふ守屋の背へ赴けり。余程ふ紀二六を計策既ふ成て門戸の出入自由て約れば則ち翌の日と初ぬ足輕雜色奴隷毎の其隊ふ入て合居せる大部屋小部屋をうち巡りて。糖餅を勸賣るふ素より生活の為ぬ殊ふ價と廉くして本を減ぜども數ふとるく錢を取者ぬ賒を貸ぬ。誰も愛欲ざるむ日毎ふ他が來ぬ居を等て買まく思ふも多くれば。一箇月ゆも及ぶぞ。親愛年來出入者る。經紀児ふ弥増て。ある時ぬ晝飯の餘まると食出て食せ又ある時ぬ茶と煮て薦め買くる他が餅を分ち食

らを。四表ぬ表の空談ふ休暇の徒然を慰るも甚しくぞ。中ふ一個の走卒の早調説經と好るあり。紀二六ふうち向ひて和郎が近屬鎌倉より這地へ徙り來りとへば今那里ぞ弄嘲を流れ曲子と知らむ。什麼調ふく吹ぬ。とふを一個の走卒が推禁めて。古々咱們が曲子より物の本を好れ軍記と見ぬ。珍説ふるや何れ諳ぬるぞ。語ふ聞まほし。と請れて紀二六頭を搔て否。小可が俗骨ぞ。風流の技ふ疎れば曲子るンども少ぬ。かえぞ只總角の比よりあく軍記と嗜て寢食と思ふ。まで。ふあり。ふ今の世ふ。太平記が幾番も讀るかふ。これねども近屬が太平記讀と喚做ぬ。乞児さへ。ふるれば。蜘蛛げるくけむ。とふふ大家笑局ふ入て。ぞ。ふ奥あるむ得意の條と讀ねくと促ぬ。件の走卒。禁めて。ぞ。ぬ我先問ふ。ふ。ぬ餅師。太平記ふ載られる歌ヨ。ぬれども。洒家ぬ覚ぬ。和郎詳ふこれを知るぞ。と問れて紀二六然が那軍記ふ見えぬる歌が先第二の巻の首ふ津守國香ぞ一歌あり。是より下同巻ふ七歌資朝俊基の辞世の歌。この中ふあり。又五の巻ふ

五歌、後醍醐天皇の笠置の御制、その中に在り。又四の巻に十一歌。この餘備後三郎高徳が天莫空勾践云云の五言二句、亦その巻にあり。又六の巻に五歌、七の巻に落頌一歌、又東軍長崎工藤が連歌あり。十の巻に四歌、十一の巻に一歌、十三の巻に三歌、十四の巻に落頌一歌、十五の巻に四歌、十六、十七の巻より各一歌、十八の巻に三歌、二十一の巻に新田左中将の恋の歌あり。二十二の巻も一歌、二十三、二十四の巻に各二歌、二十六の巻に四歌、楠正行の辞世の歌、後村上天皇の述懐の御制、その中に在り。二十七の巻に三歌、二十九の巻に五歌、三十三の巻に三歌、三十五の巻に五歌、三十六の巻に一歌、三十八の巻に二歌、三十九の巻に三歌、四十の巻に二歌あり。通計八十有二歌。欲その他詩句四首と連歌あり。と思へども暗記もぐるめりつ。傲漏あり。もひつむとこひつくも人その歌、曲々に首より聲朗に誦し示せば大家ひとしく駭くまでに且感し且愛及覆して人いうもてふよりけり。却も這漢子の記臆のひと好さよ。然らば孰の巻とも諳讀して咎せざやとへば一個の後生がちろる貌に找ぞ出てなよ

餅師より我も亦太平記を讀て知り及べと艶るゝ師直が塩冶の妻に撼想し、那出浴の倫見る條を堪られ覚てそゝむ甚麽ぞやと問れて紀三、然しに那高師直が色を好ゝ且驕恣る那里親が花女房を責威し、妬に乗じ塩冶高貞の嬪室の浴し果る立姿を倫見る條の文に倍とそあり。されば刀を横とりの高く咲て見今その女房、塩冶が妻なり。湯よりあがりけると見えそ紅梅の色殊るゝ氷の如くなる練貫の小袖のまりくとあるを掻取く濡髪の四くへ長くかゝるを袖の下に焼きさめる虚焼の煙麝香ふだらに残りて其人の何處にある在らんと心ざしく成れば巫女廟の花に夢の中に残り昭君村の柳に雨の外に疎る心地して云云と讀程に這部屋の小頭児るべ、年に五十許ぞ髭斑に白く重東東面皮るゝ故に白幸の草袴の裾伸るを下短に穿做て涅染の布の外套に大紀るゝ孤花鞭あるを帯に腰に藤柄の両刀を跨へ細竹の杖を曳つ遽しげに入て四下を見かへり聲昔の兵毎るごとに鑠と磨ぎ敗吊腿の緒と綴らぞ戯言に日て銷もとゝへ少ぞ上様義尚をらん。

太平記巻の第二十二高師直塩谷高貞の正室の出浴を偷見る處

かゝる。觀音寺の高頼主を御征伐の風聲あるゆ武具足ども爭何ひなく漫ふそと窘る鶴の一
唳喈々たる。崔潛る竹牕の篇すの下人皆退ぞく。快樂忽地醒ゆけり。然ぞの日ゆ徒れども
紀二六を伴の毎ゆ漸々ゆ親くゐる隨ゆ少くくゐるゆ秘事洩れて這回改元ぐ伴りく將
軍家の台命とそ犬江親兵衛を安房へ還さも賸伴當と歇宿ところそ那身一個を
這西陣ゐる邸ゆ抑めて久く做れるゆ素是所以あるゐると問へで具ゆ知りけり開とりゆで
と原るゆ曩ゆ結城を追放ぜられ。逆足寺の悪住持德用の則是改元の妹母子を父の
香西復六ぐけり。初故管領勝元の獨子ゐる改元の生れ時復六ぐ妻初乳ゆ召れて遂ゆ
妹母ゆゐりーぐ改元と德用ゆ俗ゆ云乳兄弟ゆて當初他ぐ乳名を二六郎と喚做ん耳改
元と同庚ゆて五箇月許の兄ゐれゆ其子二六郎ゆ再乳母とゆ者を隷て母の子舍ゆ子類
ゐる隨ゆ二六郎ゆ主君の後堂の局ゆて公子と同樣ゆ成長りゐる果報あれゆ稚ゆ時より心
驕りて人を人とも思ゆ癖あり。十二歳ゆ及びて力泉ゆ拔出て武藝を好を酒を嗜で醉

時ゆ猛く勇めりゐるとて父ゆけりを主ゐりける勝元も他ゆ必萬夫無當の勇士ゆそゐるべ
けれとく最憑ーく思ひーぐ外ゆ懲をとゐるゆ德用の二六郎ゆ忌憚ゐ已ゆ隨ゐる
進止ヨヌゐるゆの故ゆ同ゆ潘ゐる近習外樣の老黨若黨雜色奴隷婢女炊婦まを害怕
ゐるもあり。譏るもヨヌくて。悄地ゆ歸けて悪少年とゆゐ者ゐりける有徒一程ゆ二六郎ゆ年
十四ゆゐりー春三月の時候主君勝元の公子改元ゆ俱せられて嵐山の花觀ゆ出ける折大
堰川の上ゆく憶ゐる時の関白藤原持通公の清涼寺へ詣ゐゆ御車ゆ撞見ゆ瑣細ゐ
ゐゆよりーて。故伴の毎と鬥諍ゆ逮ひーぐ改元の伴當ゆけゐ老黨ゆ敵ゐを憚ゐ士卒を制
そこ其里を外ゆて公子を諫め路次をいそぐて早く歸館ゆ赴くーる獨德用の二六のを主親の威勢を
負をけんその身の武藝勇力を顯さんを思ひけ踏住の連ゐゆ找を狼藉ゆ及ぶ程ゆ天廷ゆ
摂家の人々を或ゆ蹴ーー毆伏せ雜掌二名ゆ疾を負ゐる程ゆ猶且一個の牛飼合人ゆ撲ゐ
れて即死ゐりけりゐれども二六郎ゆ外ゐ援の兵ゐけれゆ卒ゆヨヌ勢ゆ捉龍られ筋力衰へ勢ゆ窮

文溪堂藏

文溪堂藏

其その隊は捕られけり。是軽く流る罪なれば、武家へ解されて、既に死刑は定められ、他の父香西復六は勝元の時なれども、当家第一の權宰なれば富と勢ひと両全ならんと、家人の中にこの者の子の與は主の勝元に歎訴して、悄々地に救ひを求め、又摂家の金襴見と敷を敷かれる牛飼舎人の宅養はヨヽく黄白を餽りて、他の死罪と宥められ、出家は做して死者の菩提を吊はんと約束をも、恐と解る計策なりとも、程は勝元も亦二六郎が其子改元と、乳兄弟の因なるとの七愛する心浅からねば、室町殿義政は密山胡心と他の命乞のあん詞を被さるを、顔熹げ現千金子の市は棄られを徒る内外の帮助は、二六が十五未満の若く宜く出家を遂させて、死罪恩免あるべしと、公武一揆の裁許をもて二六を宥さを出されて、祝髪して度牒を賜り、法名を徳用と喚做をも。權且父の香華院は在り然けれども、阿容なること京師の寺院は在るべき親の與は外聞宜あらざるを、且公家は憚りあれども、父復六計を法縁に就て、下總の結城の逆足寺へ遣して、住持未復の徒弟は、是なりとして、復六は徳用が衣料坊料盤纏までも主母は餽り遣

を賄に匿しかくばれば、徳用は沙弥なる時より、師兄をもそち踰て早く役僧は做登りしが、方外酒茶の友ヨヽかり有徒し程は故、當國の守さりし結城氏の滅亡をこの年来うち歎く。舊臣殘黨計議を旋らし、忠信の乱を離れ時なれば、先君氏朝の子なる成朝を冊立て復城は據り地を略し、再興の功成りしが、室町殿義政へ告まをして免許を請まく欲とるは逆足寺の役僧は徳用は京都の管領勝元の家の權宰なる香西復六時長が愛子をも、勝元の嫡子改元と乳兄弟の因はなりとは、今番室町殿へまゐらせる使者は這僧は優れる者なりと衆議既に一決して、隨即徳用は結城の舊臣一両名相副をも東西ヨヽく廂ヨヽく躰て京師は遣をしは果して徳用が掙をも室町殿計宥をはり即便成朝君臣の舊罪恩免の御教書は徳用は渡し賜の其家再興障なく君臣素懐を遂しが成朝則その賞として逆足寺の寺格を推登し別は徳用は坊料を取せ且金銀ヨヽく與らる其後住持未得が老を告て退院せまく欲をし折徳用は寺主なるべき器はあらねども前功はよりて羽振宜しければ孝順清白の望えある影西をも退けて徳用卒は逆足

寺の住持ゐ做らしとる以来萬事己ぶ隨ゐせざるこなく、或ハ武を講し力技を好ミ行状出家人ゐ
相応しからぬ所ありぬれども成朝君臣自餘の檀越も他ぶ立前功思ひ易て許し年来と厭ふ程ゐ
今茲四月中旬、大法師ぶ宿願と果さんとそ結城なる喜右吉の古戦場を先亡追薦の大
念佛を供頼し結願ゐ了まる日徳用是と酷く思ひ同悪の衆徒を招聚へ剰結城の
三騎臣長城崎利堅名経稜根生野素頼ハを浮ミ出ぬ、大並ゐ七犬士を捕捕ちく
欲ゐ一ゐ反て那身ゐ生拘られて破戒の罪免るゐ方なく成朝王の沙汰とし才ゐ命を助
けられ彼ぶ徒弟堅削ハ幾名の兇徒と倶ゐ結城を追放せられけ這一條ゐ既ゐ前回ゐ
具るゐ看官通て知れるなるべし。ゐ程ゐ徳用ハ投て往方ゐ覚束なる。親より外ゐ侍る時世ゐ
馮心ゐ人ゐ多と思へ同憂相憐む堅削をのゐ伴ふて日ゐ歩ミ夜ゐ宿り辛くして京師ゐ
歩ち親香西復六の宿所ゐ造ち。對面と請て己ぶ上を報知まるゐ。ゐ真実のゐとゐ復
六ち思ひ入ける我子ゐ訪れて訴ちく。恥て閑室ゐ召入れ。その来意と尋ゐ徳用答ち。

然ハゐ児徒輩々ゐ。一個の徒弟さへ伴ひ来て物を思せまるゐその禍の溝ゐ処是一朝ゐ
あるゐ抑我寺の大檀那結城下總の新判官成朝ハ傲慢短慮の猛将なり。そのゐ那家再
興の創ち乱政非法勘くゐ剰近蜀ハ安房の里見ゐ諜し合しく謀反の企ゐ
故ゐ今茲の春ち、大と喚做ゐ一個の賣僧の里見方なる結城ゐ走ち喜右吉の古戦場ゐ
葬と締び先亡の菩提と唱て百日の念佛を執り行ふ程ゐ里見の士卒三百名来會して
是を資け。その結願の朝ち米銭許ミ施行しの。貧民と哄誘し我寺と奪ゐ
、大を住持ゐ做ゐ欲ゐる他ハ千数詐虎狼心を天知る地知る人も知る世の風聲ゐ隠れな
けれ児ゐの為ち歎て城主ゐ訴へ道理と演て諷諫の詞を盡ゐ一かゐも成朝惑ち信
容れず越ゐ結城の三忠臣長城堅名根生野と喚做ゐ者倶ゐ主君と諫難て己と為ぶ隊
兵を領て、大並ゐ里見の士卒を捕捕ちく欲ゐる程ゐ我寺屠蜀院の法師ハさへ法縁ゐ就て
催促せられて共ゐち向ふと守ぶ児ハ少く驚憂ひて衆徒を制し為ゐ這堅削ち

伴ふて只得後より赶々ぬ死しぬ。大凡左道の幻術あり且那里見の士卒の内中に犬とめて氏と做る。七八個の勇士ありて幻術力戦両ながら人意の表に出しかバ憐むべし忠臣長城堅石根生野ハ隊兵と共に命を殞し我寺の衆徒勇僧も或ハ殺され或ハ亦生拘られしもヨヌクるに成朝及家の宗臣小山朝重等ハ尚醒ざりく、大ゐ尊信し那犬士们を罪るぞ反て我身と堅削衆徒ら破戒無慙の罪人とぞ惨酷牢獄に繋れしかども畧表に那家再興に舊功あれバ殺しもやらで法衣を剥奪り笠台を中て竟に追放せられる昔法然及親鸞日蓮の三名僧すら弘法の為に罪なき罪人になりしよ或ハ白刃の下に命危く或ハ配所の起居ハ艱苦を凌ぎぬひても誠を照す天津日の光と倶に厄解て末世の祖師と崇らる今の我身も似てらんと詞巧に非を飾り良将名僧智勇の賢士を誣言涯りなくけり畢竟徳用が讒誣ならて後の話説甚麼ぞや幷ハ又復下の回に解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十四終

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五

東都　曲亭主人編次

第百三十八回　士卒矛盾して自家を防ぐ　餅書教に因て秘密を告ぐ

登時に堅削も徳用が說諭の遑あるを拾ひ足ざるを補んとて膝を找めて復なふらち向ひて目今師父の稟されし如く結城が非道乱政ある畧表ハ師父の庇に倚て那家再興の欽びあり。恩を受て恩を思ハ惟成朝のみならず家の長ある朝重等が心鳥ゆも獸ゆも。劣ると争何へむ縦追放せられずとも危邦ハ入べからず乱邦ハ居るべからず定に浮世の栄枯寵辱今に創ぬよるならず是も菩提の種なればいで深林幽谷に苔を締び形を済して二び塵に染らじと思ふかのみ手末の師恩を外に係る時憂を分ぞ身單の往方を定むべきにあらねバ錢すくて路遥る逆旅艱苦の伴に達て送届けまゐらせ竟身の暇を賜るべ

とりひろ胡意歎息して。理のあるこゝろ虚言も時ふ取てハ些の朱を奪ふ可るべとくも思ハ
ぬ復六を。吹ゝ忽地悖然る怒面ふ顕れて。開い安らゐるふとゝあれ結城黒見ゞ謀反の椿
事ハ只世の風聲のみふして正しき証拠あるふあらぬ。許ちゆるさけれども氏朝季基以下の
先亡その士卒ふ至るまで。皆是嘉吉の逆徒ゑれば手厳しくも追薦供類ハ是憚るべ況
ゆるふ何ぞや。隣国の僧俗を招き聚合してその堂の施物を羞ぢ反て那家の香華院
る。住持を逐ちく欲せ。京鎌倉の守ゑを思ふ成朝ゑゞ傲慢非礼の底意も推て
知るふ足れり。好ゝその説ハ且く措て。徳用を田舎法師ふ傲果さんゆの惜ゝ。罪ゑく那
里を逐れしハ是物怪の幸ひ。我眼の黒ゝん程洛中洛外一三の名高無る大刹の住持ふ
倣て紫衣僧綱の顕職ふ推登されゑば田舎院ゑる逸足寺ふ勝らぬ。是ふ就ても感じ思ハ
堅削御坊の老実ゑる。徳用が法眷のさゞる結城ふヨりけん。今ゆの時ふ従ふ者ゑく。只ハ
是和僧のゝとゆく孝順賞ゆるふ餘りあり。山居の楽ひハ然ゆとゑゝ。倶ふ這里ふ住ゆて。

栄をその師と同くせば。陰徳あり。陽報ゑる後の恨ゑふべ。然けれども事情ゆとくも沿知ら
ぬ京人の口ふ絶て戸も鎖れれば權且俱ふ屏居て外聞を避るふあり。ゆの義をゆゝろゐるふ。と叮
寧ふ慰めて。在奥ゑる離亭を徳用と堅削ゞ子舎と定め。弁里ふ居ゝて。新紀衣の相応
あらぬを。ヨヌく含ゆ出ゝ。分ち取せ日毎の郷食饌好ふ儘して。管待賓客ふ似ゑれども。一家児ゑ
る奴婢們ふ。徳用師弟の噂をゆる。と特ふ緊く敬言ゑれば是を知る者稀ゑりけり。小ゑるふ
時徳用が母ハ世を去りく既ふ年来ふゑるゆゝ。父復ふ両個の側室あり。又徳用ゞ弟もあり。ゆゝ
父復六の妾腹の三男ゆて。香西再六改京と喚做ゑるゞ君命ふより宅眷を率て本貫阿波ふ赴
紀く年来京師ふ在ゑれば。ゆの弟を知ゑるふ通て。世の
習俗ゑれば復六ゑ只管ふ徳用が佯誑の片言を信容て。遺恨遺る方ゑ隨ふ次の日主の改
元ふ件の事ゑ顛末を。箇様ゝゝと密訴ゆ。ゆけ隨ふ告ゝゞ改元驚ゑ且訝りて。ゆゝ我
徳用ふ對面して。ゆも具ふ聞くゞゑ白書ハ憚ゑるふゆゝれば日暮て相伴ひまゐりねといゝれく

復六怡悦に堪ず。宿所に退りて件の便宜を。徳用に耳語示し。當晩倶して參りしかバ改元
則徳用を閑室に召入れて。先茶を賜ひ菓子を賜ふて。御曹復六が密訴の趣且結城が
ありといふその事の顛末を。云云と問るゝに徳用ハ父に告る。那佯謊ふるに再按の趣を盡し
演て結城里見を譖り。と酷しく言果て又かの他們が逆謀ハ隠れなし。されど證据を得
ざれども天に口なし。人をもて言あらむといふ古語あり。然ば相違あるべからず。倘一葉にて断ざれバ
斧を用るの患ひあり。鎌倉の両管領へ征伐の義を命せらるべし。御後悔ある勿れ。この義甚
麽と哄誘す。政元一霎時沈吟して。和僧の意見も所以なきにあらねど。応仁以来諸國乱
れて。陵夷皇都に逮びしに干戈未だ盡ず。理りて都鄙皆安堵の今に至れり。然ども只風聲耳に
據るのみにて結城里見を征伐せバ。東國是より又乱れて民復塗炭に淪べし。然れバ征伐の
一條ハ他們が旗を建るに及びて是を伐とも遅からず。姑且度外に措んのみ。和僧の上を我が
與に乳兄弟の因もあれバ。いかで皇都の大刹へ移轉の便宜を計ひてん。時を俟てそよかれと

慰られて徳用ハ心のおかひすと思へども。犯して諫ん実事なけれバ。陽ハ寛仁大度と稱えて。餘
談に短夜深にけり。是より後も政元ハ時々悄地に徳用を召よせて。下總上總の風俗人
氣いかにと尋問ふに。徳用是に又便りを得ていよ〳〵結城里見の両君臣を讒る事酷しく且堅
削が己に従ふてその地にあるを孝順といひ做ていかで。お目をかけさせ給へ。と只管薦め稟しゝバ。
その後又政元ハ堅削を召近着て夜話の陪堂をぞさせける。抑政元が法師をもて陪堂に
ありしハ。年来外法を修されバなり。その故に政元ハ敢女色に親まず。然バこそあれ。族韋より妻をも
めとらず子もあらねバ。政務の暇ある折の樂種に做まじとぞ。今出川亞相入道義視卿の妾
服の姫上の其名を雪吹と喚れのハ。母いと賤しかれバ。御子の内に数まへられで。その母の
里方に寓ありて在しを。政元聴て養ひとりて己が女児に做し。あまたの老若の女房幾名欲册
傅て。深窓の下にしも鞠養せられけるが。今茲ハ十六歳になりけり。然バ這姫上ハ。容止の美しく
花を三月の花に擬ふべく。又肌膚の清らかなるハ仲秋の月に似たり。一たび笑バ城を傾け。二たび笑バ

国を傾くと唐山人の物ふ寫ぁーも徒や と思ふぐるるれども惜むべーヨ病ぞ常ふ虫積の患
あり。うち臥さと雖あるも日も屏居てのみ在ぁーぐ改元の巳ぐ與ふ甲乙と對を擇なふいまぐ意ふ
稱ふもあるむ且ヨヌ病ある故ふ痊可の折をぞるるべ。有徒一程ふ雪吹媛ふ給事をる女房
們へ頃者德用堅削ぐ夜々君侯の倍堂ふ召れて加持法驗の灼然ぞるるぐ問答ーしぬ。
言の趣ぐ守知て。うち聚合て商量ぞらく那師の坊と守ぞ云い香西主の冢子ぞ相公
とい乳兄弟ある因さあるうちいへ姫上の病着ふ加持を憑まぐ驗あーんと云女流の衆議
一決ぞけれぐ冊傳の老女房。件の衆議の趣ぐ復六ふ告て願稟まふ改元素より修法を
好めぐ去ぐーとも許ーけら。ぞとりて德用い雪吹媛の持病の發る毎ふ堅削を領くその
寢所ふ近づぞて加持て徒夜ぐ守るのみ驗あるべくもあるざめれぐ。咒法の暇ある折ふ堅削ぐ江
湖の浮談ーて女房們の笑ひぐ取る脣のぐ薄けれぐ雪吹媛さへ慰められて。保養の一助
ふやるるふけむ虫積ぞるく瘥るく結髮ぞるる日もあれぐ女房們い感信ーく。又是德用堅

削ぐ法驗ぞるるぐとい改元ふ改元も亦狹びて隨即件の兇僧師徒ふ布施ヨく取せらいく信
愛ぞるるけ。ふ程ふ秋八月ふ至りて安房の里見の使者犬江親兵衛仁蛮崎十二郎照文と喚
做ぐ貢調の金銀と土宜を幾韓樓狹齎ーて水路ぐ泝り京都ふ詣く里見義成の
家の勇臣八個の犬士の氏と姓ぐ請ぁるぐ守ぞーぐ德用舊怨ふ堪難て肚裏ふ思ふ安ぐ。
是義ふ我結城ぞ那犬士們ふ虜ふせられて能化廢院ふ在り一時他們ぐ衆議內談ふ。その
姓名さ八人と為ぐさ側聞ーて具ふ知りぐ我身一旦生拘られる冤家犬塚信乃ぞ犬江い當
敵ぐるれぐも那奴い左右川の上ぞ長城枕之介ぐ轂ぐ走ーて、大を拯ひ一磯孤兒ぐれば怨ぞ
俱ふ等ーぐふ今我ぐ這里ふ在りと知ぐぞ死地ふ入ーい妙ぐるるぐ。默筭厚く定ーーぐ先堅削ふ
意表ぐ示ーて七の後父ふ密談ぁる。有一宵悄地ふ改元ふ件の意趣を告ていなぐ知ー
召れぐぞ今番里見ぐ使ふ達て參上たる。那犬江親兵衛い獲男宇宙ふ倚罕る惡少
年ぞひ抑里見の勇臣ふ犬をりて氏ふせる者甲乙都て八名あり。就中那親兵衛い年少

武術に発る。修煉至妙の段あり。されども今茲の夏四月結城より程遠からぬ左右川の上流城主の忠臣長城惣利が一隊の士卒と組ませて剣人馬共伍に撥抛て川へ放下す。本事に拙僧見て知るぬ然ば里見が叛逆の計較は則是八犬士の帮助あるべし。寧今那親兵衛を討て罪に陥れて結果けぬるべし。義成は憶るべし。隻手と挑れ心地して勢ひ是より撓むべし。速く討せぬ。御後悔やいかむいでくと悄めて連りに歎めて已ざりしを改元听て頭を掉て和僧の意見然もあるべし。今の里見の謀叛は偽にあらずと証据あり。今見る所聞所は忠臣にして上を敬ひ禁裡並に将軍家及我が公にまで貢進の礼漏さる者なし。士の姓氏を請ふて許さざるして其使に罪なし見て誅戮せば東国の諸侯解體して少く武命に従はざるべし。是を思ひ合られて徳用歎息して人の及ぶ寛仁御大度然まで思召さるべし。姓氏の一義を許して副使を返し遣して親兵衛を抑置て京師の王に做ぬべ。それは里見に折損あり。虎を放て山に返せ婦人の伝に似るべ

くもあらぬ憚りあるべし。猶幾番も賢慮を旋らしめぬべと。啣言あまりに術を易る事無煩に傾れば。改元沈吟して且頷いて。我も亦那犬江親兵衛が少年にして大事の使に遣られしものゝ必是後傑なるべしと猜せざるにあらねども然まで武芸勇力の千萬人に敵するとも本事に信易くぬ。卒然に将軍家の台命と唱呼へば他を我邸に留め這頭に名無る武人力士と試験を成べ。その勝劣を儘して後に進退せん然ば親兵衛が本事あるも衆敵に堪ぬ。其里に命を須へ。只是自業自得ぞ里見の死ぬるに由るべ。倘亦親兵衛が本事にして如くに衆敵を折くに足る実に蓋世の豪傑にあらば我里見に乞て高禄を与へ家臣にせん孰の方にも損なし。枉て人の説に儘せんかと解れて徳用尚飽ねども用ひられぬに憂もあり。額衝て賢慮感服仕る然ばその試験の敵なる拙僧にも加へぬべ。総昔の牛孺九曾我五郎に十倍せしも人に譲るべ思ひ合せと誘れば改元笑頷して。開いその折の時宜に秘よ秘よと口を鎖めて当晩の密議に果けり。偖而改元計らひて親兵衛を安房へ還さぬ他が伯所を従に遣びてその伴

當を遠離しハ伴當ゆも亦勇卒智者ありて這方の機密を洩らさバ主を資助て脱去るべ
きやうもやと阽ミて僕のごとくに討ふ程ふ門子们ふも悄地ふ下知ありて親兵衛が伴當の市店に在る
代四郎等が主の安否を問んとて來ぬるを緊しく制めさせて決して内へ入れざりしも是等の密意あ
れバ這時候又徳用ハ獨悄地ふ思ふやう我ハ主君を政元ふ薦め禀して那犬江親兵衛奴を夙く
結果んと欲ありしに主君愁ふ遠慮ありてその事思ふ如くならざりしが試撃の計ハ是切てもなき
まで那奴が命を斷んとするハともせよ我身裏ふ在る怨を復さるの時ぞとみづから負きて父復六ふ告て猛
可ふ京師の鐵匠ふ鐵の鹿杖の重六十斤なるを只今作り出させて準備亟ふ整ふ程ふ亦復思ひ
旋らせバ京家の武士ふ武藝勇悍親兵衛が敵ふ足る者五六名ハ得易からで是ふ加ふるに我あ
らバ萬ふ一も失あらじと思ふものから氣味好ら只是裏ふ左右川も那奴が揮る遠目に相てぞ目覚
かりしに況能忍院の三门ふ隻手を掛て如輙く推倒さんとせし勁力恰と云恰と云倫ふかさ大敵ぞ
勝負ハ時の氣運に在り倘試較の折御内の諸勇士我さへ不測の失あらバ主君必親兵衛ふ

惜ミ愈放さで高禄をあたへて家臣にせられん倘その田地ふ造り爲ば鄙語ふいふ賊ふ糧を齎して一期の
不覚何の日ふか怨を復さん危しも試較の日を竢んより夜ふ紛れて那奴が宿所へ潜入り張竒て只一
刀ふ結果けなバ是第一の捷徑ぞ後の患を除くふ夙りし嗚呼尓也と肚裏ふ再四の主張決れ
ども父復六ふ秘して告ず堅削ふのミ意衷を示して其次の夜更闌し時候堅削を伴ふて
悄地よ親兵衛が宿所へ赴くふ各掩膊腿衣ふ身を固めて戒刀を腰ふ跨へ烏皂巾ふ面を裹て
雙眼のミ皆ふ顕し布の締附る戦鞋を穿做る準備ふ毫も透なし既ふして親兵衛が
宿所ふ近つき塀を踰り庭门より潜び入りて壁を穿ち隙を鑽ひ辛くして内ふ入りて他が臥
房ハ那里ならんと思へバ左右なく找難て坐席の障子ふ舌をもて濡して細小なる窓を穿て奥の
方を窺覦るふ豈憶んや親兵衛が臥房とおぼしき隔竟の這方なる究竟の士卒十五六名安寝
械を側ふ引着て端然として夜を戍りて在りけり。義ハ徳用堅削が思ず知らざる所なり政元ハ
肇より倘親兵衛が機密を悟りて脱れ去る宵のありなんとそ悄地に究竟の精兵十五六

名を夜毎に他が宿所に遣りて他が枕に就くに及びて臥房の邊を成すと一宵も間断のらぜ天の明るんとする比及に悄地に出でゝ親兵衛もゝ是を知らぬ況徳用堅削を思ひかけるに事の光景に呆れて頭を擡まぞに計較虚ふるふけ。この夜に得退去りゝが猶幾番もゐて張づ戍兵の隙をうかゝはゝと思ひつゝ虚負して両夕を経て又潜り入りに陰戍の士卒ども。いかの朝親兵衛が宿所の庭の板屏に人の泥脚の跡印して壁さへ毀ちて去りて。必是大江が伴當に間児の術を弄する者。主を帮助て今夜去りんとて潜びまるまぞあらむぞうん倘奪れ我ども。後難熟か免るべく今宵より人を増て外面をうて戍るべしと大家風に商量して其戍の地を易へども親兵衛に知られんとを憚りて物の音もせむ。咳をもせず袖に包みて悄々地に宿所の四下を回る時々うち回る夜行も用あるとこれ徳用と堅削が。その遺べも近づくに何れば射方の與に恁まで妨げぜるやら是も赤世の常言に難言に刃を借るに似る。鈍や朽惜し。使るゝとうち咳くのを術なければ阿容

阿容とか今去程に徳用が其くやう。今ゆく思へば刺客の術に心達せ所行ありて。男者の本意に。あるべき権且他に命を貸て試製の折は我一棒を喫して往生さん。今宵に限るとうとゝ。堅削黙頭て然に師父の勅力武藝に過に親兵衛の上に出でる最晴なる試製の折恐を復しぬんと。潜び寄て寝首を捕るより猶愉快くいかと。慰めくれて徳用に介る。勿論々々と悄然に減らぜ口劣して今宵も功なく。荒さへ脚さへ疲らて已が宿所に還りけり。抑この武條の顛末に秘密の中の極秘にあるべく人の知るべとるゝ。何れにも洩れて下司の耳に入りにけん。誠に哉古語に云ふ。隠れ顕れぬ。微なる明なるゝ。桃鶏鶏を隠そ。聲外に聽え雪に路鳥聲を変て飛ぶ時に識られ。獨悄地に做とへども。怒を已に起る時其機必先動く。現隠悪の洩易く怕るべく慎むべし。間話休題。然に紀三六が大部屋小部屋の毎の噂に因て守知りる。件の秘密の言の趣恁まで詳に蛟に其崖略を。ちらべ心悄地に驚憂ひて。いで這変を大江主に告る便り欲得と念に程に親

べく兵衛の隷僕ども。夜ごとに人の出入ふ怪しうあれ。書い忌べき者ゑ。須者来ゆ。餅師が軍書の諳讀巧みなると人の噂ふ知りてその餅の價いと廉くて。然る一藝さへあるゑ。我も買ふべし。皆買わんとて来るゑ。そ招よせて餅を買ふの勘ゑ。然而太平記を聞んとて。大家詰ゑ。已ざりけり。登時紀二六ゑ。這里と親兵衛が抑置る。宿所ゑ。と。知ゑざるふ。ゑ。ゑ。非如對面の便宜と。ゑ。切て今我来ふ。ゑ。ゑ。知せまゑ。ゑ。ふ便り好と思へ。毫も辭ゑ。太平記巻の四。正慶元年の春。笠置山の官軍敗れて。後醍醐天皇隱岐国へ遷されさの時。備後三郎高徳。行在所の櫻の幹へ詩句と寫ー一段と。聲高ふ誦讀ゑ。ゑ。大家ゑ。ゑ。ゑ。

(新潟堂藏)

御快く笑せ給ひ。以上と一字も差違ふ謬〻を流る水の委るに如く。聲高やかに誦ーけれぞ。大家堪ぬヤヤと喝采て一霎時徒然を慰めけり。有徳けれども親兵衛は静然として奥に在りて。連帝戸隔て餅師が讀む太平記をうち聞く。その經紀児は紀二六をうむと厭くも聲を猜ー。他が心を推量るに我今這里に抑留られて。楚囚に異らぬを懸念は最も惶恐。昔後醍醐天皇の隠岐の離宮に屏居られて。とうまーける御悒苦を思ひ比べ。と知なんと高徳が楼に寓を。詩句の一段を讀るをめ。かばそ那身と高徳の孤忠をみづから擬へ。狡れるあ返ばくるふ悄と身を起して偷見るに果して。その人ありけるに讀果ー。折一個の若黨の這宿所に隷られるを召よせて。却説。今来て在るハ餅師歟。思ふも似ぬ記憶の好さよ。我も亦憶りるく。重箱戸隔をうち聞く。俱に徒然を慰めうち。然る經紀児の餅をうらがれ。将後の話柄に喫べ試まく思ふ。却味は甚麼ぞや。と問ハ隷若黨。微笑て。然ン。餅ハ則餡餡を味ハ凡庸なれども。價極めて廉ければ。鄙語に得要東西なの。上やいなとうひく。呵々とうち笑へば親兵衛も亦。

うち笑て。かばそ我は好きあり。最上の餡を内に龍る。形は圓くも長くもあれ。と大紀る。餅を五六。買まく欲を然ともその餡或は微く或は又凡庸を深く心を用ひられば。我口を稱ひ。その笑をうちうるて。よく做をるべ。明日の朝来よと。誂てよヨヌくに要るー五枚でよりと。家隷若黨をうちうるて退出て。躬て紀二六に親兵衛が誂を箇様〻と。吩咐て。奥に在る客人を。安房の里見の正使を大江と。喚做を後生を作る。記憶妙なれば。東遷て話柄にせんとて。買る。餅を明日の必ずと来よりと。諭を待ぞ紀二六。既に親兵衛が隷若黨に吩咐る。折聲洩れて。まくをうちうるるーるば。只阿唯々と。心に。責竭ーる。販楼を。塔駝て還る。道途左右。思惟るに。今日大江を誂ぬ。餅は必所以あるべ。と心づくもその所以を早に悟るに。足るに那隋涙碑に。もねども。考べく。幾町歟。覚ぞ五條なる客店近くなりー。時やう。遂く思ひ。てければ。心悄地に。歩勇ンそ。ぞ儘例の向丸へ走り。出て。低々と。件の餅を誂て。翌と。歩そ。歌店に還る。湯に浴り。夕飯を喫果。なるに同歌る。客經紀們に。枕に就。れば。單紀二六。

孤燈の下に墨半の筆を拔出て最細小なる紙に德用堅削ゞ。密懇說言の事の趣且改元ゞ將軍家の台命と伴て親兵衛を返さゞ。干詐邪謀の顚末と近日京家の勇士們と試擊るべしとの風聲まゞも漏さとゝ。細書まる者五枚可開と猶小く畳分く。准備既に整ひ燈火弗と吹滅して。躰て枕に就ゝ。明日の便宜を思ふの故にその通宵寐も睡られず。次の朝毎よりの風く例の販子賣買まる。餡餅の向丸許赴て。昨誂へ置る巨餅と毎に粥鬲く餡餅をヨヲく買合もの販榾に藏ていそく這里を立去て人多の地方に赴く。自剃の為に貯る剃刀とのく巨餅を。都て両箇に裁劃て内まる餡と合まる棄て。准備の細書と一箇々々に籠て斫口と合まる。携持へく程もなく尚煖まる餅を折口愈て迹見えず。噫我まゞよりまゞと思べ獨うち失れて。又販榾に藏め復搭駝て改元の邸に。親兵衛ゞ宿所に赴く程に。秋の日ゞ短くて已牌をでるりに。登時紀二六を背門より高く呼内く。隷僕們に報るまう。昨日東の御客樣の仰付さるまる餅を持參仕るを

豫より知食け。近曽の新製まる米饅頭と喚做まる。殊に大なる仕る餡に仰に従ひく。実に心と用ひられ薄皮にく其味妙。いく餡に取ゝ。ぬぐみ。ぬぐみ。骨折甲斐まるにこの。熹ゝ。ぬひ。とふに隷若黨まるに。卒然ゞ其餅を是へく。と果子碟と。ぬぐ。拭に濡布巾埃目殘る漆盆に載て遞与せば紀二六に。菜箸とのく米饅頭と。碟子に裝る者才に五枚を傍に丸庸まる餡餅を裝添て是を隷若黨に示して。ふやう。這餡餅に麁物まく。御用の外に。へども。喫べ比べのひゞ。米饅頭の意味深を。定に知ぬ。へのく。程に親兵衛に。庖湯の次の間まる。縁頰に站く。庭と長視て在りゝ。今紀二六ゞ。いやよの。風く具に洩。ぬく。既にまろ。ぬ。隷若黨ゞ告ると。ぬ。へ。座に。ぬ。餅師ゞ口状に這里へも詳に。ぬ。ぬ。常居る坐席に返り坐て。先餅を見て。合点て。現大なるも為れまる。座に侍衆。隷若黨。我思ふ。あれゞ。今日

那經紀兒がりて來な。餅を餘さず買食して各ふまあ〜せんひの義を計ひのひねとらふ隷若黨欲び美て退出く甲乙ふ告て餅を買食る程ふ親兵衛悄地ふ指そて米饅頭と推試るふ果〜て内ゝ堅ければ東西有りけりと猜〜る。肚裏ふ思ふ。昨日紀二六が来て太平記を諳讀ける。備後三郎高德が桜ふ寫ふ一詩の一段も必是悄地ふ我ふ告まく欲ることを知せんとての所為ぞ〜んと猜〜ふければ我も亦昔唐山ふ大ふ遊る。鯉魚を解くその腹より一書を獲〜ふ故事を思ひ出てそれとなくふ餅の内ふ密書を籠る計策を論えよ他よく悟りて我あるそを憐憫〜ふけりと感じて心ふ巻る程ふ。隷若黨が遽〜く又來て親兵衛ふ報るふ。方僅仰られ〜どく餡餅を買食て其價を問ひ〜ふ米饅頭の價と共ふ五百文ふ〜べ金〜て貳分ぞとひまるふヨヌくいひ〜ぞとのと親兵衛ふ曰ふ我憶ふも這里ふ止宿を稱されて各の厄會ふ做ると既ふ久〜けれどその徒然を慰る為ふもがるとふ思ふだらふ進らまる東西るふヨヌ紀ふ決〜て數

あるぞ宜く分ちく茶消ふ来ふ我も午後のふせとのふ件の米饅頭ふ秋兒を付て後べ方る代客戸開て藏借く却客硯の下布る小紙裏と含出〜封ふ儘ふ推試て好々行裏を開るぞとも這金ふ貳分あれば隨即餅の價ふ足れりとのふ筆と極合て餅の價金貳分と寫着て若黨ふ卒とく遞與て又ふ〜ふ徒ふ何とふ〜ん敷貳言ふ似ども各軍記を听んとて日毎ふ錢を費て餅を買ふ〜ふ要るぞふ知る如く將軍家ふ命ふより抑置る我宿所ふ遊戯ふ庶ふ娯樂ふ憚りあるべ〜ふる各の上ふも我が謹慎の所以るれども然ばとく餅を買ひて那經紀兒を近つけと賢達ふ〜ふ〜ふ折ふ我も又餅の欲〜ふ日もあらむ西三日と隔て来よと吩咐のふね憑むと〜ふ隷若黨感服まて御教諭兼りふ返現堂官門上ふ出る両個の小吏ふ〜ふ。ふ胸陜くて然〜もふ〜ふまでも罵敬言ふ〜ふ其頭ふ小心仕るむと心て躰く退ふて却紀二六ふ件のよと指示て餅の價と還せば紀二六受含てうち戴ふく販樓へ緊と藏く答るふ御諭〜の言の趣あるふ〜そふ

れ。然らば今より隔日ゝ又ゝ参りひ。いとぐ御用をくと諄返して販樞と背ゝやそく駝
做く。御座ゝ因てゝ御一所ゝ賣買多く做果れば退て休足仕らむ。吁ゝ赤ゝのうと。
宜く稟ーのひと。腰を屈めて。人々ゝ告別して出ぬ。大家ひとーくゝ。そのも買買ゝ
脱落をくて。花実をると誉ゝけり。介程ゝ紀二六ゝの日歌店ゝかへり来て。親兵衛ゝ取せる。
金子の裏ゝと開てゝんと思ゝ心のいそぐれて。販樞の盆擂合て見れば。餅の湯氣ゝ龍りて内濕
ゝる樞ゝれゝ裏ーー金子の紙濡れゝ。井を破らゝと。臂迫る。火盤の埋火撥起ーく。裏
紙をゝぶ儘ゝ火ゝ翳ーゝ。うち返ゝ。炙るまゝく乾ゝる。裏紙を解開けば。その金貫分
ゝり多くもて。方角両個ゝ。黒ゝ包ゝそ一両ゝ。加之ゝの紙ゝ寫ーー數行の文字ゝて。
炙画の像く顕れけり。何ゆゝあゝんと訝ゝ。押ゝ伸ゝてよくゝれば直塚ゝ示ゝ事。汝ゝ諳
讀の太平記高德ゝ詩句の支我ゝ告まく思ゝよゝ。ゝ所以ゝんと猜ーゝ。我ゝ難書の
故事ゝ擬へて。餅書ゝ秘策ゝ教ゝと悟らば必做まゝあべ。ゝらとて屢せば竟ゝ馬

脚を露ーて人ゝ知ゝる。禍ゝむゝ小事ゝ我ゝ告ゝもあれ大事ゝ餅書の密策ゝ猶又一
度ゝ允ゝ。且姥雪ゝ告まくもとも他ゝ歌店ゝ汝ゝ主ゝ従ゝ。ゝの地ゝ存ると
野兵伴當ゝ疑ひ問ゝ。恁々と告ざるとゝ。ゝ計ゝ密ゝると善とゝ。躬方とゝふ
とも少知る人のヨゝ落とゝ。洩易ゝ。慎之々々ゝ。古歌ゝ云ゝ。あふのを河漕の嶋ゝ
ひく鯛の。ひゝ。紀二六屢讀復ーく。且狡ひ且感る心の
敬服大ゝ。ゝ先ゝ金子ゝ合ゝ藏ゝ。又ゝ思ゝ。大江主の神々ゝ。今ゝ創ゝ餅書の計策ゝ
誨ゝく。秘密ゝ告る便宜ゝ。今ゝ。
紙酒ゝ。画まれ文字まれ寫ゝ。尚素紙ゝ。井ゝ。
逮ゝ。寫る限ゝ。世の人ゝ知ゝ。新奇ゝ。時ゝ。
慮精妙。生年九歳の童ゝ。ゝの田地ゝ。実ゝ貧る神在ゝ。誰ゝ企及

ぶべ。今とを徒い心もたけ我い這酒書さるよう〜と兎毛だろうも悟ぐぞ知らぞ。只這紙の濡たると炙るホ及びて憶ぎも文字顕れハ自然の感応是も亦護らせぬふ神の真助欲人力人智の及ばぬまでホ奇と妙と是ホ就ても犬江主の餅書と酒書と互ホあるる餅酒の照對新奇ぞて人意の表ホ出ることハまー矧亦餅の價ぐまざ公ぐうとも知るう急時先金壹両裏措てその夏寡貳分と呼ぐホ及て貳分と寫ぎて壹両金ぐとぐ儘ホ遽與され臨機応変智慧廣天世ホ犬士と稱られて八犬和漢ホ抜萃るハ以あるるぐと一唱三歎ぐ憑〜く思ひけり。

第百二十九回　五條の頭ホ代四郎宿憂と啓く　毅る剣の場ぇ親兵衛武藝を見き

去の日紀二六ガ賣買ぎ果て五條の歇店へ還り〜ハ毎よりもいと早くて尚未牌時候るりけきバ同歇店る客經紀们も生活ホ出て四下ホ人る。紀二六を見ぞ亦折からの便宜と覚られ架る木枕合ぞ下ぎく。臥く思旋らぞホ犬江主ホ仇做ぞ兇僧那德用们ガ詭詐奸計と顛末ぐ。既ホ主ぇ告ぐ乞ぐ。然るぞも姥雪ぞ王ハ有徒る椿事と知るより乞ぐれガ那上ぐのぎハふく。と思難ぐ在ぐんぞ。然ガとく那人達の歇店へとそハ兎ぐて。三條五條ハ程遠ぐ同ド河原ホ在ぐるぐ。我這歇店と知らぞ便ぐるぐそ薄情けれと思ふのぞぞ術ぐるけれバ次の日ホ亦夙く改元の邸ホ赴て大部屋小部屋の毎ホ餅を賣れども軍書と講ぜぞ強て求る者あるくも事ホ假托け免れて只江湖上の雑譚ホ聊笑ひを取れるのぞ。親兵衛の宿所ハ二日ホ一ど赴て隷僕们ホ餅と薦めて賣る日も買れ日もありけり。紀二六ガ徒猛ホ賣買の趣を易〜事情ハ鄭親兵衛ガ警と思ふホ炙ぐのハ听果ぐ。告ぐるハ告ぐるホ故の儘ぞて慎ぐぞハ餅師ホ相応〜からぬ軍書の諳讀ぎるとハ噂ハく高ぐ〜ん。智ある者ハ疑ふて後の障りホるるりやせんと陜む遠慮あれバ是ぐ〜と又三日經ぐ。紀二六ぐ例の如く餅を賣竣〜て欠るホ五條の橋の頭ぞ。料ぞも代四郎ガ前面ぐ来ぬるホ逢ひけり。迭ホ乞ぐ什麽。

先四下と見廻はす這時下晡ゆく。路行人の稀なるに河原ゑ老る柳あれば倶ふ其樹
蔭ふ立寄りて土坐て恙なを祝ふ祝さる。代四郎ハ恨顔面色ゑて直塚和郎ハ思
ふも似ぬ心つきなを人かな。曩ふ咱們ハ大江主の安否と問まく思ひつ。那邸へ赴ん
子們が推禁めて。木牌るけれどとく許さび。和郎と索ひて那木牌を借んと尋思ま
きども。歌店を那里と知ざれば思ひ〜のこゆて開も果さず。今日ハ音耗せらるく欽明日を
来て那里の動静を報らて欲と望不堪。秋も九月中旬まで旦〜暮ち〜欝鬱悒と。
然けそと賛〜玉ぞ餘ふ胸の休くねば。和郎の歌店と那里とハ今ハ知るよ〜あくまとも洛
中洛外二三里とう。遠くあらず。卒然ぐ索ねて不と又尋思ま。漫行と思ふと。今ち
二日ふるのあらう。毫も便りと知ざり〜ば又徒ふ三條ゑ。歌店と投てかのく。這里で逢
ひ〜ハ幸へる和。和郎の歌店ハ那里ぞや。和子の安危と知られ〜欲いふそやく。と急迫く
問て已ざり〜。紀二六禁めて。且望ゆとのひく四下と見くて。聲を低めて。然べとよ。曩の

恨とハ理りるを思ざるふあくねども。今日まで音耗せざり〜ハ。秘密山の事由あれば却小可る
曩ふ大江主の教を受〜その宵よりこの川の前面る。某甲と飯店ふ在り。餅師ふ打
扮て那木牌をもて那邸へ出入自由を汲ちり〜ば。賣買の餘與と唱く。太平記と諳讀ま〜
より。大部屋小部屋の毎ふ隔るまでふるり〜ば那里の秘密と拐り汲て。大江主ふ告くらば直と
いハば箇様々々。尾ハ又徒々と。徳用堅削ば事説く。訴の事改元の心術。女計試數まあ
るべ〜とふ風聲且親兵衛が誨る。餅書の秘策酒書の事その要緊の顛末と具ふ告て。
又ふ曩ふ小可ば名の秘事と曩ふ告まく思ひ〜ども。憖ふ宿所ふ造らば。暇兵伴當ふ怪
れん。躬方とふとも要るば毎ふ知まるとハ漏易ら。姑且自然ふ任せよとある。大江主の酒書の
誨の理りるれば。黙止ら。後よゆ深くる恨とのひそ。小可既ふ大江主の宿所ふ立入ることを汲く。
隷僕們ふ疎くねど。主ふ對面と許されぎ。非如今ゆ。那木牌を曩ふ貸まるまる
とも事ふ益るのこるぞ。反て門子們が訴て。木牌の出処を問質さば。亦禍の端と做て。

小可さへ那邸へ出入る便宜を失ふべし。よく思ひぞい後悔あらんと諭せば代四郎つらくと聞いて
憶ぎ太息と吻く。原来這回の禍鬼い那徳用ぞ所為るゝ。狡幸ひ犬江主へ今
猶恙るゝとへども他們ぞ毒計已と云ふくい嗚呼危かも殆ふべし。乍麼いくふして可らん
やと問へば紀二六沈吟あて事情を思惟ふ徳用が讒詐毒計施さぎとふと云ふも幸
ふして改元主ぞ試驗を宗とゝて。その餘い徳用が薦る邪計を夏く取らぎと噂ふ吻
けが那人の底意犬江主の人柄とその武勇とを吻知りて。悄地ふ愛ある故るゝ。尓らんぬ
大害と加るとへるべくば。尓らば反て安ふ似ゝと。解れて代四郎點頭てそれも思ひ合せ
るゝ。始我船浪速津ふ着て折犬江主の指揮ふより。咱們先這地ふ来て。世の風
聲を榜听ふ京師を殊ふ男色の行ゝると女色ふ勝ち且政元主ハ夙くより。悄地ふ
外法を行ふ故ふ正室側室あると雖ども。弘法以降龍陽調戯い法師ぞ許
もとへば木犀花をのゝ改元主も忌ざるべ。尓らんぬ袋もでも犬江腋子を抑措て頑童ふ

せぞく欲ぞる故ふ弥勒の世ぞ多放ちく。安房へ返ぞ吉あるべくぞ。疾く癩の境ぞ。開も
亦後の障ふるゝんとへば紀二六含笑てかの意い料りかけれども犬江主の神々ぞ臨機
応変の才匠ゝかれば縦其頭の情欲ありとても免るゝ易ゝてんそれゝも猶危ふべ。
試驗の沙汰あれども犬江主の本事をゝく。失ふべゝも尓の義も心安ふべし。寔ふ
今日料らぬる遭際の長談脩話ぞ。憶ぎも日の暮れば宿所へ伴ひまゝるゝ。餘
談を盤ぞまく思へども。いふ芸我歌店い客經紀們の合歌るゝば側ふ憚りいとヨヌゝ。
倘又異日小可ふ逢まく欲しぬ。朝まれ夕まれ這橋畫処ふ鳴立く我賣買ふ出る
毎の去向帰路を告ぬ。対面輒ゝ庶べれと諭せば代四郎點頭て。好々その義もあゝ
ゝ。嘻和郎い陪臣の若黨ぞ惜ぞ才子ゝ開て犬江主の見出て。今番の大事ふ使
ぞる。那眼力も亦ゝ。和郎倘ぞの地ふ来て在ぞへ我豈那里の風聲秘密を恁
ぞ具ふ听くゝ。寔ふ珍重々々と誉れば紀二六頭を搔く。恁ゝ今ゝふ面正く

もゑ言ゑぐゝ小可が親へ常陸ゐ鹿嶋の郷士ゐりけゐ家酷く衰へく世を去りゐ胞弟兄もゐ。憑ゝ此親族もいを。獨今の東人蜑崎照文へ我外戚の小父ゑれへ小可年十二の時迥ゐ那里身を寄ゝ厄會ゐ做りゝゐ習武藝ゐ人業その師ゐ就ゝ教られ近屬猛可ゐ引立て若黨ゐゝて使ゐる。那洪恩ゐ答へべきようゐゐゝゐ這回の大役東人ゐ代れとある教諭ゐ辭ゐとゝゐを左ゐゝ右ゐゝ仕りゐ。ゐも秘言ゐいへべ人ゐゐ噂をゐゐひそゝそ創く諦を那身の素生ゐ代四郎只顧感嘆ゝて然べゝて肇より出処卑ゝ此人の子ゐゐゝゐとゐべ思ひゝかども蜑崎主の猶子ゐゐむとへ知ゐを礼を致ゝゐ。許ゝゐひ。卒然ゐ復ゝて這里を逢べれとゐひく躭て身を起ゐ。紀二六ゐ共侶ゐ異日と契る望月の鑑へ人の信と信曇ゐ心潛ゐ宵の那壷盧の宿ゐゝを五條頭の杪枯ゐ寒けゝ袂を分ちゐ。遂ゐ左右へ別れけり。案下不題大江親兵衛へ那日紀二六ゐ教諭ゝゐ。餅書の計策成りゝゐ。傍ゐ人のゐゝ折ゐ餅を披ゐて。

内ゐ細書と一箇々ゐ食ゐ出ゝ懷ゐゝて皮のゐゐ米饅頭を喫べく。その餘まるを庭ゐ拘児ゐ投與へゐ。餡餅をゐ奴隷ゐ取らせゝ。當晩夜闌人定りゝ後單枕上ゐ行燈の光りゐゝ件の細書と披ゝ見て。德用が詐政元の佯誑の事情と沼ゐゐゝゐ。その書と焼く焼盡ゝて枕ゐ就ゝ思ゐゐ。管領陽ゐ台命と唱く咱們を抑めゝ別ゐ故ゐゝとゐゐむと思ひゝゐゐ。思ひ此ゐ。結城の悪僧德用へ香西復六が愛子ゐ改元主と乳兄弟の因ゐ者ゐゐんと非如那奴が毒計を萬て我を揣ゐゐ。邪へ是正ゐ勝ようゐけれべ試數ゐの勝負ゐゐ我還ゐべ此路へ開け又只自然ゐ任せゐゐと思慮ゐゐ倒ゐゐの夜と安く睡ゐけゐ。徳而又一旬許を經く。秋ゐ。絶ゐゐゝ時候香西復六が奉書をゐく。親兵衛へ鴻へ示を乞ゐゐ。その書の略ゐ寡君ゐゐ公く改敎の暇と沼ゐゐ。べ明日對面せと仰ゐる見參已牌ゐるべ。とありけれべ。親兵衛隨即義書を寫ゝ使ゐ遞與ゝて。躭く准備を整ゐゐ必是明日の見參へ試數ゐの事ゐるべゝと思へ

ども謙ぐ氣色多く。その詰朝公服を着け。両刀を腰ゐて。徐ろ宿所を出る程ゐ那堂管多
両個の小吏ハ先ゐ立て案内を致し。両個の隷若黨ハ左右ゐ従ふ且奴隷ハ鞋奴あり。柳
筥を持るあり。都て後方ゐ跟てもくゆり。既ゐ親兵衛ハ副玄関よりうち登れば青侍案
内ゐ立て正聽ゐ造らあり。香西復六それを迎てその旨を伺達も。當下青侍多左右
より。徐ろと立蒐りて。間多隔亮を。廣く開くとこそれば。政元ハ長袴小刀ゐて正聽の
上座ゐ在り。有司ハ左右ゐ四維列れる。并び中ゐ又五個の武士あり。或ハ眼圓ゐ髯の迹蒼く
或ハ身材高く骨逞しく。或ハ飾磨紺或ハ褐色の社衍の肩陜く下短ゐ綿繊の小
袖の緯足らで。肘の見る可るを一様ゐ被て。二尺五六寸もあらんと云る腋挿の刀を各腰ゐ
跨へて。肩を尖らし。臂を張り。夜々として有司の上坐ゐ在り。又政元の後方ゐ侍る。一個の
法師あり。年歳ハ三十八九多へ。身材高く。肥膏盈て。面皮浅黒く。眼ハ蚺蛇ゐ似く。
鼻ハ狡猊の像くるゞ。鼠色の光絹の小袖二領可襲被て。烏紋紗の法衣の両袖を

巻抗て。身柱の上ゐ。締紈ね。袈裟を。胡意揖ぎして。畳て扇子ゐうち乗く。右の
傍ゐ措くる。是則別人多へ。刑餘の光僧徳用。親兵衛を杳ゐ見る。眼光凄く。
勢ひ鑑で。扣えて。登時香西復六ゐ親兵衛を領て。我を入り。政元ゐ向ひ額を衝く。大
江親兵衛召ゐ因く。参上と。申え上れば。政元則親兵衛を。間近く。找して。詞徐ゐ示ゐ。
犬江仁義れ。隊ゐ。偽達ゐる。汝の武藝御臨覧の事。上ゐ。御ヨメ教ゐ。御坐せば。いまゞその
日とトめかゝる。政元先試検ゐ。毎く。雌雄を。亶ゐ上よと。昨日仰出されゐ。是ゐより。今日
ゐも我邸中ゐて。咱們実撿もべ。彼者ゐ。武藝の次第を。第一ゐ白打。第二ゐ。劇ゐ剣。第三ゐ
鎗。第四ゐ弓。第五ゐ火銃。第六ゐ棒。ゐるべし。敵ゐハ則五六名ゐ過ぎヨメハ是當家の
勇士或ハ又將軍家武林虎賁の英臣と。北面の武士も是あり。復六其ゐ其兵を毎ゐ汲
會せよと。課されば。件の武士多ゐ。俱ゐ膝とそ。找めける。當下香西復六ゐ。親兵
衛ゐ。ゐ向ひて。大江生是多へ白打。緝捕の名家と。ゐえ。二階松山城介允可の弟

子。則其の地の浮浪人當家の壯佼們が師と憑めば月俸數口賜いまる。敵齋經緯
是又次へ數多の師範とて。亦當家ゟ客遊さる。鞍馬海内真賢是又その次へ鎗
法の達人將軍家の勇臣。澄月香車介直道是又その次へ騎馬砲自得至妙の名
高。亦當家の英士。種子嶋中太正生是又その次へ射術の名家昔
後醍醐天皇のおん時ゟ南殿近く飛行ス。怪鳥を射て隊主と名と揚る隱岐
次郎左衛門尉廣有が六世孫。則當今北面の武士。秋篠將曹廣當是又
と一個々ゟ汲會ス。れば五個の武士。ゟ。ゟて俱ゟ找出ス。親兵衛ゟ名對面をあさりけり。姑
且ス。改元ハ從ス。親兵衛と喚ケ。今我後方ゟ侍る異法師ハ是東國の客僧。
素より當家ゟ俗縁あり。尓ゟ。の僧生れ。ゟ。その膂力の剛ゟ。又那辨慶ゟ弥
增て。重六十餘斤ある。鐵の鹿杖を自由ゟ使ふ本事あり。矧又數劍剽姚ゟ長る
ゟ。ゟ。則砍の但馬和田新發智と云とへども。屑ともせざる者。ゟ。ゟて。他を汝の敵

て。ゟ。ゟ加えゟ。其本事と見まく欲ス。この。ゟ。ゟ。傷を。ゟ。ゟ。ゟ。ゟ。徳用脆て找を出ス。親兵衛ゟ
うち向ひて迭ゟ默礼ス。ゟ。ゟ。件の武士。ゟ。ゟ。ゟ。ゟ。上ゟ坐ス。當下改元又ゟ。親兵衛並ゟ敵
て。ゟ。ゟ。ゟ。ゟ

免る〻路なし。左ても右ても勇士達ハ及ぶべくもなけれども。然ばとて武士なる者が。敵なと怕れて今更ハ云云と辭へ禀さば。即坐ハ頭髪を前刀棄て。高野ハ入るより外ハ術なし。只ハ従夫ハ備へのこと。答へ徳用を尻目ふりけゝる真男の魂氣色ハ見れ〻と改元然そと。苦笑そ。卒然ゝば准備といそぎね又後ハそなたハ身を起〻つゝ奥ハ入ると。徳用一雲時見送て。安敵齋ハ向ひていやう。酒家法師ハ相応〻から如武勇の士えあるとのそ各位ハ加えられ〻と。傷痛く思ふれん。去られども三四百年来叡山の衆徒奈良法師ハ武勇ハ誉あるも勘ふるも。猫児も釋氏も推並て皆是國家の民ゝ義ハ仗て。弥陀の利剣浅振ざるとと。汝ぞ非如真剣ゝ〻もとも我一棒を喫ん者。孰ゝ往生せざるべき。然バ死〻ても怨るなよ〻と。神文ハ載めいる。舘の賢慮脱落る〻。実ハ敬服々々と誇ると復六推禁めて要ゝ宏言せども在れ卒犬江生諸勇士達且別席ハ退て。儲の饌を賜りて。准備とそといそぎせば青侍ども。親兵衛と徳用を分ちて両室ハ案内〻ふの餘敵の武士ハ一席ハ。皆共侶ハ案内ハ就て。その席ハ赴ける。人間ハ時移りて。響く正午の土圭と共ハ試鼓と。促せ大鼓音。繁〻と。宵えけり。登時犬江親兵衛ハ。身甲ハ胫甲脛楯ハ。袴を高く。結を伏姫神授の短刀を腰ハ帯び。小月形の名刀を右ハ引提て。青侍ども案内をせられ。徐ハ庭より外ハ出て。儲の場ハ赴く程ハ。那五個の敵の武士。安敵齋。經緯。鞍馬海鳴。真賢。澄月。香車。介直。道種。子嶋。中太。正吉。秋篠。將曹。廣當ハ各一二の弟子ハ。木刀。槍。棒。弓。矢。鉄丸。鏃。硝を持せて。出て試鼓の場ハ。聚へ。開ゞ中ハ。徳用。南蛮鉄の鏃衫の上ハ白綾の小袖と。被下〻。烏紋紗の腰衣を。高く。褰げて。緋紐。結び。紈ね。聖柄の戒刀を腰ハ。帯て。銀の鋲打る。細鏃の釵。十王頭の。蹬。繻ハ。身を固め。鼠色る。光絹の。千葉巾ハ。金の。左纏の。顱纏。あると眼。宵ハ。載と。靹。深の。綿紗の。三幅。糾合〻る。裃を。掛る。るハ。那。新制。衣の。織の。鹿杖。六十。斤る。と。腋挾。足。白。芒の。戦鞋の。重底る。と。穿。做て。隨従の。徒。弟。陸。釋。坊。堅。削ハ

発児を執りて乃然張出る面魂苛めく一人當千の威風あり。その他五個の武士毎も或は鎧形或は身甲衣の下ゆ透間もなく武具せざる者もなく小袖袴ゆ綺羅を盡して繻紐の裨一様ゆあの日と晴と打扮ゆめるら徳用が華麗ゆ四下と拂ふ勢ひ玉及ぶべくもあらざりけり然がの処は素是走馬場頭ゆして五十間ゆ八間の平坦(左右ゆ結縷草生の小塘堤あり)開を二十間ゆ九間の際袖搦可の四日は離笆と締造らしる。四方ゆ両折戸の小門あり。則這里を試毅るの場として南の塘堤ゆ高く假廏閣と構えるその作りざま勾欄ゆ似て檐下ゆ紫の天幕を張亘後方ゆ五六鰭の金屏を建繞らして肱檜の欄干ゆ猩々緋の氈幾ともるく掛れば四下も赫奕可き吉野龍田の春花秋葉を一度ゆ長視る心地をせり。這假廏閣ゆ堤塘の下ゆ縁道ゆ席と布きて執筆の有司二三名小机る硯の墨堅と磨るどこの合の次第簿を所き見て将ゆ雌雄と録さんとも又北る堤塘の這方四目は離笆の内ゆ雑紗の打刻衣外套

純子の野袴穿て鮫柄の両刀と帯る両個の実検使発児ゆ尻と撻て在りその餘介添の武士五武師の門人職役ある者数ゆ捍棒を衝立て場の四方と守りて又鞍揩る色々の馬数十頭各鑣奴ども牽て来てあり。ゆ堤塘の下ゆ在り今日の儲ゆあるべれども其の数殊ゆヨヌ人ゆ武備を示さん為る狩勝者ゆ牽出物の准備をうんと人食思へり。却試毅るの時ゆ臨て大鼓と鳴らしてこれを促ゆ鉦をのく退く暗鵜とも有司見るの幾分固條と死しても怨るーとらふ拉言書の神文を親兵衛と敵るの武士们と徳用ゆ復讀示して改元の命を伝ふ有任一程ゆ改元ハ華美多衣紋裃ゆく小刀とのと帯る。大刀とバ胡意近習ゆ執らして既ゆ假廏閣の中英ゆあり。その日扈従の老黨若黨香西復六を首ゆく有司近臣二三十名都て公服の肩と比べ袖を列ねて齋整と左右二側ゆ侍りて姑且く又試毅ると促も大鼓撥と早めて打鳴せば東の方七小門ゆ。試毅るの絶ゆ入る者ハ是則別人るく犬江親兵衛

仁る。袴の稜とり結まこる。身装上ふ寫ぎーどく。先政元の假殿圖ふ向ひて。跪居く低頭揖讓の礼正う者。阿容る色る。更ふ又西ふ向ひて。徐ふ敵ふ近ぎ程ふ介添の武士。長ぎ。棒木刀を携て。親兵衛の後ふ。隊より第一番ハ白打槍棒と定められーふ。鞍馬海傳真賢ハ惣雄の猛者。れば。恢へぎ絶内ふ找ぎ入り。両個の実検使ふ。向ひく。大刀ハ是戰場ふ。第一の器械。れば。即これを短兵。といへり。白打ハ近来の武藝ふ。式ハ巷路軍組。殺ふ要あるのぎ。在下御免ぎ蒙りて。第一番ふ找むべーと。詞ぎ。ーく。断ら演。答ぎ。親兵衛の。身塹ふ造りて。相距ること五六尺の程ふ在り。跪居く。迭ふ。黙礼ぎ。海傳介添ハ。則。允可の弟子。ぎく。後ふ。後方ふ在り。携ぎる赤樫の木刀の長二尺許ぎる。対坐の間ふ。措く程ふ。親兵衛の介添も。赤携ぎる木刀を。出ぎを。親兵衛急ふ推禁めく。否。晩生ハ。熟ぎる。這鉄扇ふ。海傳。外ぎめく。原来酒家ぎ敵ふ足ぎ。と和主ハ思ハ侮ぎ。狡然ぎ。酷く輸ぎる

折器械短ぎ故ぎ。分説種ふ。為狡。烏滸技をせく。木刀ぎ。と。兵衛芸完ふ。と。笑く。不ぎ。と。開戰の利ハ器械の長短ふ。ぎ。ふ。戎ハ敵のヨメ寡ふ。縁りぎ。その場の廣狭ふ。據りて。甲も。乙も。俱ふ。要ふ。長ぎ。ハ。殺ぎ。ふ。利ふ。れ。ども。刺ぎ。ふ。不便ぎ。豈徒長ぎを利とのぎ。せ。や。と。ハ。腰ぎる。鉄扇ぎ。抜出ー。右ぎ。ふ。合ぎて。這鉄扇ハ。我為ふ。活人殺人。二剣ふ。勝ぎ。ち。要ぎ。ぎ。膳ぎ。と。前。人。より。卒々。本事ぎ。試めく。と。嘗られて海傳ハ。性起ハ。満面。火のごく。憎ぎ。小猴子ぎ。似而非。廣言。思ひ知せん。覚期ぎ。せ。と。罵る。武者。聲。苛めく。木刀ぎ。隼く。掻。含ぎて。働ぎ。と。身ぎ。と。起ー。耶。と。聲ぎ。ひて。眉間ぎ。蓋く。丁ぎ。と。殺ぎ。ち。ぎ。親兵衛。閃ぎ。と。身ぎ。を。反ぎて。鉄扇ぎ。を。ぎて。丁ぎ。托地。と。受流。打拂ふ。修煉精妙。神出鬼没。電光石火の眼ふ。見ぎ。ぎ。又ハ。陽焔飛禽の形ぎ。影ふ。如く。ふ。ふ。ふ

第一戰親兵衛海傳を懲

四十許。身材五尺八九寸。烏髪ふり乱して胃毛赤く色浅黒く。皆刻衣けく。聲ハ銅鑼を鳴らすに似たり。鞍馬八流撃剣の妙奥を窮て京師に名あり。その教を受る者千人を数ふべし。ちゝとして天の下に敵なしと思ひ誇れる自負大言して忌憚らぬ況今親兵衛が少年ふり優悄るを。敵なふ足らぬと侮りて敢合合の次序を守らず。辰く真先に找出て只一撃に仆さんと思ひ。刀を抜れく。受刀ふのゝ序をもあらで。猶精神を励まし。嘘きも叫ぶ戰ひけり。閑話休題。小程ふ大江親兵衛ハ海賊が山荘より蒐る。修煉の木刀を物ともせず。一尺二寸の鉄扇をもて。幾番とゝく左応右接て。其疲労るを。程ふ海賊悉く神衰へ刀筋乱れて。酔るが像く。蹌々として走蒐る。親兵衛ハ每ゝ引外して。鉄扇を海賊の右の拳を礫と撻て。撲れて骨や摧けん。憶ふ木刀を曼哩と隕して。怯むを透さず。一と蹴る。至妙の白打ハ海賊ハ筋斗うつ仰さまふ地响高く。平張仆まで。一霎時ハ起あがるを。介添の弟子等。驚て瞻板起して。肩ふ拽て退けり。登時親兵衛ふ介

添る一個の武士ハ。准備の水と沙碗ふ汲て。それを蒐めるとまるふ。親兵衛ハその水をもて。絶ふ口を漱ぐのみ。自若として又敵なふ程ふ。うち鳴せ大鼓と共ふ。離色の西の小門より。徐ふ找て入り来る武士ハ。是則別人なるぞ。槍棒白打ふその名ゆえ。安敵齋經緯なる。ハ。亦年歳ハ四十ふ過ぬ。壁縛身甲ふ身を固めて。袴の弓折精悍く。介添の弟子と。二人後方ふ従へる。事の形勢海賊ふ越られぬれども。恨る色なく。先実検使ふ黙礼して。躰く親兵衛ふ立向ひて。跪居て莞然とうち笑て。適ハ大江生目今の御本事。敵なふ足るべ我をもねども。擇ふ因て。辞ふ由る。一棒試のゝ。とふを親兵衛うち聴て。現是棒ハ長兵器。鉄扇ふてハ相応ハ。晩生も棒をもて。御敵なふ立んとふ。答ふ左右の介添ハ素樫の棒の六尺なるを。両個の傍ふ差出せば。迭ふ含て身を起せ。安敵齋經緯いそが儘此下退て。件の棒を隠して。又敏ふ扱て。含直て輪々とうち振まハ。但風車の輪るが如く。現經緯ハ分く。ふいとなり。ろく見えなりける。

既ふして敵齋は更ふ又棒を含む直ーそ。然らば参ふ大江生とのひつ仁と桟向ひて身を構へて左右ふく敷ふ。猛可よ悩る面と頻単ゆそ。嗚呼とぞろふ又聲かけて。殺よ殺ゆ犬江殿と禁めそ些ー退ぞて。咱们近曽折ふ觸てら轉筋痙壁の持病あり。目今も亦その病痾猛可ふ發りく筋動ぞる脚癱れて堪くから迷憾くい思へども。將息ゆそ異日のるふゆそ実検使達の義をのそ。宜く仰上られよ。痛ー疼ー。とぞろふ。棒を戛哩と投棄て。脚を曳ぞ退けば。介添の弟子们い呆れて目と目を注ぞのみ只得棒を拾拗て。俱ふ後ゆ従ひけり。是より騎馬の爭ひられば実検使ぞらい親兵衛を労ひ推退かりて。共ふ罷りて。主君改元ふ親兵衛海偽が勝負分明の事及ゆ敵齋い急病起りぬとふその言趣を。詳ふゆえ上れば。経緯が弟子と貝谷貝の毎を除くの外は目を注ー袂を被て。敵齋が狡黠さの海偽ふ見懲りて。術よく免れ人為ふて。然る急病い發りけゆ。許しぬで人推出ぞく。下高掉ーて懲さゆそ。と耳ぞ指さて。誚ひ笑ふもヨヌろけり。是より鎗い騎馬ふーく。

雌雄と決ゆべーとふ。豫の定りけれいその鎗尖を拔去りて代ふ白粉とヨヌく裹る素絹れ。壘裹の形鉞のごくゆるとりてせれ人烏草紙の身甲涅ふ袖黒羅紗の戰袍を被るべく。馬も驪を用ふべーとそ。既ふその准備あり。則親兵衛と香車介ふその件々を賜ひけり。當下澄月香車介直道い実検使ふ就て陳ぞるゆ。在下既ふ大江親兵衛が本事を云て知ゆ。他い少年と云といへども。実ふ一人當千へ遮莫倘戰場ゆ。衆敵と相挑ゆ首級喪ふともあるべ。低れば今在下ふ相士一人を借りるべ。必や克ひむ口い單身ゆ十二分の誉を取りかーと。渡りけり。改元れをうちて原来直道い後れる一個の帮助を乞へべそ。

鎗術ふ煆煉ーて今親兵衛の敵ゆふ足る者他が外ゆいまゞ擇まゞその人ゆを爭ひ何ハせんとふ詞ゆまゞ訖らゆ。改元の後ふ侍る近習の中ふ壮士あり。忽地聲を張り立て我君ゆどて人ゆーと。英氣を貶ーのふゆそと。呼りて突然と找出。主ふ朝ひて恭ーく額を衝くゆ。改元驚ひゆりて熟視るふ。亦近習の一人ゆ。紀内鬼平五景紀と喚做を者ゆ。

三町砧を弓張月に八町砧為朝の雑幹へ濠の詭紋に因るの耳熟と改む

その人くるを。身材低く面い枯る解豊の如く。勇ハ車ハ逆ふ螳蜋ハ似たり。當下鬼平五頭を抬げて。憤然として稟ものたり。臣名鎗術の一藝いその奥妙ハ至るねども。總角の比より。好く投石を事とせり。竟ハその技ハ自得して。杪ハ集る鳥梁を走る鼠。これを打ハ謬らず。実ハ是百發百中。百歩を隔て柳葉を穿ちしとぞ。養由基が弓弩則ハも優ものと本事。亮れば人みな並く賞感のあり。則臣名ハ綽號して今二町と喚做す。恁命くる言のたるに。昔源為朝の勇臣と。ものたる二町砧紀平二大夫の本事ハ伯仲まれり。古の義を君も聞召けむ。いかぐ澄月生の帮助の相士ハ臣名を仰付さるの。親兵衛を仆さんと。壷裏の物を取るより易しとぞ。詩返して連りハ請ふて已ざりしを。改元听て。寔ハ小さげれ投石飛器なり。敵を増て二人ハ做ものと。面正しくも古又多ハ飛器ハいかあるべき。先ものの旨を親兵衛ハ告て答を求けかと。指揮ハ実検使名たるなて退て。躯く親兵衛ハ件の一議を偽ハしく。允

さるべきやと。請問へば。親兵衛答て。然ンハ單身ハしく。両個の敵を。ハ望しくば。戰場ならば爭何いせん。然ども投石ハ難義の敵へ。那保元ハその名ものたる二町砧と除くの外。唐山ハも二三名あり。所云曹國の武大智ハその弟子。猿飛と俱ハ投石ものて武功ヨすなり。六合村外項記。巻の十六。又近曽明の呉門の彭興祖の弟彭某の如くも投石ハ妙あるよ。五雜組人の。且近曽舶来の稗史小説元人羅貫中の水滸傳ハ没羽箭張清ハ。没羽箭ハ羽るべき箭前なり。投石ハ羽るべき箭前の如し。因て水滸傳の作者。則かの綽號とて。意ハ今の紀内生も亦その類ハそあるべきなり。あらべ只その一人ども防ぐこと。敵をなるむハ左右ハ敵と受んと。心許るべき技ども。推辭まべ後をしてハ似く。勇士の恥る所なり。左ハも右ハも仕らんと云早の心ハ実検使名たるべき。赤復假殿閣ハかへり来て。隨即主の政元ハ親兵衛ハ答箇様々々と具ハ。ものたる上ハ然らば准備を急げとて。改元則鬼平五願ひを許して立まれば鬼平五欣然と言美して走り

第三戰
親兵衛
直道景
紀を懲す

出て香車介の身邊に進み徐々と告ぐる身壯衣と敕並べの姑且して第三戰の蔓大鼓又鼕々と鳴ると暗號に東門より犬江親兵衛の馬上雄々しく裝ひゆく尖る槍と腋挾み徐々と入り來る程に亦西の小門より香車介も馬を找る一樣の身壯衣馬さへ都て黑うるけの徳而雙方馬をよせて名告りけ槍を拈く一上一下と厮挑む迭の修煉に秘術を盡すべ勝負孰と見る程に既に一直道に堪ずや下槍ふるーよう親兵衛が槍の杪に附る纛の白粉ひく突る毎に衣裳に塗まぐれば初黑かりし戰袍衣の襟さへ胸脯さへ白點駁斑ふるひけり浩処に紀内鬼平五景紀身甲衣裳精悍く馬に拍れ西門より甘奪地に走らーて働と馳拔て親兵衛の後方と距る程十間許馬の鼻つら無旋らーて砾を飛ーて親兵衛を打隊さんと構へる畢竟景紀投石して親兵衛を打隊まや否や开ハ又下の回に解分る聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十五終

南總里見八犬傳第九輯卷之二十六

東都　曲亭主人編次

第百四十回　犬江仁名を華夏に揚ぐ

左京兆恩を東臣に厚くす

紹前頭表後話犬江親兵衛が馬上に香車介直道と槍を合せる奮勇突戰一上一下と修煉の処西當るべくもあらーず直道に突る毎に親兵衛が槍の尖頭る纛の白粉に塗られて黑い外套の胷脯さへ白點駁斑ふるーよう雄飛雌伏の勢に分明事早き果なんと入みる瞬もせず覷る折々又那紀内鬼平五景紀が西の方なる小門より馬を蓦直に走らーて來て働と乘拔て親兵衛の後方と距る二十間許馬を旋らー跨居て准備の布に纛る小石を抓で聲高に犬江親兵衛正に听け當官領家の御内に今三町と綽名せれ。飛砾の鬼平五景に在り海内に雙自得の一石受

てもアヨやと喚りて項を臨ぐ礮と擲つ然しも宛鬼は錯るど親兵衛は軍直道の槍を
勝ぐその身を左へ閃りと避る馬上の剽姚斜ふ走りしその隙ふ投石い空ふ飛過く親
兵衛と斷戰ふ香車介直道い眉間を撲地と打破られて宛所の痛痍ふ一霎時も
堪ぜ馬より撞と墜てンげ俄でで鬼平吾景紀い怒ぎて驚て二ゝび小石を
撥抓む那時遅ー這時速ー親兵衛も亦懷ふ准備の小石を含るるもアせぜ身を探
返ーく丁と擲つ修煉神速毫も差ぜ景紀も亦額を打れて潰る血と共侶ふ一聲苦
と叫びも果ぜ脚空さるふ馬上より斤ヰそ墜ふけり登時介添の武士直道の門人警固の
走卒執鑣の奴隷まで驚ぎ呆れて皆東西へ走寄りて両個の傷瘡児を勦り抱て
起こそ膂力ある者いそれを駝ひ後ふ立つ者い脚を吊り又鑣奴ぜい二頭の馬を牽駐め
推鎮めて退りそ小門を出ぐ出ぐと本意ふ思ふ毋へれど為ふ面と掩ひ又理義を辨へる
老兵ぜ景紀ど小投ふ誇りて敵を知ぜ世の俊傑を家鹿小禽ふ齊ーと思ひけん

大江が剽姚ふ眼眩ぐ同士斃る者ぐるのぐらぜ反て那身へ大江ど飛礫ふ打れて死活も知ぜ
ぐりーへ直道ふ増ぜ不覚ぐ是ふ就ても那少年へ神の化現欤皮又天狗欤怕るべくと稱
ぐ感ーあるける是ぐりて又騎射騎銃の試合れば親兵衛も馬を返ぐ憩ひて其准備を
整ふ豫へ射場ふ靶子を建て各それをりて其巧拙を試るべ。とぐりーと種子嶋中太正吉を
難ぐて稟ぐ靶子へ一寸の小ぐをりて甘ぐ素より是死物へ人身へ是ふ五十歩ー其
長五尺ふ満れども則是活物ぐ然バ一寸の的を外ぜその烏珠ぐ貫くへ易く乱軍奔馬の
中ふて或へ銃砲或へ弓矢前をもてその指ぜ敵ぐ殪さんとへ倒ふかぐ技ぐ今愚意をもく
ぐの弦を做ぐ親兵衛並ふ我们二人俱ふ綾藺笠を戴て笠頭ふ小的ぐ建馬を縱横ふ
走りて放者へ放射る者ぐ射ばその技小笠撫ふ似て小ぐ立撫より猶かぐそれふ願ふぐの
弦を許さぜぐ只庸常ぐ射場の小的へ誰も做ぜべくべ。その巧拙を見ぐふ足らぐ賢慮ぐ
仰ぐ。只管ふ請ぐ政元聽ぜ頭を掉りて开へ極めぐ危ぐ所ぐ倘其銃口一尺差ぐ

誰ゝ命を喪ざらむ。死ても恨ゝ。拙言書に載れども。弓箭火銃に格別の益用なしと禁
令正告又稟もやう。御意に悖ぐ罪なぐ。恐れある義に及ぶ。昔保元の戰に那為朝の
強弓ゝ寄隊の大將義朝。兄ゝ故に射て殺ゝ。只その頭鎧の緒を射断て敬事走
せ。例もあり。鐵砲に近ぐ比蛮貊載来る兵器ゆゝ。ものごとの上ヨリ見ね。其頭の例を
とへども善ゝ者に弓箭に勝ゝ。百發百中疑ゝ。いでゝと諍復ぐ。改元ゝ。
ひて。現その至如に至ては。則弓箭と鐵砲とその要異ゝ。若ゝ。
知ゝ。親兵衛ゝ修煉剽姚。よく鬼平五の飛礫を避ゝ。反て鬼平五を打ゝ。
倭れい中太ゝ鐵砲。ゝ心とゝ。況や本竹馬乱爭ゝ。趕ゝ。各々箭を發
ち凡を飛ゝ。憶ゝ。假令ゝ造ゝ。或ゝ。実ゝ。使ゝ。損傷
ることもあらん。是も亦知るべゝ。然ゝ危ゝ。枝をせんゝ。
竟その説を聽ゝ。然ゝ政元ゝ。今躬方の毎ゝ親兵衛に拗れて不覚を取り

恨とせゝ。反て親兵衛の武藝を愛て。以云云と最惜む。豫用に弥増て。実に一
人當千。ゝ。縱五六の勇臣と。ゝ。他を。ゝ。身の杆城に足ぬ。心悄地に捨
ゝ思ひ。ゝ。又種子嶋中太正告ゝ。ゝ小的を建て。ゝ。修煉をゝ見て。
高く。ゝ。真賢直道景紀。ゝ。皆親兵衛に雖伏。ゝ。毛を吹て疵を求ゝ。
那身ゝ。ゝ。我君侯の面伏。ゝ。京家の武威を貶。ゝ。我銃口に
かけて。那奴を結果ゝ。恥をゝ。ゝ。と思ひ。ゝ。機に臨て。言を設て請ゝ。政元その
議を用ひ。ゝ。准備。ゝ。初正告の計較を。廣當に見ゝ。ゝ。枝と和殿と
心を合て。那少年奴を前後より。椎挾ゝ。祖殿。那奴不測の術あり。非如箭頭を
免ることもゝ。ゝ。銃口に避ゝ。暇ゝ。ゝ。その議に任ゝ。ゝ。と提ることゝ。説誘を
廣當急に椎挾めて。不ゝ。愚意に同ゝ。ゝ。狼犬江を射て殺せとも。射ゝ。的に
ざれば。弓箭取る身の恥ゝ。誰ゝ。依ゝ。ゝ。且我當黒の試殺に犬江に及ばなろ

たゝ其身々々の拙き故のみ。開と輸とを他に怨まず。邪みて理義なきを況や已に勝
まるを醋心のあるせるを。悄地に謀りて敵を欺くまく欲せず。奸虐の罪免るゝ能はざるを強て謀
るとも。本意を遂ぜん慣と洩さん由なのみ。射ん的を射ざりしと。後悔とも
及びなかり。雖言も敵齋の鄙怯なるを是浮薄の本性なり。恥と知ざと云識なきもの
已と知るとも。戰せて負るを不爭敵の名誉自性欲笑ふに堪る者多し。謀りて
犬江を害せんと欲する邪念猶優れり。思止まれと理切に諫めと正告聞かざる悖
然として好々其意なるを和殿と憑まず我せんやうとの人捨て傷と立出て有司に
就て云云と笠的の弓を願ひ。政元敢聽さるべ。大江が後安を思ふの正告も亦奸
虐の罪人なるに逮ひて面と記せとうさんあるべ是小人の幸ひ後ふまの言の洩れ折親兵
衛これを知りて驚嘆して思ふ。那種子嶋が小人なる今ゆゝ齒に撓るに足ねど昔
唐山宋の康王に射る毋に人をもて必的なせとの残忍なる做ひけ或又今戰世の

諸侯の專々驍勇を好む家に運錐なるあり。究竟なる後生と。因坐に非ずなるその中
央に機関ある鉄砲に火を刺る。一人急に牽輪まるその銃丸發して斃るゝ者あり。斃
きて死るゝと雖命とて。父母親族も哀まず。徒て屢運錐に斃れざると高運とそ
重く見と用ふと云孫子に將に福女を擇むとの論に因る狹福に高運女に眉を寄へ
その美に是異なれども正告笠的も日と同くして談るべ。獨秋篠廣當に尾碎の中丸
片玉なる哉その言都て理義分明実に是君子の風あり。徒て祖先陰岐廣有を辱ふと辰さ
る賢者に。そと稱賛して。悄地に批評あるを是後話と。小程に大江親兵
衛に秋篠將曹廣當種子嶋中大正吾と共伯に歩立して弓笠前錦鉢を推るゝ
射將に入る程に頃者なる天津鴻鴈遥に北なる雲間より南へヨヽく渡るあり。政元に假
一箭に射落とり逸早く見出して急に近習を走らして。件の三士に射るやう。目今居ヨヽの天
津鴈這方を投て來るあり。各他を射て捉りね第一箭に親兵衛なるべ。二箭三發に

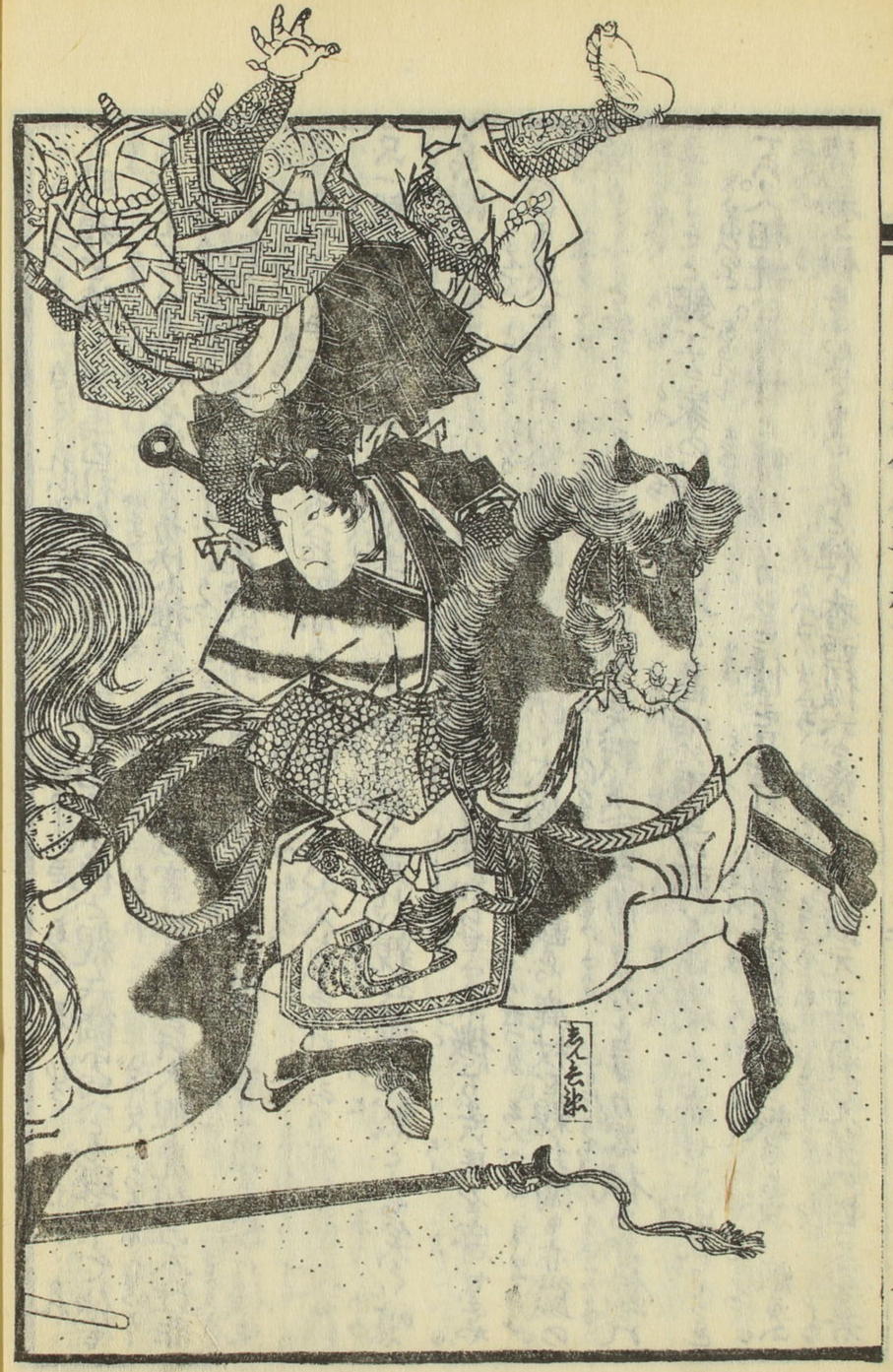
将曹中太左ゐも右ゐも便宜ゐ儘せよ。疾々といそがば二十羽くて共侶ゐ其方と通ゐ瞻仰るゐ笠前屈極く遠けまじ届くべ況涯りゐあらざいうゐせまり。と思難るそ中ゐ親兵衛尋思ゐ及ぶ氣色もなく。介添の武士ゐ持ーる鉄砲是へと受令ゐ那鴈程ゐ近ーり時天ゐ向ひて空丸の火薬を鑄て撞と放せば群鴈これゐ驚いて列を乱して翔々と降るを狙なり。と鉄砲投捨弓ゐ笠前刺く彈と射る前屈差ゐも一隻又の賓鴈強ゐ応ーく隕ゐけり。廣當と正告ゐ大江ゐ段ゐ便ゐと急く弓笠前鉄砲共侶ゐ振仰放ゐ修煉齊一亦復隕る両隻の鴈鮮血ゐ染れて地上ゐ在り。登時廣當正告の弟子名ハ大江ゐ介添の武士と俱ゐ五箇の鴈を含抗て各射人の姓名を牌ゐ寫ー脚ゐ結びて実検使と共侶ゐ随即假庖厨へ赴くまゐり。と政元一箇々ゐうち見るゐ種子嶋正告ゐ鉄砲ゐ隕ゐ鴈ハその項と穀ゐ断られ頭ゐ失く鮮血ゐ流れ出ち又秋篠廣當ゐ射る鴈ハ左の羽れ下ゐり右の背へ笞本深く串れて血ゐ入染るのミヨく汚れも單犬江親兵衛ゐ射て隕

ゐ一隻の鴈ハ其羽と縫ゐのミゐく聊も身を傷られ猶ハ悲鳴くと連のミ政元既ゐ撿ー畢く且歎び且感ゐて大々ゐ賞ーて実検使ゐと召てゐ若们れを何と見る鉄砲ハ近歳是舶来の兵器ゐれば。まゐ是をのて翔鳥を穀ゐ隕ゐー者ゐ少ちゐ中太ゐ修煉賞ゐ。只惜むゐくその首の喪いる故ゐ一身不具ゐ。貴人の食膳ゐ備ゐ難ゐ又秋篠将曹ゐ家伝の弓箭佳妙ゐ本間孫四郎ゐ伯仲ゐと称ゐ。ゐ武中犬江親兵衛ゐその羽を縫て鴈と傷らゐ。ゐ丈鴈ハ礼儀の鳥ゐ。ゐそ天飛ぶ時敢長少の列を乱ゐ。ゐ先ハ来賓と来ゐ。ゐ後ゐ来賓と賓ゐ。ゐ便是呂氏の月令ゐ本文ゐ鴻鴈来賓即是ゐ。諸侯の贄ゐ其ゐ禽ゐ執ゐ。ゐ来賓礼讓の義ゐ因ゐ故ゐと豫ゐ。ゐ儒官ゐ学ゐ。ゐ者ゐもあれば。仁ゐ也ゐ這義を思ゐ。ゐ狩射て隕ゐーのミ傷ゐ。ゐ殺ゐ。ゐ是則他ゐ名ゐ。ゐ仁字ゐ稱ゐ。ゐ愈妙ゐ而ゐ。ゐ翔鳥ゐ。ゐ先鉄砲の空丸ゐ。ゐ撃ーて引ゐ。ゐ臨機応変ゐ。ゐ才高ーゐ。ゐ廣當ゐ。ゐ正告ゐ。ゐ便

と云て共ふる柄を見へ〻ら。佞れば這回も親兵衛ふ勝れる者誰らあらん次ハ廣當次ハ正告甲乙丙丁分明ゑれば小的の勝負ハ見るゆも及ばぞ。正告ハ的を嫌ひて死物へとく難せ〻ふ不用意ゆて活物る。鳥ゆゑれば本意ふ稱んこの弓を三士ふ傳へよと言詳ふ宣示きそ。親兵衛ら射て隕ゑ〻鴈の獵箭を拔て勒ら放せば其鴈忽地かゝくと鳴ゆ高く身と飛あそ。雲を凌ぐて失ふける。偖而両個の実検使ハいそぐく射埒ふかゆて來て隨即君命の趣を親兵衛と廣當正告ら。ふ箇樣々と傳るふ單正告ハ敬服せ〻門人ゆを〻ゑ〻ゆく。汝達も少さるきゝむ武士の戰場ゑ莅てハ。敵の首を捕てこそ功名といふ〻ゑれ。今日きゝ表裏ゆそ。鴈の首と打隕ゑ〻ゑ第三番ふ做されハ我身の不幸といまゝくの〻弓箭鉄砲這那と捉出〻射て捉り〻。その鴈ふ疵ゑれハ鉤のゑふ〻と餌を添ふ釣獲〻魚ふ異ゆ偶中といふぞゆ。第一番ふ做されハ憚ゆ甘心ゆぐて。世ふ鉄砲ゑ天飛ぶ鳥を打隕ゑ〻ゑ我のゑゆると語り續ぐゆひそ傳へて。後世勝負ハ定ら卒秋條主退るゆ。とゆそゆら共侶ふ西の小門ゆら出てゆく程ふ親兵衛も亦実検使ら。ふ欽びを演て退ゑとせ〻実検使ら。ふ推ゆそめて今ゑゆ騎馬の槍棒送れり日影傾ぶハ目今馬をまゆ〻ゑべ〻權且ら。せのゑゆそのゑ言ゆまゆ果收間ふ両個の奴隷ら。牽ゆく來ゆる馬を卒そ萬る程ふ又八九個の奴隷們ら。呼喚玲叮ゑ東のゑゆら肩擔連ゆて來ゆるゆそれハ是六尺許る。大ゑ鐵の棒ゑけり當下実検使ら。ハ親兵衛ふゆち向ひて大江生這回の敵ゑふ殊ふヨヲ力の暴法師ゆく。重六十餘斤ゆふ鐵杖をとく使ゆ。和殿ゆヨヲ力の少ゑあれハ王君心を用ひさゆて作ら〻ゆ〻鐵の棒。重八十二斤ゆるゆの是ら。那蜀漢の関雲長の青龍偃月刀ふ擬へら器械自他相応〻かゆむ。それをゆそ雌雄と決めさゆよと宜ハせ〻君命かゆの如くふゆそと告るゆ。親兵衛ゆ〻ゆく。開ゆ殊さゆる御准備ゆく。添くゆそゆゑれいでゆく。とゆゆら。ゆ子射具脱捨ゆく。袴の稜を結ゆ介添の武士ふ持〻る繻紐を襷ふ考ゆ。鞍ふゆを載けの無る馬の足極を試ゆ。推駐ゆく。其棒是ゑと指招けば又奴隷毎居ヨヲ〻ゆと推建

る鐵の棒を力を勠てで一歩拔ず曳々と馬の邊へもて寄れば親兵衛ハ馬上より件の棒を隻手と揭てやとう披揚げ今も直ぐて振試々腋挾む面色変ぜず自若る身ぶり驚く衆人ハ假廐閣も這里も推並くさそもくとなるを呆れて倶ハ長覩て在り有徒程ハ第五番の蒐大鼓又鼕々と打鳴せ西のくる小門より馬を找る德用ハ打扮上ず寫ー像く六十斤る鐵の鹿杖馬上ず腋挾ミく後ず悪僧堅削をアクヘの喚けて汝も知るや徒然草る説經法師ずあるねども釋氏も騎馬と卑歌ハ嗜てよく せぎハあるべきぞ。ぞとりて我在俗の昔より空門ハ年と歴るまぐ馬ず乘り大刀と舞る武芸も人ず讓るべき取本事とえせぞ。ず居よとハヘ堅削然シハ内典外典ハ博ク武芸馬上の挿ぶぞ。猛將勇士も誰ず亦我師父ず及ぶ曩ず聊失ありーハ高士のなる水漏りて不意と鼕ずとのいるむ這回ハ先度ず同ドくず晴の勝負でハヘ戰ぞーく克を知るぞ憑ぞくいと口と合る自負浪言德用然てそと領ぞ馬を徐ず歩せく假廐閣の邊ず造る時頭を低る騎馬の礼愈早むる大鼓と拍子ず乗と親兵衛ず向ども既ずーて他も亦ハ十二斤の器械をハとも易げず携ぞれ心ず五分の害怕あるぞれ大胆虎狼の本性非如石人銅佛介葛五丁力士まれ樺ず碎ける者あんやと思ひ復ん聲高ずむれ後生覚期と考るや行童ずもあるべき和郎ずどの敵ずず立ハ大人氣ずれとも亦和尚の役ず只一鼕ず往生さ人十萬億土へ走るねと勢ハ猛く罵れば親兵衛莞然とうも笑く噫烏滸ー曩ず那左右川の邊ぞ咱們ず本事も見知らせるず懲ぞハ馬を寄せぞとハハせも果ぞ德用ハ怒る満面朱と沃ぐ大喝一聲鼕ず鹿杖を親兵衛も亦鐵の棒ずく丁と受とめ又打拂ず奮鼕る突戰迭の勁勇ヨヌカとヨヌカ器械も亦鐵れ音丁々と鍛工ず家の鎚ず弥増ぞ高响ハ両馬の頭ハと遣違ーて寄せてハ別れ。てハ又相挑む修煉と修煉ず劣らぞ優ぞ見れども親兵衛ハ始より鼕るぞ只一鼕ず。麦粉ず做ずかくもあらねど他ハ香西復六ず愛子ずく政元主と乳兄弟の因ぞある者

第五戰犬江親兵衛兇禿を懲らす



と一番せば後の障りとなるべしと為ると思ひて勝といそぎ權且輕く假讓ひて其疲労を
待つべし。今日の等程ハ果せる哉德用ハ分ハ過る鐵の鹿杖漸々ハ持重りて勢ひ衰へ脆狂へ進
退遂ハ如意ならぬ氣を勵し聲ゆり絞りて連りハ嘘に叫ぶのみ透もあらず引外れ
退んとのみ思ひ氣色を親兵衛ハ見て息も艱ぎヤと聲ゆ出て德用ハ鹿杖碾と打
落せば發と散る火花ハ眼眩く怯むと透さず馬を寄せて左ハ棒を今ハ直ぐ
右の拳を握固めて眉間を臨て撲地と撻ハ撻れて德用苦と叫びて鞍の前輪ハ伏
た処を親兵衛猿臂を指伸て帶と抓て苞の像く肩より高く掀げて類稀る
勇力ハ人皆駭くそゞ中ハ堅削ハ見るハ泡ハ堪ずして大江ハ馬の脚を拂ふて反や落させ
んと思ハ敬言固の走卒の持る棒を搶ると走卒驚ハ馬ハ分めて奪合せ捩と角へ
ども力足らずして突放ハ郤舍ハ堅削仰ハ棒を抱て三間ハ十ハ德用ハ放れ馬ハ
蹂躙られて死活ハ知ずして平張ハ當下親兵衛聲高ハ人々ハ見や勝負ハ甚

麼恁まで懲ハ莽和尚を投殺さえ狡悄と惜ん狡ハ不ぞやくと問れて慌る実
検使ハ物の答を待ず假庇閣ハ復六々ハ聲とうけて及ず大江生勝負ハ見えたり
擲ハ擲ハ擲ハ御詠ハ御詠ハ扇と用ハ拍敲ハ慌ハ喚ハ慌れて実検
使ハ物の詠ハ及ず親兵衛ハ合ハ矢ハ合ハ矢ハ儘ハ德
用と打ハ下ハ卒ハ遽與ハ介添の武士走卒も共伯ハ德用と抱合ハ又
仆れる堅削ハ掖起ハ俱ハ剿ハ這両僧を左右ハ掖杖ハ腰と推ハ憩
所へ退ハ奴隷毎走歩て放れ馬を牽駐ハ或ハ德用ハ打落れる鐵の鹿
杖ハ索と引ハ共引ハ曳ハ躰ハ曳ハ躰ハ曳ハ躰

武藝精妙。実ニ神出鬼没の挙ニ今昔獨歩といまくのミ。其の弓を上義尚
あげ給ハ愛敬せぬ人ハ是ハ當坐の寸志とて若鮎と名つける大刀を親與ハ
親兵衛ハ受戴して。そゞ儘返して禀を分ハ過ぎる御褒賞汗顔の外いなむ勝
負ハ各時運ハあり。小臣聊做き事あり。亦是一時の幸ハのミ何ぞの功いらむ其御刀ハ
有功の毎ハ下ゝ賜べけれと推辭を改元少あぐむ開いろ〳〵と。謙遜辭讓も時
宜ハよるべし。今日倘和郎を賞せ給ハ何をのそ士を薦め賢と求ぎる志を示さ枉て
我意ハ任ねと連ねハ強て允さゞ。親兵衛只得刀を受て腰ハ帯て又いまう。今日も
二ニ子謬ゝ。浅痍撲折ハ悩るもいむ勿論御内の醫師達ハ療養事足べけ
れども小臣神授の奇薬あり用ひさせぬ人ハ一夕ハくその痍愈ん贈るべうぞと請
問へば改元喜て疑ハ。そゝ一段ゝ所ハ復ハ欲ハ其の神薬と是ハ
そのるべけれと乞ハ腰る印龍と出せば親兵衛も腰ハ帯る薬龍をうち啓て

伏姫神授の仙丹を此一分ハ。印龍ハ藏めて復ハ遮與ハ。其の薬聊ハ百
日の療治千貼の諸薬ハ勝り即効あり用ひやうハ箇様〳〵と諭せば復ハ欲ハ受て隨
御人ハ癒て件の薬と徳用ハ浅痍撲傷ある者ハ與ハ。其の時海鴻賢香車介
道鬼平五紀並ハ徳用堅削ハ撲折杖瘡の苦痛ハ沼堪ぞ倶ハ憩所ハ在り〳〵
疑ひ〳〵件の薬と各用ハ即効果て善とく痛楚立地ハ治去て歩行
宿所ハ還ることゝ沼ハ是ハ件の毎ハ才ハ両三百ハ。痍愈て疼再起ぞ心地清
やハ〳〵かど差て久〳〵屏居く絶て人ハ對面ぞ世の胡慮ハ〳〵よけ。介程ハ親
兵衛ハ又那小吏們ハ送られて徐ハ宿所ハ退り〳〵ハ隷僕們ハ其の日の試數ハ單親兵
衛ハ勇武力藝の儔〳〵と。ハ知りて駭怕れざる者ハ。皆謹く仕へけ。然ハ
幾日もあ〳〵ハ親兵衛ハ武藝英名と。洛中洛外ハ流れ傳へ。神と敬ひ鬼と
怕れて。口順ハ做き程ハ或ハ事を好む者。親兵衛の姓名を寫して門戸ハ

貼れば疫鬼その家に入らざるべしとふより愚直なる民是に倣ふく犬江親兵衛宿と寫
さしその門戸に貼らんは稀なりとて三歳の童とはいへども親兵衛の名を呼ばれば慄
貌と改め或は小児の假寐して厭鬼なる折其母親犬江来々々と屢呪てその子汁甘を
徐に敲けば厭鬼忽地に去るとふ後世犬江を訛りて犬の子〳〵と唱るのそ犬之子即
犬江子〳〵訛るとはいへども亦以あり偶然なるかな知るに足らん狩現外人なもかくの如し況政元の
郎に日毎に交加ぬる紀二六なる〳〵代四郎も亦件の事に趣を人の風聲に呼知て胸
稍安くなるものなるに又その故に那人がいふ政元主に惜れて還さる日のあらざるべいふ
きべきとたるに一箇果せば又一箇憂に堪ねば立ずく五條頭に紀二六が還るを待らく
那実説と聴るも胷は平ざりけり不題管領左京大夫政元主次の日親兵衛を
招せるく酒飯の郷食饌大くなるまでその後別席にて面談あり昨日は良茱と贈
られしより撲傷児們は一夜の間に皆癒りぬと笑えるに他們は和郎の敵なる

愛せらるべき者なるに反て仁慈の厚に仁とふ名に恥るとなる賢者の心操を感
おもはるに今日の儲は勝態舞ゆく又その薄義は良茱の報ひなりと解ふ〳〵時服
巻絹金銀などの産出物を與られ親兵衛は只その欽ぶを演て只顧推辭めども
政元なほ分説と聴く〳〵頃く有司吩咐て宿所へ齎し遣けり是より後も政元を
官務の暇ある毎に親兵衛を召せて今日は庭の丹楓と親せん明日は濃茶と薦ん
とく〳〵晤譚に當日を消せる毎に舶来の調度珎物或は武器金銀衣裳などを幾
番となく與れども親兵衛は欽ぶを辭ふを改元聴さずして必宿所へ遣れば親兵衛は
已とて辭ぶをその與へられ東西に毎に目録年月時日まで詳に寫着て那小吏なるに預
けて小吏名ちろるく皆長韓樞に藏めく隷僕們に守せけり徒て又改元は
有一日親兵衛と晤譚の折恨は面色をそのやう曩に我若鮎の名刀を目和郎に
取せ〳〵腰に帯るとなる又我家の花號ある衣裳と袋襲欲與へに身に

着こなしとりまぐれぞこりろふ稱ふるよりのやある。と問れて親兵衛答て稟さく。仰寔ふその以あり。御佩刀はち〳〵御服章も重職有功の人々るゝぞへ賜りくゝいはむふ尚一介の功ふ見東藩の小臣ふ被けさせぬひさる。御庇を思ふざるふあらねどもいかゝせん小臣が佩る短刀も則是神授ぞ。大刀い安房の老侯の恩賜の名物でいへば縱膝丸髯斫とも云れふ易べく思ひいるを入這衣裳い安房侯の賜ふ一東西ふれば破るゝまでも身ふ着て餘香を拜ぞ。朝々夕々逆旅の憂と慰めるの愚衷と查ーぬひるべ。ん疑ふ解らべ。言不敬ふいへども胡馬の北風ふ嘶くも燕雀の南枝ふ巢つくるも是その本と思へば況長旅遠客たる者誰ろ望郷の情るかゝんや。新恩高ゝざるふあらねども舊恩の淺ふまるを願ふ早く身の暇と賜りて放ち還さぬひるべ。十萬金ふも弥増せる御洪恩ふてそとらふ方正直言權貴ふ撓まぬ忠義の心移らねば改元ふ沿る堪ぎゝく。默然ると半晌許。憶ぎも嘆息ぞて適忠義の後生るゝ我も亦身の暇と取せまゝく思へどもいまぞ上の御

免許あらねば今ぢふせんかさる。和郎尚上の御意ふ稱ふく。安房へ仰遣され召使んと宣ぶ安房殿推辭まゝゝや。推辭い君臣いふ〳〵違誕の罪と免れん因て悄地ふ問べふ近曾東國ゝる里見結城ぶ反逆の風聲と告る者あり。且今茲四月の比ゝよ和郎ぶ毎ゝる七大士並ふ里見の士卒數百名結城の古戰場ふ來會ゝて逸足寺と破却せまく欲ゝる乱妨の事の顛末我少く所い箇樣〻〻と德用ぶ說く詐の趣言詳ふ其ふ示せば親兵衛い呆果て父ひと忍びく答るやう。恐れるぐゝその一義ふ都く偽少の謀のゝあるべきのあひひぞ。那日ふ亦小臣も躬方の危窮ふ救會ゝて一臂の力と盡ゝ知ぎとふるひぞ。首ふ箇樣〻〻ゝ尾ふ又箇樣〻〻ゝとそ、大法師の宿願ゆく。大念佛供類の事。德用堅削ぶ妒忌の乱妨堅名經稜根生野素頼長城揣利ぶ假捕使の事他们ぶ奸虐事敗れて立地ふ罪せられけ。諍斷ゝ言の趣又那地藏菩薩の利益成朝の賢良善政その既ふ畧と解て又のやうかの日結城の法延ふ會ゝ。

我義兄弟七八名と蛮崎照文主僕の三都て三十名ふ過ぎざりしふ數百名とい誰ひとけん且主ゆくい義実義成親子の忠信ふ感ぜぬ世以知る所ならざ成朝主と親しくぞ又成朝主も賢良の吟えとさくふ何を恨ふ將軍家ふ對しまつりて逆心あらんや徒ても猶疑ふく思召さば那地へ間諜使と遣し玉ひく地方の民ふ所しぬて紛れふぶべもいなぞとふふ政元駭嘆して然ても事皆差ひふけ好々我せ術ふ秘よく推禁めく次の日両三個の間諜人を猛可ふ結城へ遣して事の虚実を探らしむふ往復三十日を限りとしふ最秘密の使ふれば復六並ふ有司仁さへらまざ知ぬもヨヌくりけ有徒しかども政元ハい親兵衛を留んと欲しふ心已くくて左さま右さま思惟るふ他忠信の性ふしも華洛のく能ふらまざ熟ざる是少年のるふあれば反く村落を好とて只其故郷を慕ふのみ居るとふふ年を歴く京師の花の香ふ醉ふ然しも慕ひし舊里の疎しく思ふ心ふ移る所賢とふく不肖とふく人情大ふ異るふば新恩卒ふ舊恩ふ勝るふ引れて感服せん然るも他い武勇と表裏も女ふ美少年ふるめと倘我臥房の友と做さば恩愛是ふ濃ふく年園ぞとも我股肱の家臣ふ願ふべ我い愛宕の行者ふあれば敢女色ふ親しまざ男色も亦今まぞ然なり機念せぞしかども只是他ゞ與ふべヨヌ年の彷法空ふるとも惜ひふ足らぞ悔もせぞ艶簡を遣ん媒妁をもく思ふ心を知せん扶不ふ。それよりもうちつけふ口説てしと。胸ふのみ思ふ心のそぶる是よりして親兵衛を屡召よまる折毎ふ漫ふうち解く親を思ふ酒を浮ひ情を餌りそもく哄誘さん と欲まれども親兵衛い酒盃を受戴くのみヨヌく喫まざ問ふとあるべ誼て答へ問ざれば默然とて毫も礼儀を失ふぞ語の次ある折い只身の暇を願ふのみ現墻固ければ狗児入らぞ窓破れざれば風融らぞ改元情慾の煽るも親兵衛ゞ言と

行ひ。毫も欠る所なければ。靴を隔て癢を搔く。心地せるのみ。凝情と果さぬ。臆念いろ〳〵に做りかど。素より色の為のみなれば。なほ恣に思ひ捨て。行法精進をよくするめれども。猶親兵衛を惜く放さぬ。他が身の暇を請ふ毎に。只將軍家の御免許。許すと幾もなく。俳り唱く。久く豪留の関を許さぬ。嗚乎這改元の佞欲奸欲。親兵衛が武勇を愛るの是切てのゆゑ〳〵。更に亦その容貌の美麗。きに心惑ひて。悄地に龍陽の思ひを做すに人を知ざるのみならぬ。果して衣冠の小人なるも。則是親兵衛が。一時の厄に使ひ。造化の小児の所為なるか。蓋以るに。在昔將軍阪上田村麻呂の大宿祢。身長五尺八寸。胸厚一尺二寸。向て以視べ偃たる如く。背く以視べ俯に似たり。目は蒼鷹の眸を寫し。鬚は黄金の線を懸く。重瞳と云へ則二百斤。輕と云へ則六十四斤。動静機に合し。輕重意に任せ。怒て則眼を回せば。猛獸も忽斃れ。咲く則眉を舒れば。稚子も早く懐く。ちを

り。屢東夷を遠征して。戰功抽史に灼然く。冠亞相に登れども。豈蛍雪の樂を改ず。忠信武略胆勇の。和漢に秀し。古実に因るに。今の大江親兵衛は。うち見る所綽約る。只是艶冶の少年。笑ば則是が為に心惑て。悲憐の想ひを做せば。女子小人。改元の如くにあり。又その武畧勇敢の英名を。昔者の鬼神の如く。害怕まる。邪魔を禳ふの門護とも。その故に其形貌を以人を取れば。聖人も衍心を起こと。又その言を守るのみぞ。其行ひを視るに。あくねば君子に似る。小人あり。誰か八犬士に似る。唐者ぞ。其面貌と稟る氣質貝は。各大同小異なれども。皆始あり。終あるべし。俱に仁義八行に稱ぶべしとなん。看官是を思ひとかー。間話休題。小程に親兵衛は。京に在ること百日。許滞るべき。宿の庭面に。冬枯の虫聲絶る。朝霜白くなるめるに。永炭合は權貴の與に。陪堂にせるに。身を不娛く。果敢なく。早くも暮にけり。

第百四十回

惡報明を失ふて変ふ懺悔と事を
神助妃ふ因く反て寘罰と成る

話表丹波國栗田郡茱師院と字せる寒村ふ竹林巽と喚做す浮浪戸あり。其ゞ野合の妻の名を於兎子と云いひけり。原是豊後の大友が家臣なりしふ年来交浅からぬ同藩の士某甲ゞ妻と密通あてありしと事發覚れんとせし程ふ。有一宵巽ふ件の淫婦於兎子と偷ミ出しゝ。共侶ふ遠く走りゝ。影と躯し迹を痕め。此ゝの由縁を心當ふ這茱師院村ふ流寓ひ来つ。於兎子ゞ良人の貯財を竊ミて盤纏ふあける餘波猶三三十金あり。ゞ隨即白屋の細小るを購求めて。膝を容るゝの易ふ似くるも。坐ゝ食へば箱も空。且巽共ゝ性として。酷く酒と嗜むとして。飲食の友絶る間なく。貪乏揺い横りそ。貢子の下ふ充るゝ。絶ふ一稔あまりの程ふ。銭盡て見りる友なく。朝ふなる煙と共ふ心滅ぶく思ふめるゝ。巽ゝ隨ゝ性ゝ弱の本性ゝ。

学ざれども画意あり。走書てゝ人並れ人の與ふ與れて。薪を樵ゝ草と苅ゝ。山田と畊ミ力ハあくまで只得於兎子ゞ芋と績ゞ稍繰習ふ絲綿の然だゝ細ゝ技ゝ口と餬ふ足らざれい輙の鮓の泥ふ吻く。心地のゝ在りける程ふ巽ゞ隣の屋主人ゝ六十可の老人家ゝ。箕利水九里平と喚做る。地方ふ舊ゝ荘客ゝれども。近曾妻世を去りて男女の児子一人もなく。只此許の田園あり。ゞ開を人ふ管け畊さゝ。那身ハ繪馬を賣て活業と。是則半農半商ゝ。然ゞとゝ侍る村落ゝ。ヨヌくも繪馬の賣るゝ。と看官訝りなふもあらむ。蓋本村の東盡処ふ瑠璃光山茱師院と喚做る。一座の大刹あり。因て村の字とゝ。其山院の本尊佛ハ。則茱師如來ゝ。佛の御長三尺四寸。二光四大ふ像ると云。左右ふ子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二神将排列あて立ふ。其面貌宛活るゞ如し。顧古推古天皇の十三年。夏四月天皇。鞍作鳥司馬達ゞ孫ふ命あて。ヨヌく佛像を造らせゝ。ひまゞ高麗國の大興王遥ふあの

義を守知て黄金三百両を貢上りその箔料ふ充んと願ひ。あの一佛十二神も當時
鳥が造る所今文明十五年を距ること八百一十九年名工の舊作祈る隨意自然と灵験
利益あり。ちなみに難治の病痾あるに。世ふ願ひ祈るあるに老弱男女何れかれ
通て皆只病痾と唱て深信祈請をそ利生を仰げば感応あるとぞ。然ば古歌
ふも南無薬師あれみめぐ世のあふぎらふも病ひるぞやと詠てまゐらせて負ひかり
ける女房の宜光所縁を辺りとふ心操ふ同じかるべ。誠や這御佛近辺頃ハ殊西国ふ流行
せるべ京浪速なる良賤士庶丹後但馬播磨美作の農民商賈路の遠近も近るも
も入替り立代り詣る願家間断なし。開中ふ祈りまゐらし。願事成就あるる男女いその本
命の画額をまゐらせ。なく賽願をも假令ば子の年ハ本命なれば鼠を画ハ額をまゐ
らせ丑の年なる牛をまゐらせまるを恒例とも。其本命ふ因て求る十二生肖都てかくの如し。
開ぶ中ふ俗ふ寅童子と唱る神将殊ふ霊験利益あり。そ本尊薬師如来ふ弥

増て祈る者多ければ各本名ふ拘らず虎の画額を供る。願家勘なくぞと。然ば
こそあれ九里平ハ村落ふ似げなく画額を賣くして生活ふ做も故ふ這灵佛ふよりて之
間話休題。小程ふ箕利水九里平ハ件の年の秋ハ時候ふ老病殆身ふ逼りて起居
安からぬ。其比隣なるとりて。初ハ且於兎子を央く。薪炊の支を任用し。その後亦
巽を招ふ画額を賣せて。活業の幇助とも是ふよりて件の夫婦ハ二食日ふ
日ふ腹ふ充く。瑣瑣の鮮果ふ据ふ似れば陽あハ九里平を勤り慰めて他ハ心を安らまし
め。陰ふ已ハ田へ曳く水より先酒價の為ふそ錢を偸み米を糴む夫婦の枉事勘ら
らねど九里平ハこれを知ぞ病髄なる老人の宅者ハあるぞ憑ハこれ親族とそもるハ身る
べ既ふ涯りと思ふ折言恁々と他ハ示あそ。遂ふ兒共を養嗣ふあり。村長並ふ五保の
甲乙ふ告るどして。所帯を譲渡あるハ其歳暮のあるハふ九里平ハ春とも待ぞ漸
漸ふ病衰へ。黄泉の客ふ為ふけり送葬の事。七七の追薦ふども兒共於兎子ハ吝

嗇ゆゑ。人並るゆゑ要せぬ恩愛を亶示て恩愛を思ふ素是浮薄の本性なれば夜消の盃に酔れども。家廟へ茶湯を進ぜ夫婦その身を揩磨けども義父の墓ふ生茂る草を拂ふ草をも芟らぬを人譏れども物ともせぬ。僥幸ふ時を待て濡れでもあれ這家ふ支婦類嗣ふ做りしより画額を賣るふ愈利あり何とぞれが九里平が京ふ繪馬繪額の問丸あり過ふ其里より買合る故ふヨヌく賣れども閑らぬ然るを記共を画意あまべ画額の下地を同村なる山幸樵六と喚做しる樵夫ふ誂へ造らしてみづから十二生肖を画くをもく駝馬運送の費ゆく利市三倍の閑あり。加以義父九里平より相傳の田圃あれば初の艱苦をも忘れて後ふ生活ふ身を入れぬ於兎子も亦酒を嗜めば餉を討め美酒を欲る。飲啖ひふのゑ心を用ひて夫も妻も共侶ふ醉ふを涯りふせざる日なければ入る銭少るふ趕續ぐぬ賣買の利のヨヌるも九里平が約束て足ることを知れる事及ぶべくもあらざる勢ひかくの如くゆゑ。両三年を歴る程ふ異ゑ年来の酒毒ゆゑ。頭顱ふ粟の像を瘡

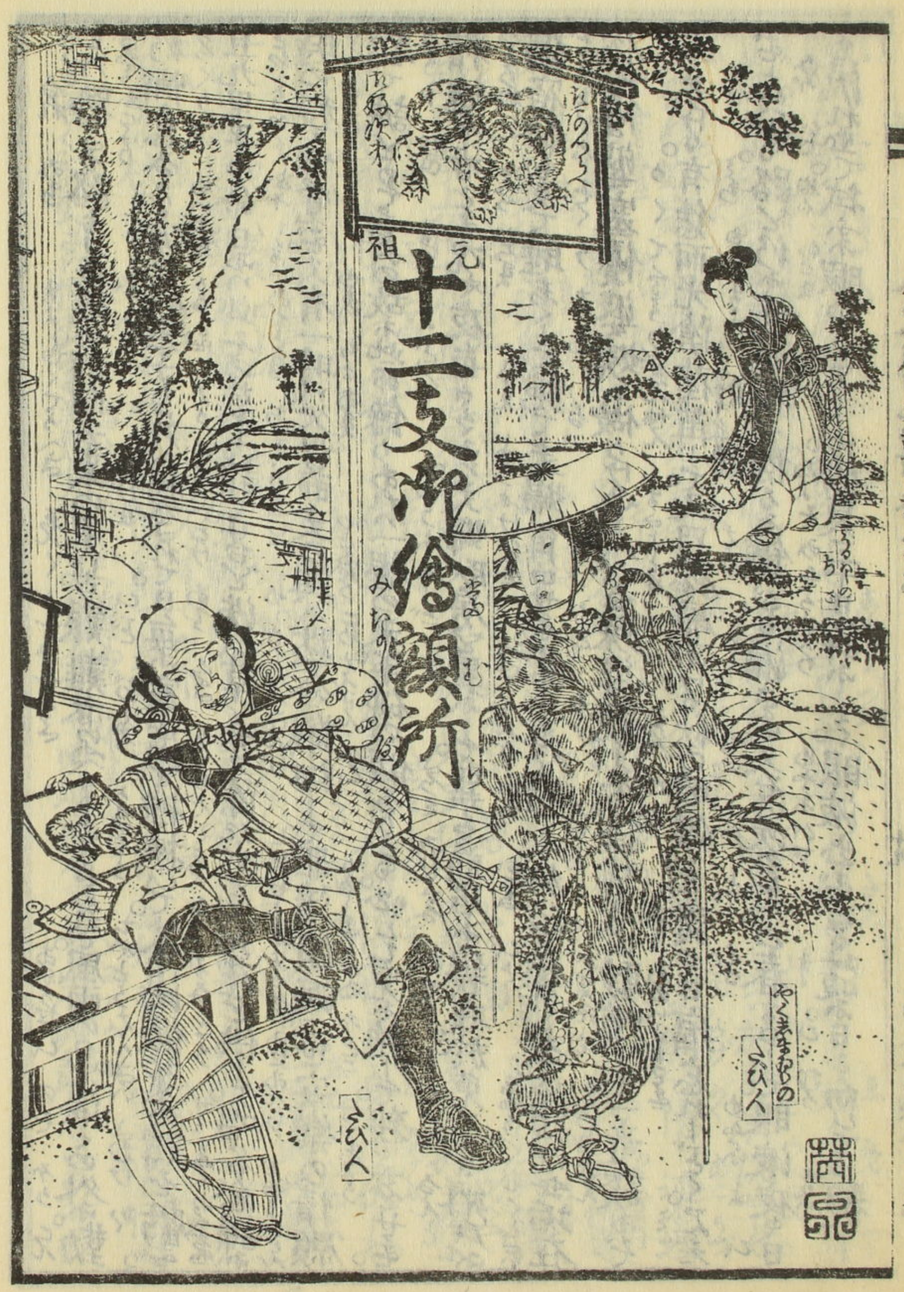
ヨヌく出来て。梳るべくもあらぬ故ふ酷しく頭痛して夜も亦枕安らねば醫師を招き。湯薬を求めく飲も洗ひもれど效いあらぬ瘡潰て流る膿ふ白酒の壜の漏るふ似るべく或ハ又腐りる粕ふ似て最臭を拭ふ暇あらぬ其膿竟ふ眼ふ入りて痛むと甚しく目も亦ふえぬるるしるべ於兎子も倶ふ胸安らぬ神ふ祈り佛を念じく。薬餌の價の少を数ひて療類ふ徙て盡る程ふ約莫半年許ふして頭瘡いるどりるく愈しなど夜ハ尚両眼共ふ痛みて曉天より稍瞳るのゑ倦る病苦ふ拘つらひて賣買も甚ぬ程薬師へ賽願ある遠近人の與ふ不便なと。薬師院より沙汰せられて門前る経紀人ふ画額を賣ると呼ばれば異於兎子ハ怨ふ沿堪ぬ。躯て樵六を憑む遣ぬ。村長ふ告げ。薬師院ふ懇て美義父相傳の繪馬家枝の由緒を云云とのい達て他人の賣る画額を禁んと欲されども異が市店ハ稍久しく賣買ふ懈りて。薬師へ詣ふ衆人ふ便宜を失せるしし上れば薬師院の役僧ふの義を外めて。敢その願を許さぬ素

よりて本村の囚守より隷られる某師院の寺料ゆゑ勢ひ爭ふとなざりて巽於兎子ハ憤りゆゑ沼堪ぎ倶ゆ罵れども俗ゆ云草爐辨慶ぞこざりて粥もう然巽を明を疾くより筆把るべくもあらぬれば只得九里平が世ゆ在り時の如く又那京ゆ問ゆ画額と誂へ送らして是と於兎子ゆ賣らもれども中絶る市店ゆ某師院の門前ゆく別人の賣る画額ハ詣人ゆ便よければ引ゆく及ぶ只是巽を先代より地方ゆ舊る店るとして此の花客ゆ賣買のヨヌ寡初ゆ似ぜ且みづから画るぎりより利いと細くて夫婦の口腹と頤ゆ足るべくもう然も命の蔓と思ひ義父相傳の田圃さへ某料と借財の債ゆ逼り沽却して他の宝ゆ做れば撥集めても藻塩草一握の米一緡の銭ぶゆ沼ぐらくるゆ貪の病の苦身の疾着ゆ弥増る巽を心弱くるして先非を懺悔の懐ひあり互人奸民強盗も人として本然の善心るゆあらぬれば有一日巽を於兎子ゆ曰ふ我頃者つらくと過去来と思惟るゆ咱ゆ伜を携てその地ゆ流寓ひ始より幾程もう銭盡せ術もるりゆ料ぶも九里平曳の讓を受家と継て然も世渡り易るゆ悪癖の餘毒ゆ暴疾鼓瞽者ゆるりゆ那田圃さへ繪馬家技と両ぐ失ひて幸る途上ゆ幸る紀ハ主君と親の洪恩と忘れて他妻と走るる冥罰ぞあらんぞ是ゆ就ても九里平曳の讓とゆ受るる年忌月忌と思ひも出ぜ家産の位牌ゆ香花と賄ゆも

るりゆと死者ゆ霊あらぶ朽惜く思れけゆと心つれて身を措くゆ所るれまで天おそろゆ因て渾家と商量と今より迭ゆ新ゆく九里平曳の菩提を吊ふべく旦難病平愈の為ゆ某師院へ日参して某師十二神の御前ぞ懺悔をあく念佛を百万遍唱へまらくん然だりぞハ尚先非と償ゆ足らぐれば色と酒とを欲まるとるく今宵るぞ世在る涯り我ハ渾家と雙宿せぜ各臥房と異ゆして持戒不犯の信士男信士女ともるりゆ不忠不孝不義淫奔の罪障竟ゆ滅却せん現世ゆくゆ。

晦冥より闇に迷ふ目の疾しきの隨ふして真如の月を瞻るよし絶てあるぞとも死して閻王冥
官の呵責の答を免るゝ来世憑しかるべし。渾家のあるに甚麼ぞと問へば於兎子は沈吟して
現らるれば奴家も亦親胞弟兄の差べし思ひで良人は叛いて身と俱に影と隱し迹を埋
めて稍住熟しこの村に牝牡くゝしの年月を過る里る親前夫の怨さへと想像れば神佛も
憎れて怪ふ寅縁る禍鬼の出る狭と豫より心つけても今更ふ悔て及ばぬ罪過と償ふ所據へ
山雞の峯上隔て侶宿せぬ兄弟品ぬ一生涯幻に果さば切ても罪滅ふるべしと好主張ふ
ぬべ
ぬるか奴家も俱ふ幻ひんひふして背ぬ伯ぬ身を投伏しく
豊後の城隍當國の諸神及瑠璃光山る茱萸師十二神と遥ふ拜と默禱して一雷時丹精を
凝らしの恁而祚ち今宵より家庭ふ朝に廻向して百万遍の念佛を果さば臥房ふ入ぬ又
次の日より杖ふ撫りて辛くして茱萸師院へ詣て茱萸師十二神を一個々ふ拜とまりて罪悪懺悔せ
ざるとゝろくその丈さの便路る義父九里平の墓参して必廻向をうける暴疾聾者のゆゑ

熟る路もり片逕ふ前向去来の辛苦艱難亦ぶくもあるぎれと風雨の日と除くの外ふ勤
幻懈怠るるらべ於兎子もそれふ將ぬされて日毎家庭と極拂して茶湯飯菜の賄を虧ぬ
且九里平の命日ふ必その草奉ふ詣て苔と洗ひ草と芝除ぬ水と沃ぬ花を供して唱名念誦ふ
時の移ると覚ぬ又有一時ふ父母前夫の與ふ默念懺悔して罪障消滅二世安樂の情願
都て誠をめてまの故ふ此の餘りあれ一握の米半磯の飯るとも必ず兒ふ施して殺生をせぬ
精進を旨とぬ況や夜毎々々ふ夫婦臥房と異ふして臥共を前店ふ寢在於兎子を納戸ふ
獨宿れども反て睦ゝして絶て夫婦角口せぬ常ふ志と同くして幻ひと齊くあて清淨垢在
俗の優婆塞優婆姨ふ做りけると人みる疎ぬ親ぬも怪むまでふ駭嘆して一奇談ふぞ
あるける有徳而光陰仕甚して又四稔歴ふける秋の時候より臥共が目痛忘れしとく又え
ぬとへども路と幻ふ迷ぬ物を探るふ鍼ぬも漏さぬ又その次の年の春より眼液夜も日
も流れ出て拭ふ暇あらざりしふ約莫二十日許ふして眼液出ぬる隨ふ日ふ向ひても觀し


十二支御繪師
えび人
えび人

おとこ
おとこ
茶師院村平
繪額を賣る

くるぞ。是より才ハ四五日と歴て有一旦毘異を不圖起る程ハ失る両眼又明ゆく。兎も角笑ハ置く露まそもとえぞもとハ物ゑゝ一ぶゑを什麻とだるハ單心の花開く芽出一丹楓の色出疎き於兎子と喚て。恁々と告れば於兎子も共侶ハ天ハ歓び地ハ喜びく。是必葉師如来の感応利験疑ひなしとハ毘異を感涙を拭ひもあへず潔ぎ浄めつ恭しく逆ハ葉師院の方ハ向て伏拝む又伏拝む深信胆ハ銘けり。然ば毘異もその日より筆把る枝ハ自由と成れば又樵六ハ誂て画額の下地を造らしてみづゝ十二生肖を画くハその五六年排斥たりける。白人画ゑるハのゑれば狩筆薦ゑて初ハ似ず彩色殊ハ美しく巧ゑぞとのふのゑれば未も亦葉師十二神の寞助ハとと感悟して画額一枚賣る毎ハその直の内をもて銭二文残し措て葉師院へ詣る毎ハ本尊並ハ十二神へ必是をまゐらせて愈寞福と禱る程ハ毘異が画ゑて賣る額ハ京の向九より禀販ゆ。画額ハ優まりと批評せゝるとく賣買日ハ増く勘くぞ葉師院ハく賣せる那門前の繪馬店舗ハ有甲斐もなくゑるりのゝ。

たつこ きたろう

毘異も京ゑる向九ハ年来の債あり且借財もまゐれば做ても三百六十日家ハ宵越せ銭あるぞ井を猶夫婦両挿うゑく。於兎子ハ茸と績ゑ綿を繰ゑ或ハ孤獨ゑ居人の與ハ鮮洗衣の微賃縫刺して最精悍ゑく挙動ハを村民们ハ見て聞ハ亦一奇事ゑと云人の噂ハ七十五日の涯らあれば春夏過てその年の秋の時候有一日一個の行童の最美麗ゑるハ一箇の袱裹を引提て飄然とゑ毘が店舗ハ来ハけり。這時毘共ゑ店舗ハ在り画ゑ一額と彩色んとて。膠と着火を吹く程ハ憶も頭と拾げてゑれば這行童年歳ゑ十二三ゑるべく。業平朝臣の童顔秋光源氏の稚逹欽日枝の愛護狭梅孺狭と思ハ可の一少年。正ハ是丹花の唇画蛮の眉歯ハ瓠瓜の種子と並べ眼ハ二星の隈ゑるゑハ異ゑぞ。身ハゑ五彩の裲襠ゑる夾衣と被て浄ゑ白練の奴袴と穿ゑる。登時毘異ゑ行童ハ向ひく。和子且這方へ找せの何ぞの御要ひるや。と問へば答て然へとよ。我ハ這頭ハ程遠ゑ水山院ハ住る者ゑ葉師十二神の

内中第三なる寅童子ハ宿願あるて虎の画額を献まく欲ま汝ぢ画く十二枝の額を孰の獣も好と云人の噂ハ屢ば知て。丹を誂人為ハ来よけ。隊画ハ虎あるや。と問復されて然ハい價賤し。画額ゑれべその像だらと左ゆ右ゆ。涂粉ーけへども。御意ハい稱ゆまいんと。ゆ。傭ハ建累ゆる。虎の画額を援出て。則是ゆ。と遞與を行童を受奉ゆ。ほらと視て。現好々是よゆるい好けれども。まゆ足ざる所あ。恁ゆ年歳ハ似げ。博士態ハ似れども。虎ハ素より這大皇國ハ絶てゑれ。獣ゑれば。始唐山人の画ハ。古昔の画工ハ本ハ。寫ゆ。後人丹と。又師表として。寫ーうゆ。今ハ至れりゆ。よくその毛と画く者ハ其骨格の錯ハを知ゆ。又よく形状と寫ゆ。眼口耳鼻髭再と尾と。前後の脚牙爪まで。似ゆ。不古。這那と比べ見るハ。ゆ。常言ハ虎と画く。狗ハ倣れると。画工世俗も。知ゆ悟ゆ。好と。和筆ハ虎の寫生の。ゆ。ハの故ハ。そと。鮮ハ。祇裏と。徐ゆ。ゆ。我誂ハ。ゆ。ハ在り。是見ゆ。と梧桐の箱ゆ。

出ゆ。ハ故ゆ。ゆ。菊軸ゆ。這行童ゆ自柱の釘ハ。撼れば。躰て見ゆ。是則画虎ハ。勢ハ活ゆ。如ゆ。ゆれども白眼ゆ目子ゆ。行童又巽ハ鮮ハ。ゆ。在昔宇多天皇の寛平二年。唐朝昭宗の大順元年。其國の酋長商船ハ就ゆ。雛虎一頭と拂林狗二頭と。貢勢金岡畫圖ハ工ゆ。世の人稱ゆ。神筆霊畫と。金岡則勅ハ因て其虎の眞形と寫さまく欲り。二個の児子相覧公忠公望ゆと相俱に。日毎ハ檻の邊ハ造りて。虎を覩ると百日可親ゆ。隨意是を寫せば。三個の児子相資て着色ハも亦真毛と畫せる画稿七八十幅ハ至れども。いまゆ。金岡の意ハ慊ゆ。いまゆ。虎の怒れると見ゆ。と思ひて。恁ゆと。豢奴ハ相譚ふハ豢奴則ち。ゆ。ハ虎の睡らんと。ゆ。ハ折捍棒と檻の内へ突入れて。打驚せば。虎ハ忽地振然と身を起し。背と高く。眼を瞋ら。爪を張ら。尾と建て。哮る聲ハ天震ひ地動き。巖石碎け。草木も廬舍も。共ハ反覆る。と思ハ可りる。猛威凄しかりれば。人ゆ

文政雅藏版

駭怕るゝそゞ中ゝ單金圖ゝ伯若とゝて料紙を啓ゝ筆と染ゝ瞋虎の光景を寫さと羊晌許既ゝて寫去得ゝける其欽び大ゝ喜ゝ特ゝ得意ゝ稍久ゝうゝく絹ゝ寫きよをきく寫真を宗とゝつゝ餘の画稿ゝ咸焼棄て是を朝廷ゝ獻りゝゝば帝則叡覧あるゝ精妙幾真ゝ逼れゝ。ゝれども其の眼ゝ烏珠ゝゝゝの弐什麼と勅問ありゝゝ金圖答奏さゝゝ外圖の猛獣と今や初て親ゝゝば輙く筆と搦かゝゝゝの故ゝ臣ゝ先那檻の邊ゝ坐ゝく虎を覘ふと百有餘日その怒哮る折ゝ方りゝ則他ゝ精神と使ゝの絹中ゝ寫ゝ藏めゝゝゝば胡意眼ゝ筆と省ゝく目子とゝ仕ゝ低禀さゝ誘言ゝ似て畏れある弐ゝゝども曩ゝ臣勅詔ゝよりて画ゝけける牧馬きゝ夜夜紙中と脱ゝて芳宜戸ゝる胡枝花を駕ゝ人倩ゝ空ゝゝゝば隨即復その馬ゝ絆索と追寫ゝゝ出ゝゝ人倉ゝの馬ゝ怪ゝ奇瑰ゝ況や虎ゝ外圖ゝそ百獣の王とゝふる猛悪威ゝ材狼ゝ百倍ゝ毛属ゝ

ゝれゝ這画倘亦脱ゝる。ゝゝゝ

旬軸も何人か奪ひ去れり甲の国に渡りて乙の手に渡り伝へて近屬の唱寺に在り則是
檀越某甲が寄進者なりとそ然けれども今の法師們の反て俗骨俗眼なれば今の這
故画を認る能はず虎の眼に烏珠を疵と許りそ物を思はず徒宝藏を閉ぢて蟫蠹に做
る能はざる者の多し故に我權且汝に貸て画額の本に模さまく欲せども因く携来る事能
虎を画く毎に是に倣ふ日を累ねて力を竭さば我誂の画額を寫すに足るのみならず其
餘も必價を増て名を後世に貽すに至んと勉よとく〳〵と言詳に諭して疎く件の画軸を
巻含りて相に藏めて卒そ遽與を神童の能辯才幹耳新なる来歴古実今更に
疑ふべもあらざれば其心敬焉くまそに且感ト且悅び謹く答るやう既に知られまつりぬ特に
拙が小可の筆に学び得べくもあらぬ僭る名画を師ふせよとそ貸のまる御好意を虚に思ひ
らず縦這画を習ふとも心許なく技ぬ左に右に仕らんやうなけれども答て疎く軸の
預りる実を書寫して遽與せば行童に受含て介に明日よりまく生活の暇あり毎に

先よくその画を習ひねかし我又折々這里に来て筆法筆意を教授ん但戒む所一條
非如權家の威勢に逼られ或は人千金の利を以て求るとあるともその虎の眼中に聊も點を
べからず倘その瞳子を加ると所忽地不測の禍起りて人を害ひ身をも殺さん努慎まねば
慎まるべと叮寧に教言めく卒とだりに身を起して飄然とく生てゆく程に所其の屋宅を
去りぬそく立て目送りけりその日於兎子は村正の老婆に央れて縫刺の業に就く朝よりも
迄て那里に在りその後も亦行童の屢々に来る折於兎子は紙筆を宿所に在るを所其も是を
告ぶりしに久しくあるまで知ざりけり却説所其もその次の日より件の名画を本として虎の形状を
習ひ画くに始は只慢と七筆の運びも左に右に一切思ふ儘なりしに那行童或は三日に一度或は
又隔日に忽然と出て来て所其に教へ傳神の妙要を授るに最叮寧なりければ所其も憶ず筆
進まで絶て一箇月許の程に其大抵を学ぶ行童又所に誨ていふやう約莫生て活る
物は画くに晴を要緊とす人に男女あり貴賤あり及老幼あり善悪あり且喜怒憂樂

愛哀苦の七情あり。這理りをもりく推考れば。禽獸蟲魚も皆相似たり。是ふ加ふる正面あり。半面あり。左面右面あり。又仰ぐ者あり。俯せる者あり。皆その情ふ從ふ所よく查せばあるべし。我又その義を授んとく。鼠牛虎兎の十二生肖を一箇々ふ画いて。其目子の入ざるを云云と誨るふまも又二十日有餘ふして。拙くぞ有一日行童来て。巽ふらく。汝が画いたる。今いまも我誂る画額の虎を画くべし。其画額い縦三尺横六尺ゑを足れりとも明日より一十五日の間ふ作り出べ。價い乞ふ依るべしとその画額世ふ見れて。人人賞鑒ふ至べ必や汝が画虎を求る者ヨヌ。潤筆思ひの隨ふ。然とても其利ふ惑ひて慎く。ヨヌく画くべし。在昔唐山の李伯時ハ性として歳より好て馬を画けり。後竟ふ微妙を極く。求る者最ヨヌ。小なるを或人悄地ふ諫く。汝人の需ふ応じ年来馬を画く。と抑是幾ぞや。佛説ふ云輪回の理り。倘果してあれば我恐らく死て後必畜生道ふ墮ん。願ハ今より改く。佛像をのみ画けと。夫尭舜の衣裳を服て。尭舜の言を行ふ者ハ則是尭舜。又桀紂の衣裳を服く。桀紂の言を行ふ者ハ則是桀紂。然バ生平ふ馬を画く者。千百幅ふ至るまで。筆精馬ふ入るとハ畜生道を免ざるべく。生平ふ佛像を画く者。千百幅ふ至るまで。筆精佛像ふ入るとき。清果を得んと疑ひ。その義を思ふ。理り切く論ふ。李伯時有理と感ず悟りて。是よりの後馬を画くを佛像をのみ画けり。その名和漢ふ流芳せり。汝が虎ハ李伯時の馬ふ及ぶべくもあらざれども。年来十二生肖の畜生を。幾ともく画けふ。今より又虎を画くことのなかれ。筆精此ふ入るを至べ。玄田生道の悔るべく。欲するとも得べ。有徳れば虎を画くの利をもて。その年来の借財の債をぞふ果べ。栗ふ業を轉して佛画師ふなるべか。然る折ふ我必来て。又佛像の法を取せんとして夫婦の形狀猶幾までも今のごく勉く。悪を祛け。生涯修善の人となるべ。舊悪都て消滅せん。倘この教を背ふ。惑て始ふ復ることあるべ。禍瞬息中ふ起りて。餘毒他郷ふ周流せん。我一片の老婆心を耳ふ收めく忘れざれ。先我画額をのみぞかく。

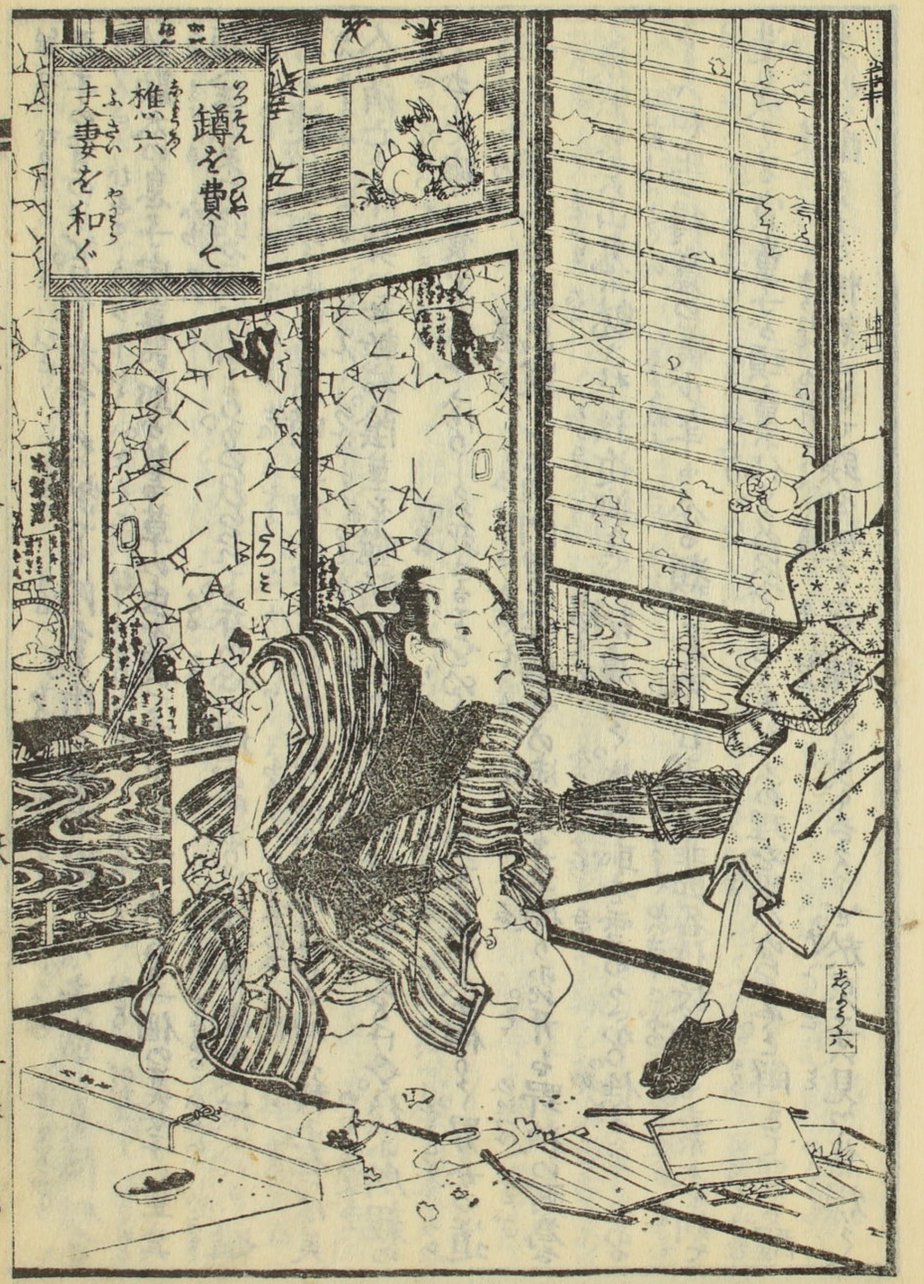
我又折々ゝ来て汝の画稿をつまく欲さ。ふろうてよと解諭せば巽を額御感服して仰美
とゝ云。就中修善の一義ハ妻共侶ハ天地ハ誓ひ〳〵もひがゝでふ名用ハ仕らんや願ハ今ハ
幾番も来まりて画稿の巧拙を御示教仰ぎたまると答る間ハ身を起さ行童ハ巽日〳〵契りた
徐ハ出てゆく程ハ秋の日景の短くて下晡ハふりけり然バ巽を那行童の迷るゝ一雲時目送る
程ハ思ひ付る後ハ人あり屋よ是丈夫と喚立る聲ゝと苛めかけれバ巽を吐嗟と駭て急ハ其
方とたゝへるハ此ハ是別人ゝ也則老婆於兎子ハ瞋恚れる面色凄く抜の花ハ刺ある像く走
て蒐りつ良人の胸前掖捉へ推居ゝも堪ぬ喫醋ハ敦圉ハ暴く噫薄情人何事ぞ曩
ハ先非ゝ懺悔の為ハ生涯不犯で果さんとて臥房ゝ異ハせられハ皆佯りの常精進奴家ゝ哄
ゝく。艶麗ハ那少年ゝ掖入れて乐んとくの所作ゝ〳〵と然とハ悟ゝで我ゝ銑くもん身ハ
謨られて旦ハ出てゝ夕ハ還る夾縫刺ハ暇ゝ往復苦ハ侶挣ゝハ什麼誰ハ為ぞん身れ
茱料東西の没銭のヨゝ〳〵故借を償果えと思ふ〳〵の真実情を知ぞ白ハる心華

心。今の浮世ハ都も鄙も貴ハ賤ハ推並く。頑童調戯をせざるハ家ゝ滅ハ身を殺ハる。
人の噂ハ外ゝぬん身も亦戯氣ゝるその類ゝありけゝ今ハ思合まるハ頃者奴家ハ長
殿許辞ハ去ゝ還る曛昏ハ那頑童ハ這頭より出ゝ来ぬるハ彷ゝハ一日二日のゝるゝね
ども知ゝねバ然ハも訴ゝく地方ハ似げるハ身の皮さゝその容止さ妖艶ゝ孰の御寺の彷童
ゝゝと思ひ〳〵いと疎鹵ゝく他ハ我身の寃家ゝるハ什麼那頑童ハ那里の者那の時候
より誰媒妁ゝく。ハん身ハ逢初のひるゝその情由ゝハ甚麼ぞゝハふぞゝ快ハのぞゝと責る高
聲玉做ゝ涙ハ稜ある巻ハ俵ゝ猶抳る胸前を揺ゝ〳〵仰反らゝ放ハべくもゝ氏ぞ。
聖異ゝ殆困ハ果て且ゝもゝ〳〵の情由告ハ放ちゝ〳〵ゝ心地死ぬ後く
覚ハ。ゝ〳〵ハ拋放ちく端を止め髪撥拍て然而行童ハ来歴画額の事那身ハ奇才ハ
教を兼ゝ己ハ画風くも上達ハる首より尾まゝ箇様〳〵と解示ぜども於兎子ハ〳〵分
説を听ゝハ亦復苛聲震立ゝ実ハ然ゝもゝ〳〵ん始ゝ〳〵て恁〳〵だと奴家ハ知ゝる

該屋に今事問ふまで隠されしは臭気ふ蓋ー乞身の心頑童を愛るは女子より深情八入ふ倍もと狭いべ中垣居て疎まー身を不娯ーらふ獨宿は憑ーらぬ世ふ幾まるぐら存命て何ふせん死ーて怨を復さんぞ。その折思ひ知りねかー。と怨ーて躰近るる刀子晃と。掻含るて。吭をみぐるー刺まくせーを。巽る吐嗟と携り制めて合放さと角へども妒婦の念力ふ當るべうもあらざれば迭ふ叫び狂ふの。画額と共ふ踏摧て阿膠の土鍋繪具碟ら子。ゆーふせん術るべ折るー。外面ふ鴻立人あり。事の光景を覘知りけ。後ろ。とたろう喚被ふ聲共侶ふ身を顕ーて。内ふ入れども憐てぞ。噪がぞ引提さるける豪葛と二舛可の赭漆ー鐔をやをー。壁際ふ閣ぐて。夫婦劇ーぐ爭ひの間ふ分入り推隔て。於兎子が持る刀子を奪ふて。後へ投棄るを。主人夫婦は訝りるー見まば則別人ぞ。樵夫山幸樵六ら。當下樵六做得貌ーて。左を見ーら。右を見ーら。後ろ。主達外聞ーらー。無諍は故ぞふ。甚麽ぞ。と問へば於兎子は端を定めて。那行童の。怨の趣恥も識

も思ーて。そ。引提の水も湯と做るまで。ふ嫉妒の餘遣る端なる。事の顛末恁ぞと告まば。巽も行童の。有ける隨ふ解ふ。我猜まるふ那少年は必是凡夫ふあらー。徒ら。く葉師院る。葉師十二神の第三る。寅童子を信ーまるて。祈まば必祥瑞も影立。又夢ふも見ーて。感応利益多ーと云風聲ふ。よりて思惟るふ恐ーて。件の神童は我ふ感応ふ。せふ寅童子ふ。そ。御座らめと。夙くも心つ。ーて。胡意於兎子ふ告げて。然ばそふ。絶間ふ。我画進て。大画額を寫くふーも足らぬは。則利益の明證ぞを。今一句も告ると等れば。喫醋は婦女子の癖ーて。神慮ふ背く怕れあり。御勸解禀え。慎ーて。嘲樵六。叟那誂の大画額は三尺ふ六尺るを。洒家ふ課て。大魚一隻を画せら。る。晴技へ先材を擇み板を枯ーて。日數と差へを造ら。ーね件の下地を憑むぞよ。とへば樵六冷笑ひて。開は奇特る事ぞら。咱ぞは一切信て。都て名山諸寺院の縁起ふ怪誕不思議の事。識ーて。普く人ふ示ふ。各祖師の道德を世ふ高ーまる方便の。千

おとと


一罇を費して
樵六
夫妻を和ぐ
おとと六

百年の昔の夢を見し者るけれ然でも消るを近く壁を取くいで去歳の夏隣村の弥勘太の息子宇嘉四郎が葛草の虫を捉て在りしに二八許る一個の美女子の單其頭へ迷ひ来て路を問れしかとりものひられて春の心の堪ぎやありけん理る閨中へ抱入れて嬉合ふ逮びふ既よ歡會の時ふ昜く宇嘉四郎ハ忽地ふ一聲苦と叫ぶ程ふ在つる美人ハ消亡く那身ハ全斷や陰茎を噬断られ血ふ塗れて死活も知ぎるりけるを後ふ所親の見出て療養る閑るべりしに死ざるとなれども一身不具の人ふ做りく男女の道絶られば意ふもあらぬ出家して南洲田の玉藻寺の御弟子ふ做りふ開き野狐の所為る狹然らぎ山鬼ふ魅られ狹近郷までの胡虚ふく生涯恥を雪めるかり任るりもあるるきば和主ぶ得意の美少年も命る類ふそもるむぎらふ非如名作故物でも素本と刻て造り成しる寅童子ぶ頑童ふ化てのらべもあるぞか。この理を思ひぬるぞと解きて昵共ふ醒るぶ如く醉るぶごく惘然と呆て頭を搔く在り陳ぎる羌もあるりしと於兎子ハ見く焦燥く。

縱頑童ぶ狐られ又魑魅られ寃鬼られ主ハ心を惑されて飽まぎ奴家を欺ぎ虚事の怨ハ九の世を易るとも盡る日あらんや然べとくあを出く。歸りぬくべ死里るし。死ぬるふ夢ぶと奴ふ儘しそ復刀子を含まくまると樵六急ふ掖林ふめそ潑輾煞轉ぶ身も歹主張畢竟年来深信ぶ過て夫婦侶宿せぎ常精進られば疑ひ起りそ口舌もあるれ嗜酒るべ喫も好又今宵より枕を雙く宿らべ立て床腹冷く迭ふ憑しかざらんや自五戒を美守りそ俗願忍ぶくもとも夫婦夜も日も角組蘆の目を歹き節の短ぶを數く濁ふ漂ふまぎふ家理らぎハ何ふせん巽主ハいりふぞや幸ふ至明の醉醒く咱るぶ意見ふ就んとるべ今中直りの盃させん。とらふを於兎子ハ椎林ふ慶山幸主其截判ハ憎くねども陽たるの和睦ふく奴家ぶ宿所ふ在る取日毎ふ又頑童奴を引入れて樂るべ今日も増く。悔かんを爭何ハせん。詰るを樵六ぶ其頭ふ毫も脱落ハあらぎ其妖物奴ハせん術あり耳を借しれと掖ふせく詞せらぐ

其発示せべ。於兎子い満面うち笑まく。然也〻〻と頷くの。登時異る。又況る〻を釋迦嶽六ふうち向ひい現趣ある叟の教誨我も亦那行童を神狐佛狐変化狐或い実ふ其寺ふ。扈従しと存る神童狐それちあるゆ狐知ねども。葷酒淫慾両ぐ〻夫婦迭ふ戒め〻。年歴ある身のいふ〻。那男色ふ惑んや。素ちりあるべきるねども。遠慮ふ過て於兎子ふ告ぎ又那幼童の名も来歴も居るとふる寺鶴山鶴一も質し向ハせべいつる隨ふ信容れ〻只深信の餘慶とのみ思ひハ我智慧足〻ゆ疎心の失るれい反て於兎子ふ疑ひて恁る口舌ふ及びしと覚ての後ふ今ぞ知る。去の年来愁ふ深信ふ礙り。渡世ふ礙り。亦只念佛三昧ふ礙りくる故ふ魔鬼が刺く。障碍と做ふあ〻むぎ〻ん然べ意見ふ従ゑて。則今日より精進関して。於兎子が心と休めて縦五戒と持ぎとも。掙ふ淫ゑる弱鬼ハ〻とのふなる世の常言て。我身を護る託宣るめ。と脆くも答く兼引く。樵六听ゆ狐

働と身を起して。壁際る鏄と小苞を引提ゑ。故の中座ふ按排て。舎兎ゑ〻〻噛御夫婦先這鏄を見ゆ。然ゆ。僧紀東西ふあ〻ゆ却這鏄鏄ふハ曰ゆ。芋莖新田ゑ江五右ゑ。新婦迎をゑ。と。往日餅を餽来れ。その壽祝をゆんと。諸白三舛塩奠三尾引提く這里と過る折。主連夫婦の打擇を見過ゆかく〻分入り。截判役い鳥尚ゑ〻。年来画額の下地を送る我ゆを得意の花王ゑ。已と。ゑ。骨と折く。今是和睦の一段ふ固めと明日ふ延ん。や。江五右ふ祝義ハ異日ゆく。今這鏄を用くべ。於兎様地炕ふ火ハゆ。ん是よく矣ゑ。と。憑ゑ。抜く。稾苞ハ塩味宜紀刺青花魚。市も嗜る酒の香さ。又魚肉の臭さハ年居多絶て久紀珎物の鼻を穿ば堪難ゑ。其も俱ふる俗ふく。含ゑ。出も烟壜折焼柴の落煙。吹起せども。胸の火ハ滅。於兎子が精悍。小碟大碟執具ひ濯ぐ両箇の茶碗酒中圓れと。樵六ゑ。狐持差配飲同士の献ゆ酬ゑ。日ハ暮て。二更の鐘の鳴ら。面ふ傾げ〻〻。二拜鏄足ると知ねべ。未飽ねども。王も客も然ゑ

ア。ホ皆醉ざるホあらざるバ。樵六ハ卒退らんとて。盞を辞し。欽びを。舒く。ゆう發く身を起も。
框ホ脚下殆やと。於兎子ガ乗れる栖指燭の。夜風ホ靡く片明り。自送果さ。門鎖く。臥
簟儲も今宵より。両枕ホ孤横。狹ものや三布蒲團四席許の小坐席ホ相譚ひ曉
も浮宿鳥。彼岸忽地慾海の深ハ罪過又ハ始よ還る黒潮ホ染るや蜜の腰蓑ホ
ゑ。濡ゝ快樂ホ耽りけ。嗚呼惜むべ。巽於兎子ガ。懺悔の勤行好とハ。ども原その罪
悪重けれバ一善いまゞ全ゝ。早く衆魔ホ打破ら。若夫至誠至信のゑ禱まハ神佛
感応あり。然るゝ。慈よく疑へ。利益反く。寞罔訓ホ做ざるエを。ゆざるべ。畢竟於兎子ガ酷
毒ハ嫉妬の邪猜ホ事敗ら。是ホ加るよ樵六の幇助あり。業火ハよりの又煽ホ。遂ホ巽ガ
浮蕩の骨銅を鑠して尚飽りとせざ。因果を看官思ホべ。這話未盡さ。ども楷數
既ホ涯あれバ。卷を更ゝ下の回ホ。解分るを聽ひか。

南總里見八犬傳第九輯 卷之二十六終